長崎県文化財調査報告書　第194集

稗田原遺跡Ⅵ・下宮遺跡

―一般県道野田島原線道路改良工事に係る埋蔵文化財発掘調査報告書―

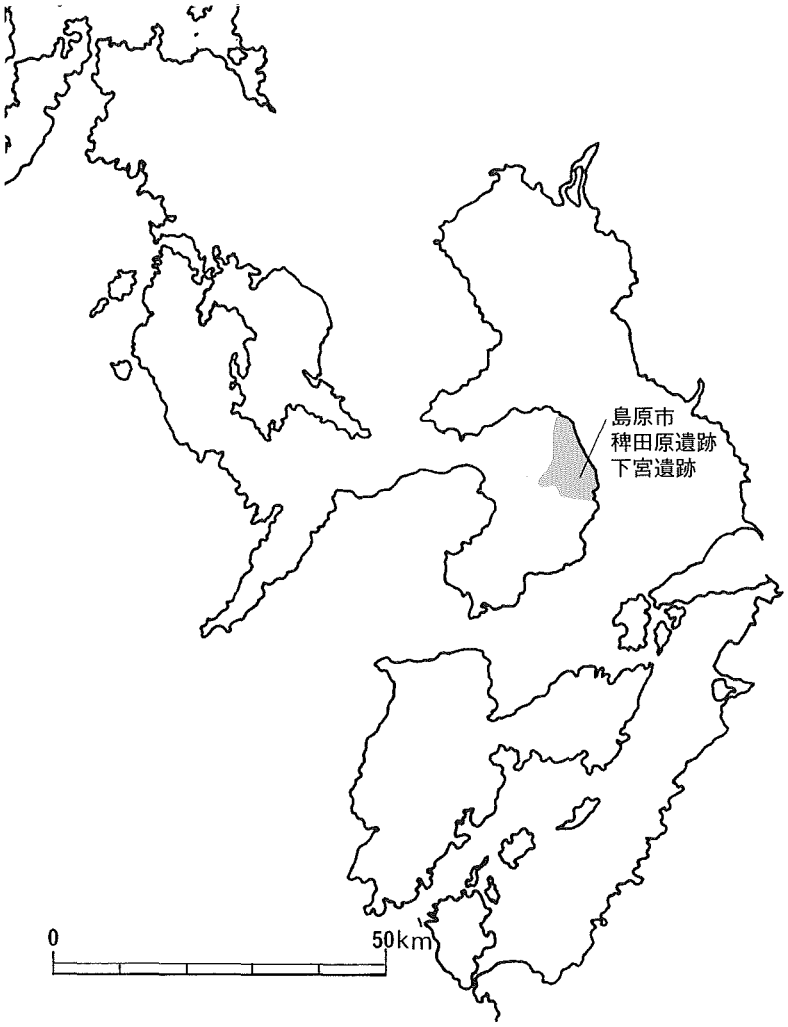
2007

長崎県教育委員会

長崎県文化財調査報告書　第194集

稗田原遺跡Ⅵ・下宮遺跡

―一般県道野田島原線道路改良工事に係る埋蔵文化財発掘調査報告書―



2007

長崎県教育委員会

稗田原遺跡Ｂ地点
北半部SD1-②完掘（北から）

下宮遺跡
竪穴状遺構完掘（北から）

発刊にあたって

本書は，一般県道野田島原線道路改良工事に伴って実施された，稗田原遺跡（ひえだばるいせき）・下宮遺跡（しもみやいせき）の発掘調査報告書です。

稗田原遺跡は，これまでに７回の発掘調査が行われ，縄文時代から鎌倉時代に至る複合遺跡であることが明らかになっています。今回の調査では，12～13世紀（平安時代末～鎌倉時代）を中心とする自然流路を検出しました。流路内からは中国製の青磁・白磁のほか，西彼杵半島一帯で作られた滑石製石鍋も多く見つかりました。また，鉄滓（てっさい）が大量に出土していることから，調査区の近辺に鍛冶（かじ）工房のような施設があったのではないかと考えられます。

下宮遺跡では，古代の竪穴状遺構を検出しましたが，竪穴住居と同様の居住施設と考えられ，古代の人々の居住環境を明らかに出来た点は貴重な成果といえるでしょう。

これらの成果が，学術成果としてのみならず，学校教育や生涯学習の場など，様々な分野で幅広く活用していただければ幸いです。

最後になりましたが，発掘調査に参加された外業作業員の皆様をはじめ，発掘調査や報告書作成に関わった関係者の皆様に御礼申し上げまして，刊行のあいさつといたします。

平成19年３月30日

長崎県教育委員会教育長

横田　修一郎

例　　言

1．本書は，一般県道野田島原線道路改良工事に伴って実施した島原市稗田町所在の稗田原遺跡，同市下宮町所在の下宮遺跡の発掘調査報告書である。

2．調査は長崎県教育委員会が主体となり，島原市教育委員会の協力を得て実施した。調査関係者と調査期間は以下の通りである。

（1）稗田原遺跡　範囲確認調査　（平成17年5月9日～平成17年5月17日）
　調査担当　長崎県教育庁学芸文化課　文化財保護主事　中尾篤志
　　文化財調査員　平田賢明
（2）下宮遺跡　範囲確認調査　（平成18年2月20日～平成18年3月3日）
（3）稗田原遺跡A地点　本調査（　　〃　　）
　調査担当　長崎県教育庁学芸文化課　文化財保護主事　山下英明
　　文化財調査員　平田賢明
（4）稗田原遺跡B地点　本調査　（平成18年10月30日～平成18年12月5日）
　調査担当　長崎県教育庁学芸文化課　文化財保護主事　中尾篤志
　　文化財調査員　平田賢明
（5）下宮遺跡　本調査　（平成18年9月4日～平成18年9月27日）
　調査担当　長崎県教育庁学芸文化課　文化財保護主事　中尾篤志
　　文化財調査員　平田賢明

3．本書の執筆は主に平田が行い，稗田原遺跡B地点（4）②～④は中尾が執筆した。

4．遺物の実測は，土器・陶磁器については一瀬裕子，小川博美，野島愛子，浜崎美加，福山留美，中村千春，今利陽子，末吉紗矢香，横田愛子，津田由紀，増元史絵，山本幸子，奥村清美，山下静恵の協力を得て中尾・平田が行った。石器については中尾・竹田ゆかりが行った。トレースは浜崎・和田美加・横田，竹田，中尾が行い，製図作業は成田万里，今利の協力を得た。

5．本書に掲載した滑石製品に関しては，株式会社埋蔵文化財サポートシステム東 貴之氏に御教示頂いた。

6．遺物の写真撮影は竹中哲朗の協力を得て平田が行った。

7．本書の掲載した遺物・写真・図面は長崎県教育庁学芸文化課資料整理室で保管している。

8．本書で用いた方位はすべて磁北である。

9．本書で用いた遺構に関する表記は以下のとおりである。
　SK：土坑，SD：溝状遺構（稗田原A地点），自然流路（稗田原B地点）
　SX：不明遺構，SC：竪穴状遺構

10．土層および土器の色調はすべて『新版標準土色帖』(農林水産省農林水産技術会議事務局　監修）による。

11．本書の編集は，山下・中尾の協力を得て平田が行った。

本　文　目　次

１章　調査に至る経緯…… 1
２章　遺跡の環境…… 6
（1）地理的環境 …… 〃
（2）歴史的環境 …… 〃
（3）調査履歴 …… 8
（4）過去の主な調査成果 …… 〃
３章　調査…… 10
稗田原遺跡A …… 〃
（1）調査方法 …… 〃
（2）土層 …… 〃
（3）遺構 …… 14
（4）遺物 …… 15
稗田原遺跡B地点 …… 16
（1）調査方法 …… 〃
（2）土層 …… 〃
（3）遺構 …… 21
（4）遺物 …… 30
①遺構・層位出土遺物…… 〃
②滑石製品　③鉄滓　④縄文・弥生時代の遺物…… 〃
下宮遺跡…… 34
（1）調査方法 …… 〃
（2）土層 …… 〃
（3）遺構 …… 40
（4）遺物 …… 42
４章　まとめ…… 44

挿　図　目　次

第１図　試掘坑配置図（1/2,000） …… 2
第２図　試掘坑土層図（1/40） …… 3
第３図　範囲確認調査出土遺物（1/3） …… 4
第４図　調査区位置図（1/2,000） …… 5
第５図　遺跡位置図（1/25,000） …… 7
第６図　過去の調査区（1/5,000） …… 9
第７図　第1次調査検出竪穴住居（1/60）・出土遺物（1/9） …… 9
第８図　A地点遺構配置図（1/100） …… 11
第９図　A地点土層図①（1/40） …… 12
第10図　A地点土層図②（1/40） …… 12
第11図　A地点SD1（1/40） …… 14
第12図　A地点出土遺物（1/3） …… 15
第13図　B地点遺構配置図（1/200） …… 17
第14図　B地点土層図①（1/40） …… 18

第15図　B地点土層図②（1/40）…… 20
第16図　B地点SD1・2①層完掘（1/200）…… 22
第17図　B地点SD1・2②層完掘（1/200）…… 23
第18図　B地点SD1・2③層完掘（1/200）…… 24
第19図　B地点SD1出土遺物（1/3）…… 25
第20図　B地点SD1・2出土遺物（1/3）…… 26
第21図　B地点層位出土遺物（1/3）…… 27
第22図　B地点出土滑石製品（1/4）…… 28
第23図　B地点出土鉄滓（1/3）…… 28
第24図　B地点出土旧石器・縄文・弥生時代遺物①（1/2・1/3）…… 29
第25図　B地点出土旧石器・縄文・弥生時代遺物②（1/3）…… 30
第26図　下宮遺跡遺構配置図（1/200）…… 35
第27図　下宮遺跡土層図（1/40）…… 36
第28図　下宮遺跡SC1～3（1/40）…… 38
第29図　SC1～3十字トレンチ土層図（1/30）…… 39
第30図　下宮遺跡個別遺構実測図（1/30）…… 40
第31図　下宮遺跡遺構出土遺物（1/3）…… 41
第32図　下宮遺跡層位出土遺物（1/3・1/4）…… 42
第33図　稗田原遺跡B地点SD1・2，403号河道位置図 …… 45

表　目　次

第１表　範囲確認調査出土遺物観察表…… 4
第２表　周辺遺跡一覧表…… 6
第３表　調査履歴…… 8
第４表　稗田原Ａ地点出土遺物観察表…… 15
第５表　稗田原Ｂ地点出土遺物観察表…… 31
第６表　下宮遺跡遺構一覧表…… 41
第７表　下宮遺跡出土遺物観察表…… 43

図　版　目　次

図版1 …… 32
稗田原Ａ地点　①調査区遠景　②調査区近景　③調査風景　④北壁土層断面　⑤セクションベルト　⑥SD1完掘状況①　⑦SD1完掘状況②
図版2 …… 33
稗田原Ｂ地点　①調査風景　②セクションベルト　③西壁土層断面　④サブトレンチ　⑤遺物出土状況①　⑥遺物出土状況②　⑦遺物出土状況③　⑧遺物出土状況④
図版3 …… 46
下宮遺跡　①調査区遠景　②調査風景　③東壁土層断面　④十字トレンチ①　⑤十字トレンチ②　⑥SC1～3完掘状況　⑦7B・8B区Ⅶ層遺構完掘状況　⑧遺物出土状況
図版4 …… 47
稗田原遺跡Ｂ地点　①出土遺物①（第20図）　②出土遺物②（第21図）
図版5 …… 48
稗田原遺跡Ｂ地点　①出土遺物①（第22図）　②出土遺物②（第23図）

1章　調査に至る経緯

一般県道野田島原線の改良工事が計画された。野田島原線は海岸沿いを通る国道205号と，愛野～島原間の山間部を走る雲仙グリーンロードとを結ぶ主要な道路として，交通量が多い。

そのような要因から，改良工事は離合困難な箇所の拡幅整備を目的としている。現在の野田島原線は稗田原遺跡のほぼ中央を南北方向に縦断し，さらに隣接する下宮遺跡の側を通っていることから，今回拡幅箇所を対象として範囲確認調査を実施した。

範囲確認調査は稗田原遺跡を平成17年５月に，下宮遺跡及び稗田原遺跡の一部を平成18年２・３月の計２回に渡り実施した。同一道路の改良工事に伴っているため，ここではまとめて報告とする。

(1)範囲確認調査

①調査

拡幅工事予定箇所は，現在の稗田町バス停より北側である。拡幅範囲に２×２ｍを基本とし合計14箇所の試掘坑（以下TPと略す）を設定した。掘り下げは人力で行った。遺物包含層が確認されたのは，稗田原遺跡内設定のTPA・B・C，および下宮遺跡内に設定したTP1，TP2の計５箇所である。

②土層

［A・B・C］

1　黄灰色土　耕作土
2　黄灰色土　床土　しまり強い
3　黒褐色火山灰土　しまり強い，5mm白色礫を含む
4　黒褐色火山灰土　ややしまりがない　粘性なし
4′黒褐色火山土　4に比べ小礫が少ない
5　黒褐色火山灰土　ややしまりあり　中世包含層
6a 黒褐色火山灰土　ややしまりあり　10mm白色礫が入る
6b 黒褐色火山灰土　ややしまりあり　白色礫を含まない
7　黒褐色火山灰土　しまり強い。混入物が少ない
8　暗オリーブ褐色砂礫層　しまり弱い
9　黄褐色粘土　混入物を含まない粘土

［TP1］

1　表土
2　黒色土
3　黒色土　2より赤みを帯びる
4　暗赤褐色土　オレンジ色の粒子を多く含む
5　黒褐色土　白・ピンクのパミスを多く含む
6　黒褐色土　硬くしまる。人頭大の礫が混る
7　にぶい黄褐色土　硬くしまる。人頭大の礫が混る

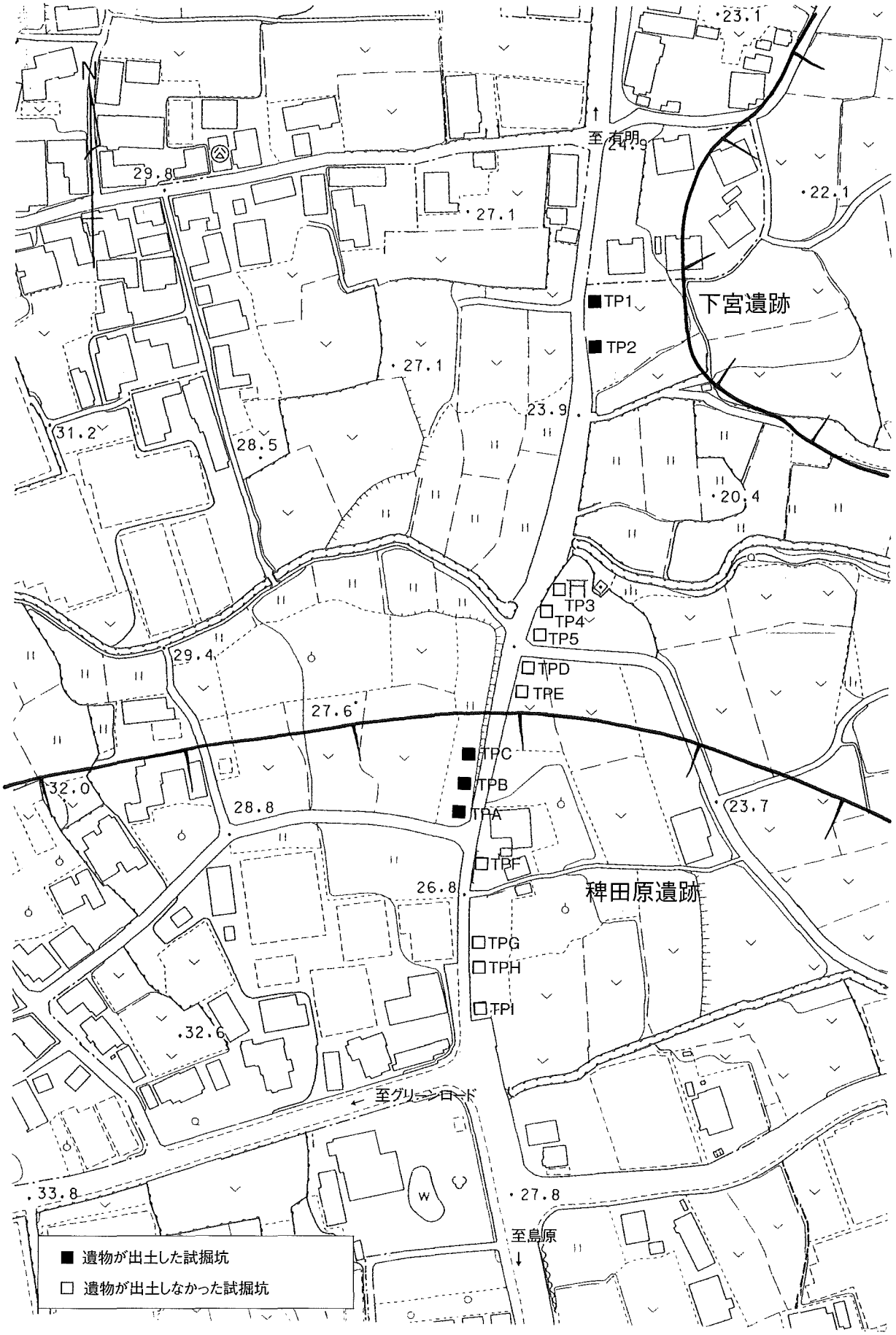
［TP2］

1　表土
2　暗赤褐色土　オレンジ色の粒子を多く含む
3　黒色土　2が混じる
4　暗褐色土　しまりは弱いブロック状に黄褐色土が入る
5　黒褐色土　しまりは弱い小礫を含む
6　にぶい黄褐色土　硬くしまる。人頭大の礫が混る
6′黒褐色土　硬くしまる。人頭大の礫が混る

③遺物（第3図・第1表）

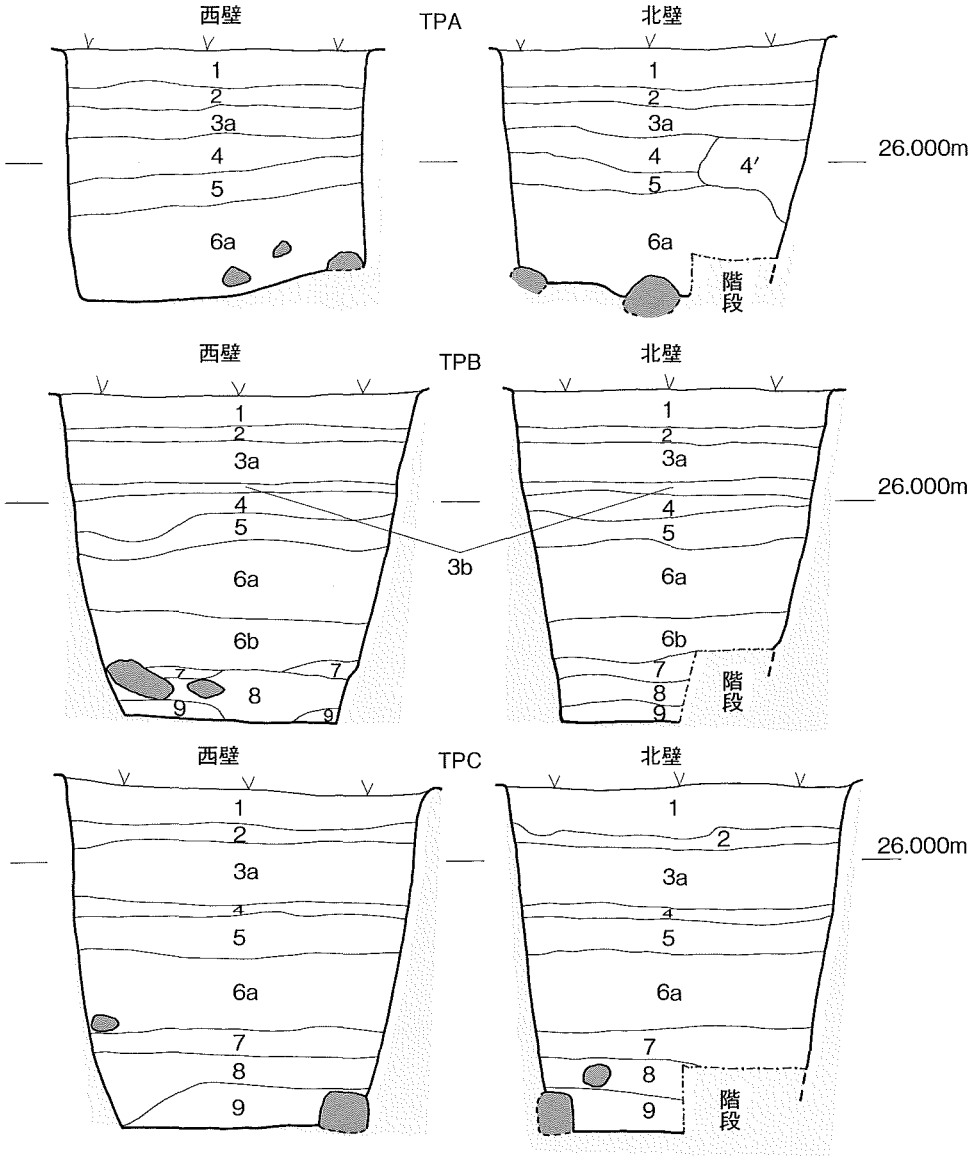
出土遺物のうち，土器，陶磁器は第１表に観察をまとめた。以下に石器に関する特徴を記す。

15，16は黒曜石製。15は石鏃もしくはサイドブレイドの可能性もある。TPDのⅡ層出土。基部と先端部を欠損する。16は石鏃TPCのⅤ層出土。

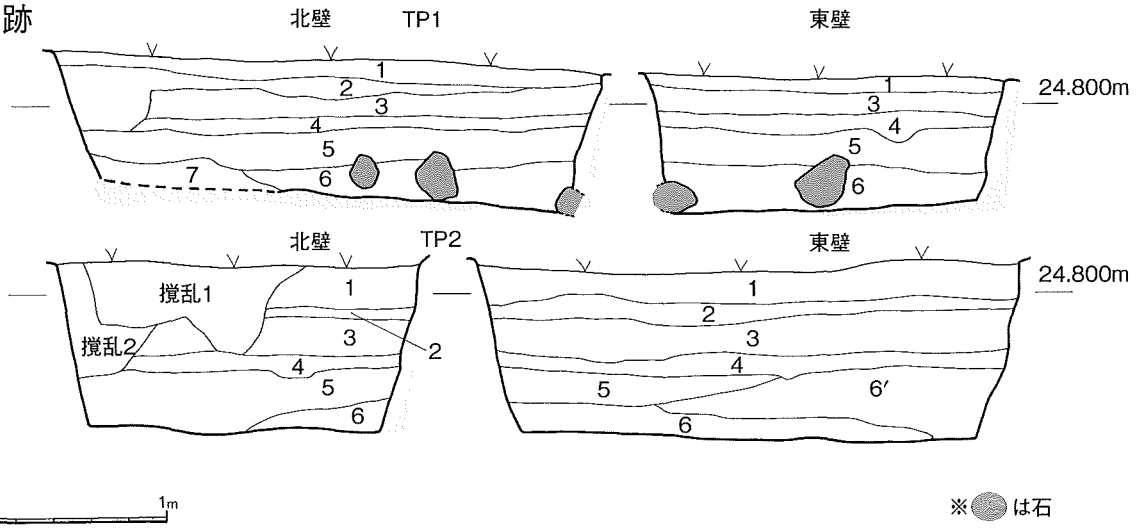


第１図　試掘坑位置図（S＝1／2,000）

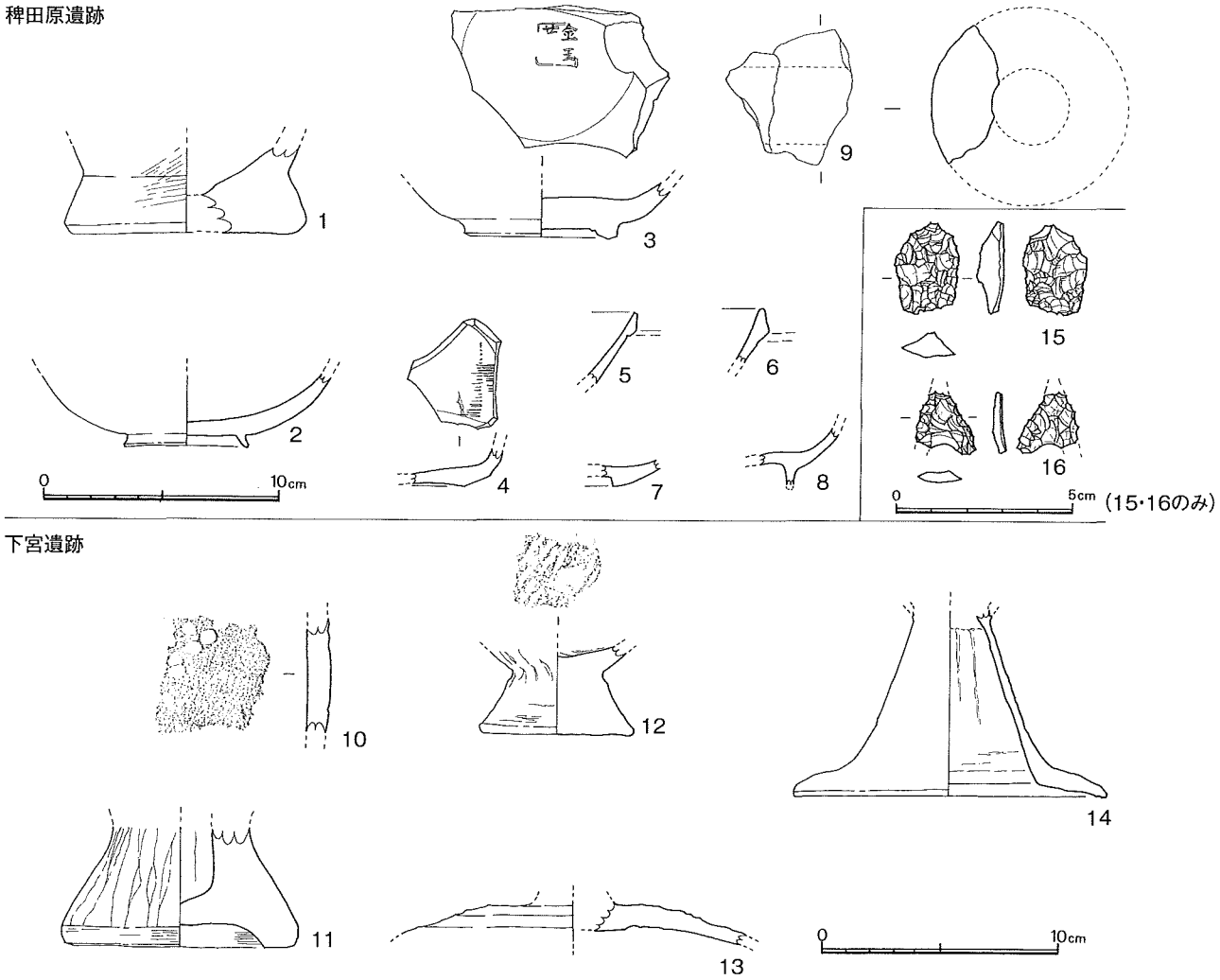
稗田原遺跡



下宮遺跡



第２図　試掘坑土層図（S＝1／40）



第３図　範囲確認調査出土遺物（S＝1／2・1／3）

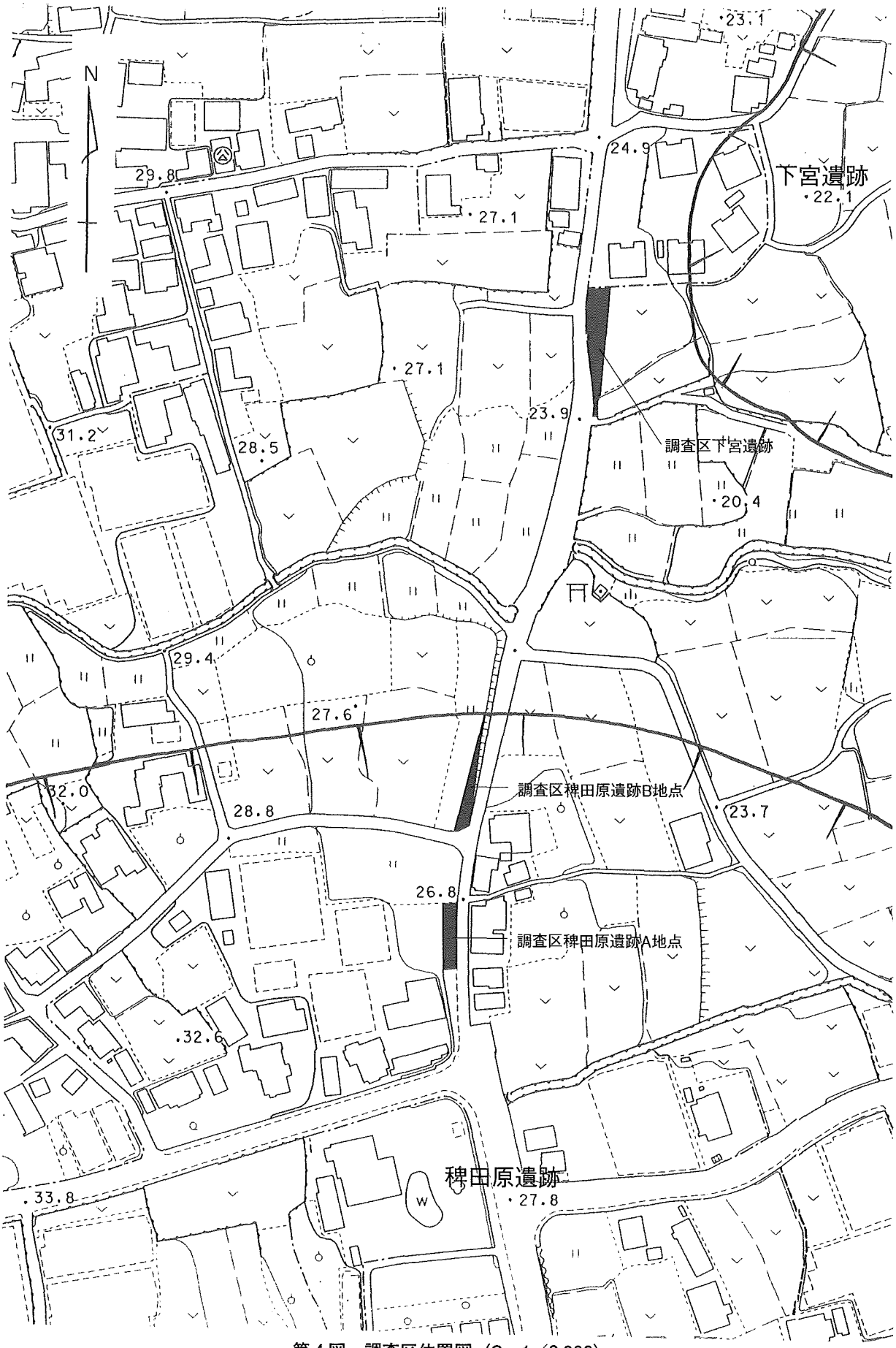
(2)まとめ

TPA・B・C区には良好な中世の包含層が残存していることがわかった。TP1・2においては，古代の遺物の出土がみられた。またTP2の東壁では，古代の遺物を包含する遺構の覆土が確認された。よって，稗田原遺跡（B地点）は284㎡，下宮遺跡においては199㎡の本調査を行うこととなった。

第１表　出土遺物観察表

番号	出土層位	器種	部位	口径(cm)	底径(cm)	色調（土器のみ）	調整	備考
1	TPC-Ⅵ	深鉢	底部	－	10	内：灰黄褐色（10YR4/2） 外：褐色（10YR4/6）	外：ハケ	
2	TPB-Ⅶ	黒色土器	高台	－	5	内・外：黒色（10YR2/1）		両黒
3	TPA-Ⅶ	龍泉窯系青磁碗	高台	－	4.6			見込にスタンプ文
4	TPC-Ⅵ	同案窯系青磁皿	底部	－	－			見込に櫛描文
5	TPB-Ⅶ	白磁碗	口縁	－	－			Ⅱ類
6	TPB-Ⅴ	白磁碗	口縁	－	－			Ⅳ類
7	TPI-Ⅰ	青花皿	高台	－	－			小野ⅢC群
8	TPH-Ⅱ	青花碗	高台	－	－			小野碗E群
9	TPB-Ⅶ	羽口	－	－	－	浅黄色（2.5Y7/4）		摩滅
10	TP2-Ⅰ	鉢カ	胴部	－	－	明黄褐色（2.5Y6/6）		外面に円状の刺突あり
11	TP1-Ⅲ	甕カ	底部	－	8.8	外：黒褐色（2.5Y3/1） 内：灰黄褐色（10YR4/2）	内：ケズリ 外：ミガキ	
12	TP2-Ⅰ	深鉢	底部	－	6.4	にぶい黄褐色（10YR5/4）	条痕	黒川式段階
13	TP1-Ⅲ	須恵器蓋	－	－	－	内：にぶい黄褐色（10YR5/4） 外：褐灰色（10YR5/3）		輪状のつまみをもつ蓋
14	TP1-Ⅳ	高坏	脚部	－	13	褐色（7.5YR4/4）	内部：ケズリ	

【引用・参考文献】小野正敏1982「15～16世紀の染付碗，Ⅲの分類と年代」『貿易陶磁研究No.2』



第４図　調査区位置図（S＝1／2,000）

2章　遺跡の環境

(1) 地理的環境

稗田原遺跡，下宮遺跡がともに位置する島原半島北東部は，県内でも唯一の活火山である雲仙山系の活動によって形成された火山性扇状地で構成されている。南方には寛政4年（1792）に崩落し，島原および海向こうの熊本でも多くの被災者をだした「島原大変肥後迷惑」で知られる眉山がそびえ，南西には，平成2年（1990）年に甚大な噴火被害をもたらした普賢岳を望むことができる。周辺には眉山や普賢岳，舞岳を水源とする小河川が多くみられ，海に向かい放射状に小規模な沖積平野を形成している。遺跡が所在する三会地区（三会原）もそのようにして形成された沖積平野の一つで，北方に西川，南方には焼山を水源とする中尾川が緩やかに流れている。豊かな水源と肥沃な土壌に恵まれることから，県内でも有数の農業地帯となっており，現在は主に稲や人参，レタス，大根，ショウガなどが数多く栽培されている。

(2) 歴史的環境（第5図）

稗田原遺跡（1）

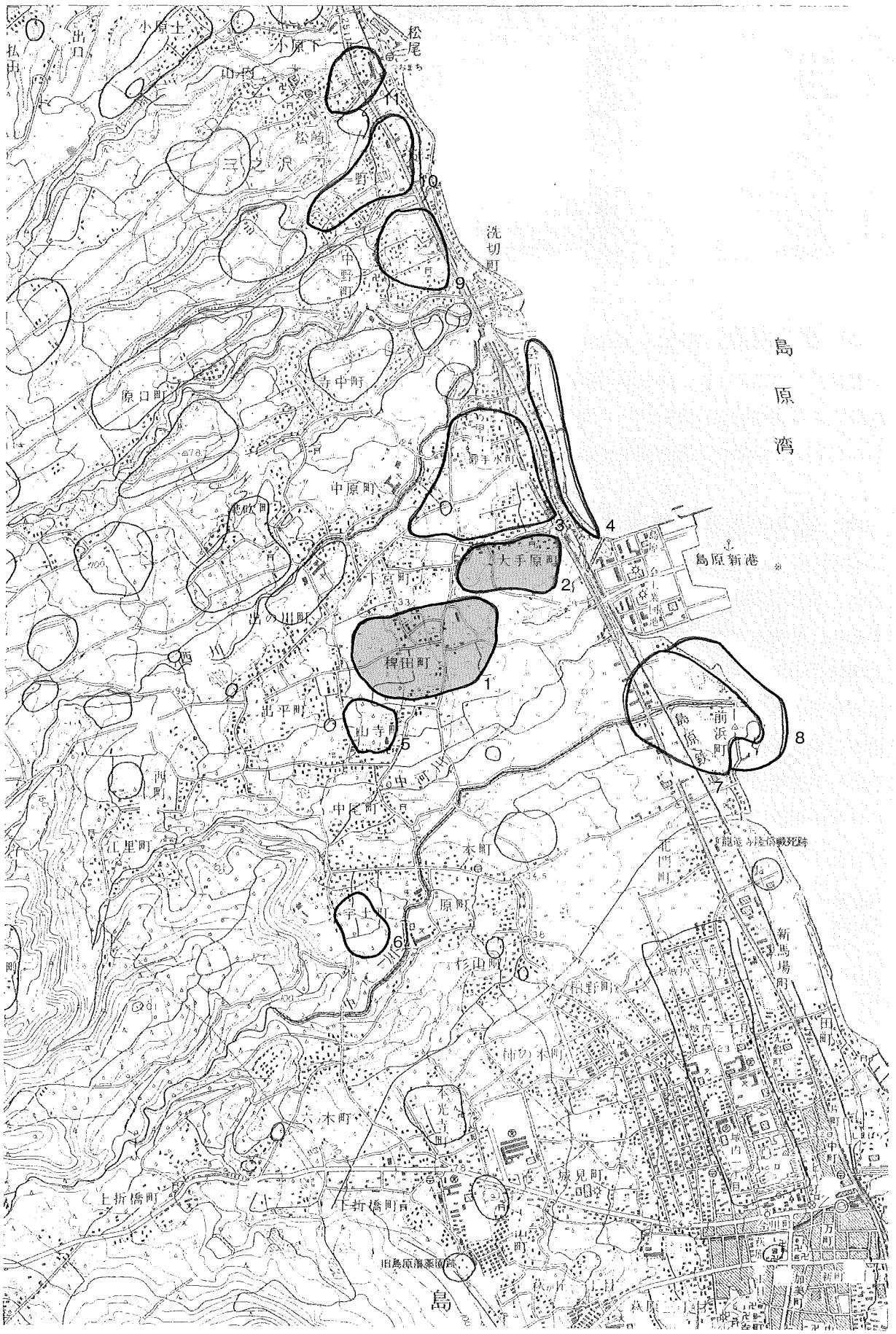
稗田原遺跡の発見は昭和56年（1981）に長崎県教育委員会（以下県教委と略す）によって行われた分布調査にはじまる。調査では，縄文時代晩期の土器片が発見されており，この時期の生活面の存在が予想された。もとよりこの三会原周辺には縄文時代晩期の遺跡が多く，稗田原遺跡と同じ標高20m～30mラインには今回同時に調査を実施した下宮遺跡（2）や平成3年（1991）に島原市教育委員会が主体となって発掘調査を実施した（註1）畑中遺跡（3）がある。さらに，海岸部に向けて下るにつれ上一野遺跡や三会下町海中遺跡（8）がある。また標高10m～15m付近には弥生時代の墳墓遺跡として，周知されている景華園遺跡（9）を中心に松尾遺跡（11）など弥生時代の遺跡が集中している。

稗田原遺跡の発掘調査が初めて行われたのは，県教委が主体として平成4年（1992）～平成7年（1995）までに行われた第1次～第3次調査（註2）である。調査により縄文時代晩期の遺物包含層の他に縄文時代早期，古墳時代の遺構，遺物が出土し複合遺跡であることが判明した。その後も，県道改良工事などに伴い，県教委により度重なる発掘調査が行われ，さらに弥生時代，古代，中世の遺構や包含層なども確認され，この地における継続的な文化の存在が明らかになっている。

下宮遺跡（2）

下宮遺跡の発見は，昭和56年に県教委によって行われた分布調査にはじまる。調査では縄文時代晩期の遺物や弥生時代の土器，石器が表採された。しかし，それ以後は発掘調査の機会には恵まれず，遺跡自体の性格は不明のままである。今回発掘調査を行った地点は，先に述べた分布調査の後に作成された遺跡地図の範囲からはわずかに外れた地点ではあるが，範囲確認調査の際に遺物包含層が確認されたため，下宮遺跡として本調査を実施した。

【註】　(1) 村川逸朗編1994　『畑中遺跡』島原市埋蔵文化財調査報告書第9集　島原市教育委員会
　　(2) 村川逸朗編1997　『稗田原遺跡Ⅰ』　長崎県文化財調査報告書第136集　長崎県教育委員会



第５図　遺跡位置図（S＝1／25,000）

第２表　周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	所在地（島原市）	種別	立地	時代
1	稗田原遺跡	稗田町	遺物包含地	平地	縄・弥・近
2	下宮遺跡	下宮町	〃	平野	〃
3	畑中遺跡	中原・亀の甲，御手水町	〃	平地	弥生
4	山崎遺跡	山寺町字山崎	〃	台地	弥生・古墳
5	釘原遺跡	宇土町釘原	遺物包含地丘陵	平地	〃
6	沖田遺跡	前浜町沖田	遺物包含地	平野	〃
7	沖田海中遺跡	〃	〃	海底	〃
8	三会下町海中遺跡	三会町	〃	海底	縄文・弥生
9	景華園遺跡	中野町高城元	墳墓	海岸段丘	弥生
10	一野遺跡	有明町三之沢名字野田他	遺物包含地	丘陵	弥生・古墳
11	松尾遺跡	有明町松崎名字松尾	〃	〃	古墳・奈良

(3) 調査履歴（第6図・第3表）

前節で述べたように，稗田原遺跡は主に県道拡幅工事に伴った調査が断続的に実施されている。県教委による道路改良工事に伴った発掘調査は，今回を含め計8回行われており，その結果は順次報告されている。詳細は，調査箇所を第6図に，調査期間や掲載報告書を第3表にまとめた。

(4) 過去の主な調査成果（第7図）

過去に行われた調査で特に注目されるのは，第1次調査で検出された古墳時代前期の竪穴住居跡である。竪穴住居跡は北側を一部石垣で切られるものの，残存する南辺は4,3mをはかる方形のプランである。床面より布留式段階の古式土師器がまとまって出土している。長崎県において古式土師器出土例は少なく，一括資料の出土は竪穴住居跡内から出土した南有馬市所在の今福遺跡（宮崎1986），包含層内から出土した大村市所在の大堂遺跡（宮崎1979）や，旧河川から出土した大村市所在の黒丸遺跡（稲富1980），包含層内に廃棄された状態で出土した諫早市所在の小野曽屋遺跡（川瀬・古賀1995）の他数ヵ所でみられる程度である。

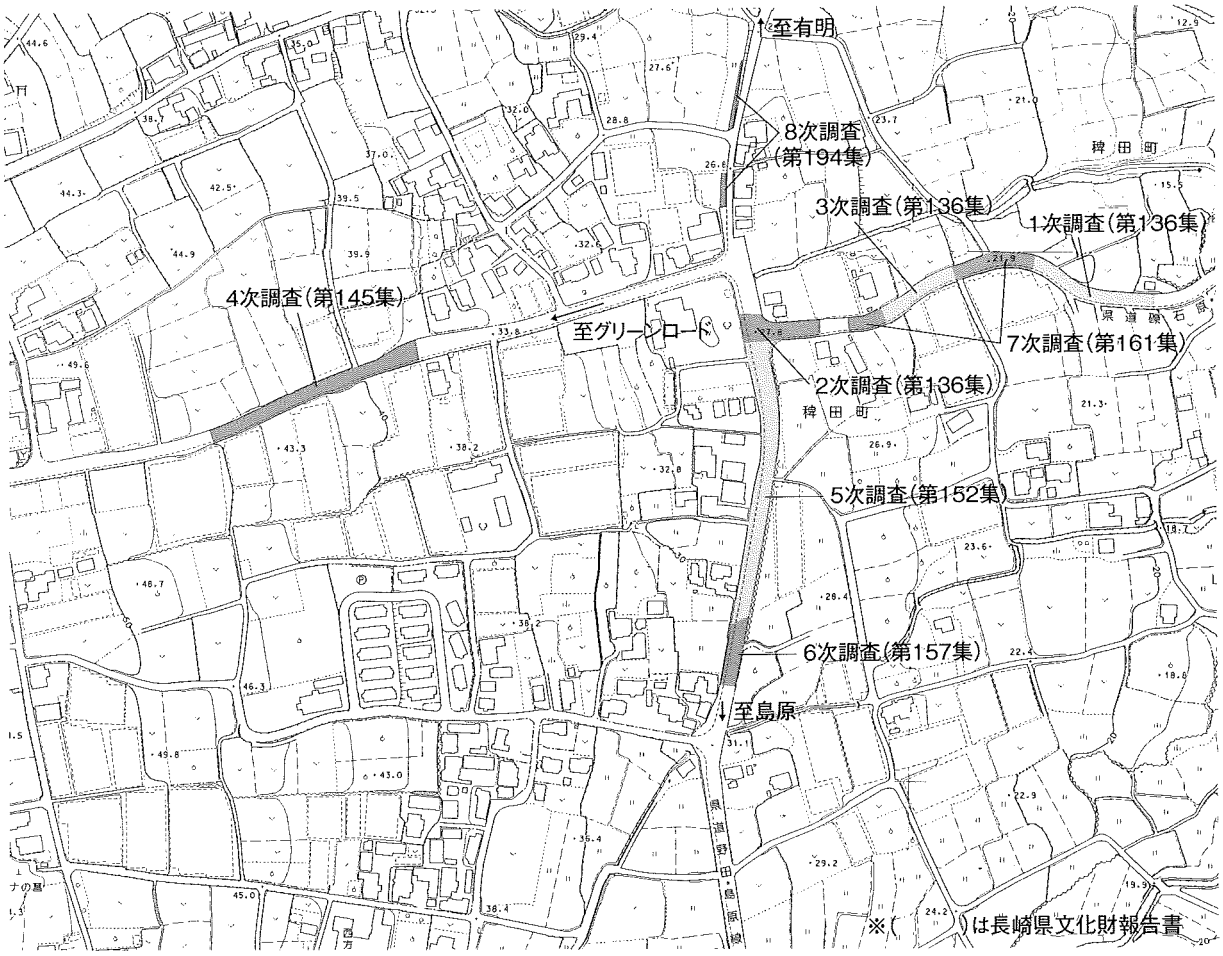
またその他には，過去の調査では古代・中世段階と考えられる自然流路や土石流路なども頻繁に検出されており，島原半島東部における自然災害の爪痕を知るうえで重要な成果といえるであろう。

【引用・参考文献】

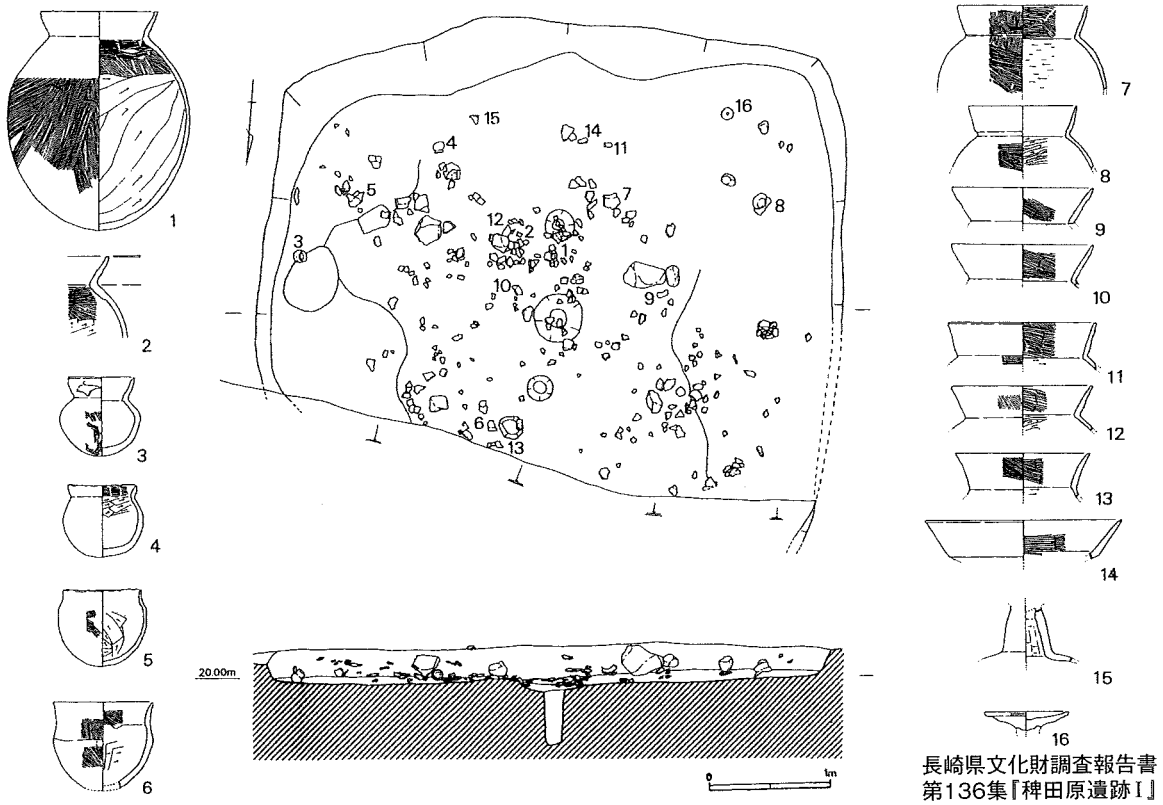
宮崎貴夫1986『今福遺跡Ⅲ　県道矢次・南有馬線改良工事に伴う埋蔵文化財調査報告書　第三冊』長崎県埋蔵文化財調査報告書第84集長崎県教育委員会
宮崎貴夫1979「大堂遺跡」『長崎県埋蔵文化財調査集報Ⅱ』長崎県文化財調査報告書第45集長崎県教育委員会
稲富裕和編1980『黒丸遺跡-長崎県大村市黒丸町所在黒丸遺跡の調査報告』黒丸遺跡調査会
川瀬雄一・古賀力編1995『小野曽屋遺跡　県営水田営農活性化排水対策特別事業（松崎東地区）に伴う発掘調査報告書』長崎県諫早市埋蔵文化財調査協議会

第３表　調査履歴

調査名	掲載報告書	調査面積	主な遺構	主な出土遺物
第1次調査	『稗田原遺跡Ⅰ』	350㎡	溝状遺構3条，柱穴群，古墳時代前期の竪穴式住居	布留式土器，縄文時代早期土器，縄文時代晩期土器
第2次調査		650㎡	溝状遺構1条，柱穴群	縄文時代早期土器，中世の貿易陶磁器
第3次調査		200㎡	古代の溝状遺構3条，ピット群，不明遺構	中国製青磁，瓦器，縄文土器
第4次調査	『稗田原遺跡Ⅱ』	1270㎡	溝状遺構，柱穴群，集石遺構	縄文時代晩期土器
第5次調査	『稗田原遺跡Ⅲ』	1340㎡	溝状遺構3条，土石流跡5条，柱穴・土坑群	越州窯系青磁碗，古代・中世須恵器・土師器，貿易陶磁器
第6次調査	『稗田原遺跡Ⅳ』	220㎡	旧河道1条	縄文時代中期土器，瀬戸・常滑・備前などの国産陶器
第7次調査	『稗田原遺跡Ⅴ』	650㎡	溝4条，柱穴多数	縄文時代早期土器，古式土師器



第６図　稗田原遺跡過去の調査地点（S＝1/5,000）



第７図　1次調査検出竪穴住居（S＝1／60）・出土遺物（S＝1／9）

3章　調　査

稗田原遺跡Ａ地点

(1) 調査方法

調査区は平成17年5月に行った範囲確認調査の結果をうけ，本調査を行ったB地点より南方約30mの場所である。もとより畑地として利用されており，農作物の栽培等の関係から範囲確認調査を行うことが出来なった地点である。しかし，B地点に比べ標高が高いことや，宅地などに利用されていないことから，遺物包含層が削平を受けず残存している可能性が非常に高く，今回本調査を実施することとなった。調査面積は88㎡である。

平成17年10月に行われた擁壁設置工事（立会調査済み）の際の土層観察記録に基づいて，調査に先立ち表土である耕作土，Ⅱ層の旧水田床土を重機により掘削した。掘削深度は約50cmである。

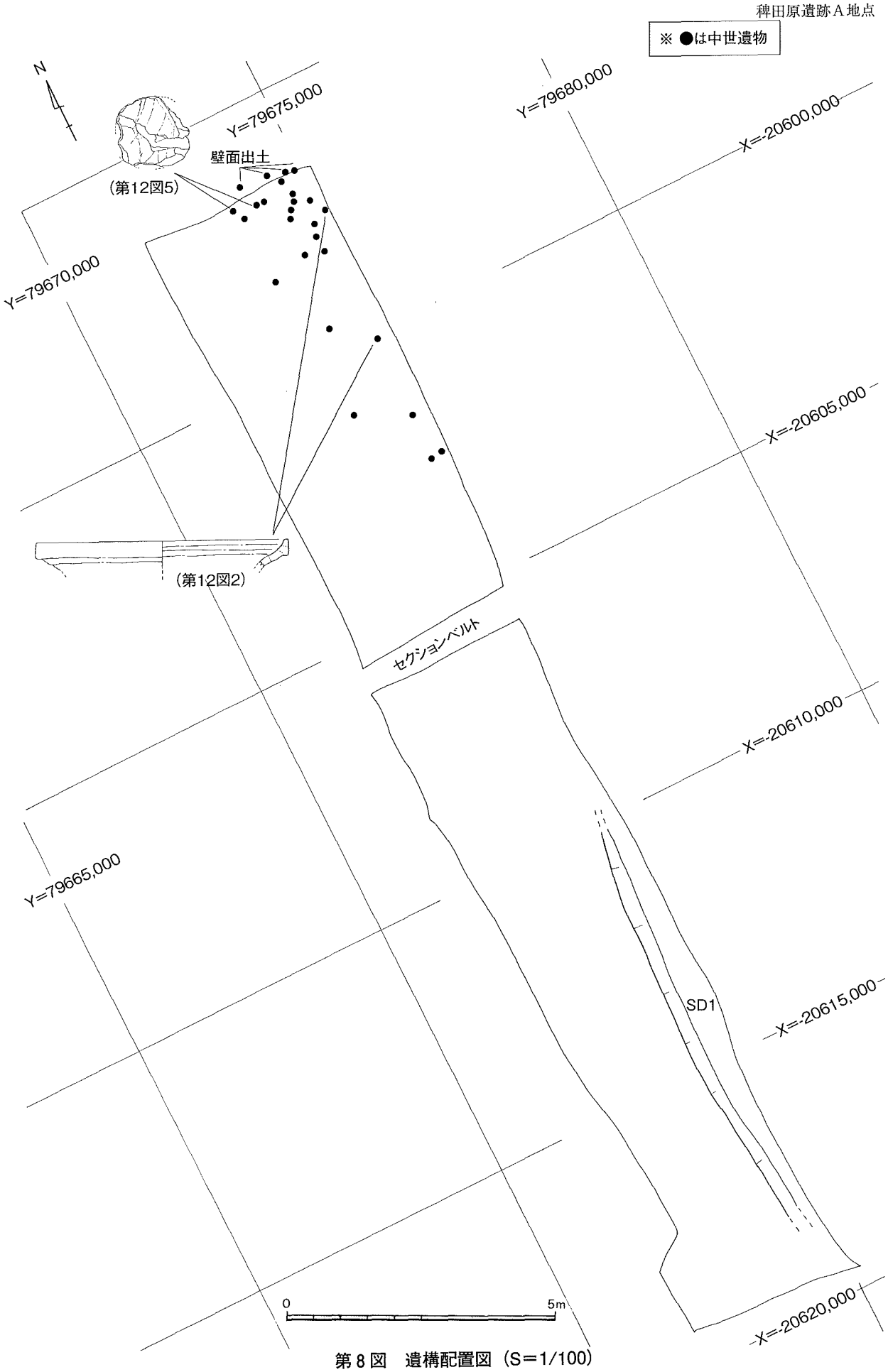
調査では国土座標に基づき，10×10mの大グリッドを設け，さらに5m四方に4分割に細分した。遺物の取り上げに関しては，基本的にグリッド別・層位別ごとにおこなったが，SD1に関しては覆土ごとに取り上げをおこなった。

人力による掘削作業は基本的に，Ⅲ層以下はねじり鎌で精査しながら掘り下げた。一部，近世土坑や，堅くしまったⅤ層以下に関しては手持ちの鍬を用いた。

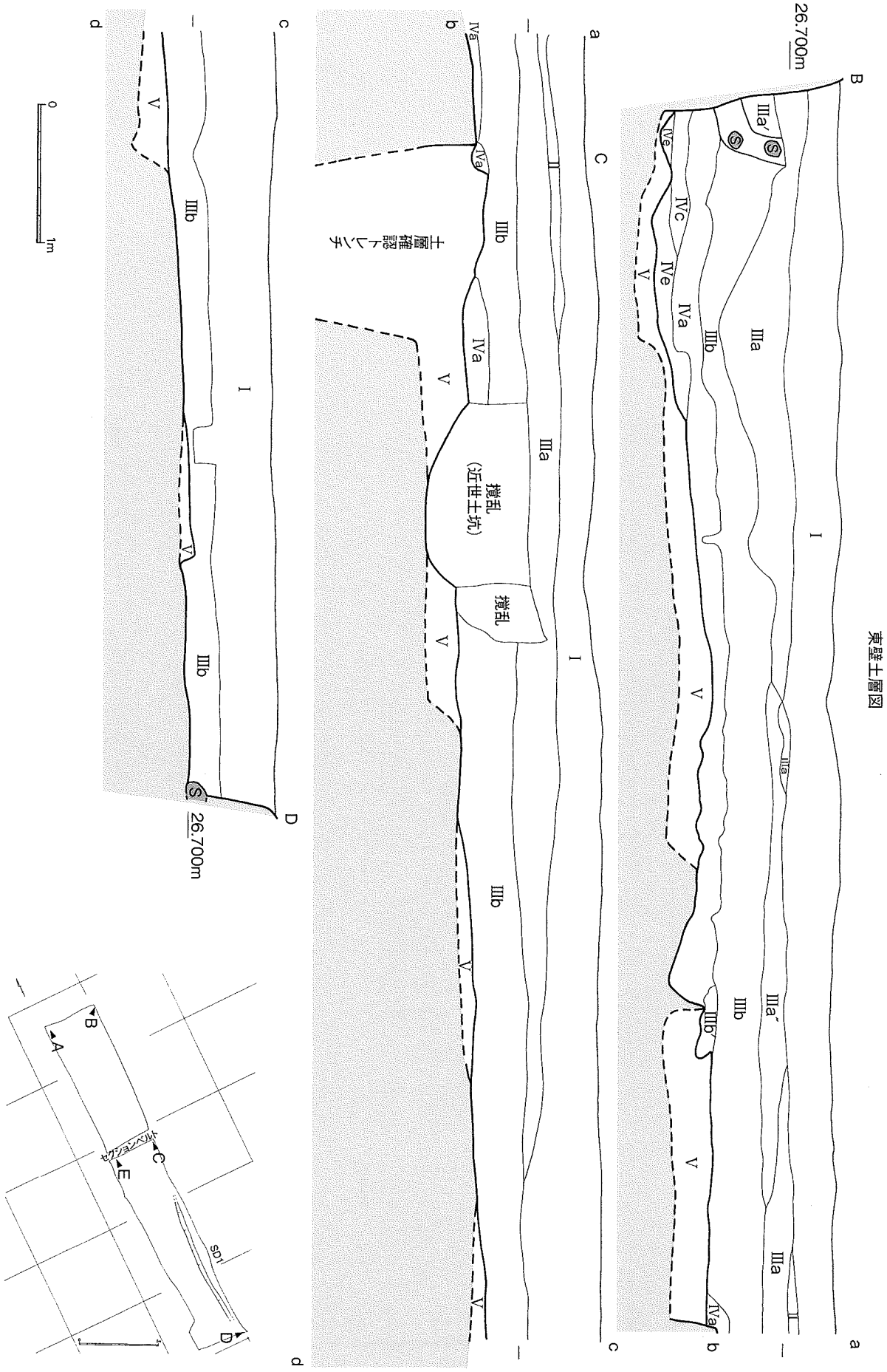
(2) 土層（第9・10図）

今回の調査では，比較的層の保存がよい調査区北壁と東壁の層序記録を行った。また調査区中央部に東西方向のセクションベルトを設定し，遺跡全体の土層把握につとめた。地山と思われるⅥ層（砂礫層）に関しては，中世以前の土石流の可能性が考えられ，検出面以下の堆積状況の把握のため，一部重機による掘り下げをおこなった。基本土層は以下の通りである。

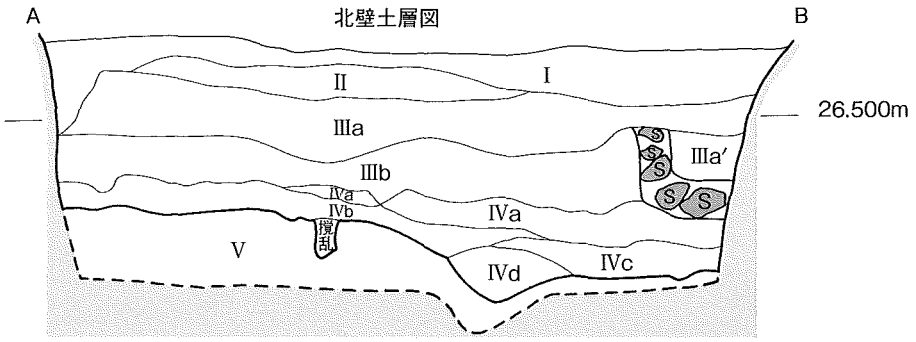
Ⅰ	7.5YR3/2	黒褐色土	旧耕作土（表土）
Ⅱ	10YR2/2	黒褐色土	水田床土
Ⅲa	10YR2/2	黒褐色土	近現代整地層　1cm大の小礫や炭化物粒を多く含む
Ⅲb	7.5R1.7/1	黒色土	近世整地層　Ⅲaよりも黒みが強い。しまりは弱い
Ⅳ	10YR1.7/1	黒色土	中世遺物包含層　Ⅲbより黒みが強い
Ⅴ	10YR4/4	褐色砂質土	しまりが非常に強い。拳～人頭大の礫を含む。遺物は含まない
Ⅵ	7.5YR5/8	明褐色砂礫	1cm大～拳大の礫を多く含む
Ⅶ	2.5Y3/1	黒褐色砂	粒子の細かい砂層
Ⅷ	5YR3/4	暗赤褐色砂礫	褐色砂礫が混じる
Ⅸ	2.5YR2/1	赤黒砂	1cm大の小礫を含む
Ⅹ	2.5YR3/3	暗赤褐色砂	褐灰色砂（10YR4/1）など1cm大の小礫
XI	2.5YR2/1	赤黒砂	粒子の細かい砂

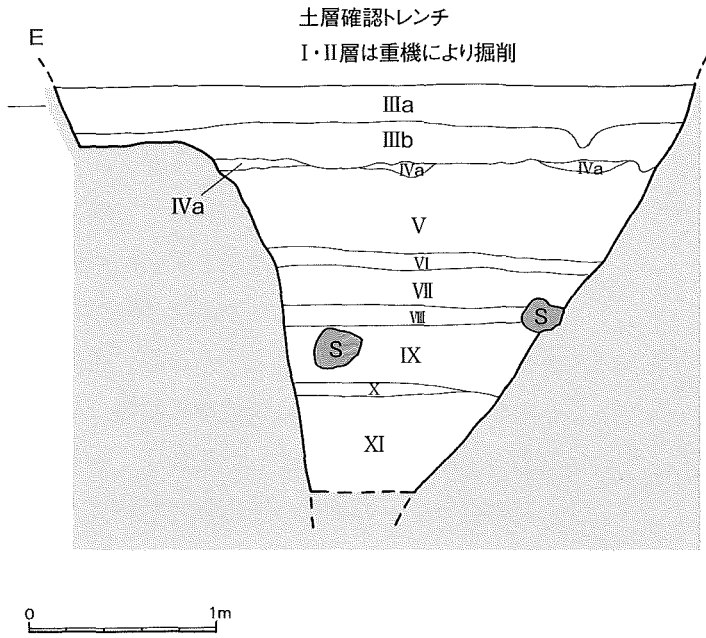


第８図　遺構配置図（S＝1/100）



第９図　土層図①（S＝1／40）





稗田原A地点

I	7.5YR3／2	黒褐色土	表土。旧耕作土。
II	10YR2／2	黒褐色土	床土。表土よりやや暗く、しまっている。赤褐色粒を含む。
IIIa	10YR2／2	黒褐色土	IIと色調はあまり変わらないが、しまりがない。1cm大の小礫や炭化物粒を多く含む。（近・現代の整地層か）
IIIa'	10YR2／2	黒褐色土	しまりが弱く、フカフカした土。近世。遺構内埋土。
IIIa"	10YR2／2	黒褐色土	部分的にこぶし大の黄色ブロックが入る。（III時代のカク乱か）
IIIb	7.5YR1.7／1	黒色土	IIIaより黒味を増す。IIIaと比べると不純物が少ない。しまりはあまりない。近世陶磁器が出土。
IIIb'	2.5Y3／1	黒褐色土	しまりが弱く、パミスを含まない。（III時代のカク乱か）
IVa	10YR1.7／1	黒色土	IIIbより黒味を増す。北部で一部20cm程残存している。中生の青磁・滑石片・土師質土器が出土している。
IVb	10YR3／1	黒褐色土	少量のパミスが混じる。しまり強い。
IVc	2.5Y3／1	黒褐色土	オリーブ褐色砂礫（2.5Y4／3）が混じる。小指大の礫混じりで、固くしまる。
IVd	2.5Y3／1	黒褐色土	しまりが弱く、サクサクした土。火山灰土で少量のパミスが混じる。
V	10YR4／4	褐色砂質土	非常に固くしまっている。こぶし～人頭大の礫を含む。
VI	7.5YR5／8	明褐色砂礫層	直径1cm大～こぶし大の礫を多く含む。
VII	2.5Y3／1	黒褐色砂層	粒子の細かい砂層。
VIII	5YR3／4	暗赤褐色砂礫層	褐色砂礫（10YR4／6）が混じる。直径5～10cm大の礫が混じる。
IX	2.5YR2／1	赤黒色砂層	直径1cm大の礫を含む。
X	2.5YR3／3	暗赤褐色砂礫層	褐灰色小礫（10YR4／1）が混じる。直径1cm大の小礫が混じる。
XI	2.5YR2／1	赤黒色砂層	粒子の細かい砂層。

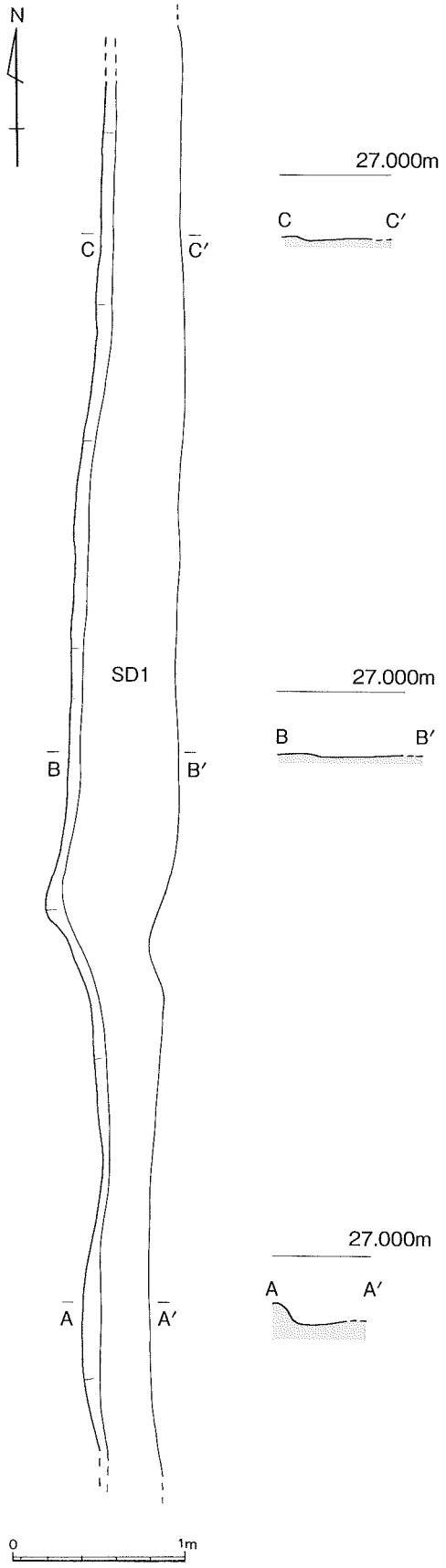
第10図　土層図②（S＝1／40）

Ⅰ～Ⅲ層までは近世～現代の攪乱である。Ⅰ～Ⅱ層までは，しまりのない黒褐色土である。近世の整地土と考えられるⅢ層下面の黒色土とは，若干色調に差異がみられる。

中世の遺物包含層であるⅣ層は，Ⅲ層下部よりもさらに黒みが増す。調査区内の北部にわずかに現存するのみで，大半がⅢ層時期に削平をうけている。Ⅴ層はしまりが非常につよい褐色砂質土で，拳大～人頭大の礫を含む。Ⅵ層の遊離層であろう。

Ⅵ層も非常に堅くしまった明褐色砂礫で，微小な黄色砂と直径1cm～拳大の礫を多く含む。

Ⅵ層の堆積状況を確認するため重機により掘り下げた箇所では，現地表面より約2.5m付近に至るまで砂と礫の互層である。色調やしまり具合から約4,000年前に眉山を起源として発生した六ツ木火砕流の可能性が高い。

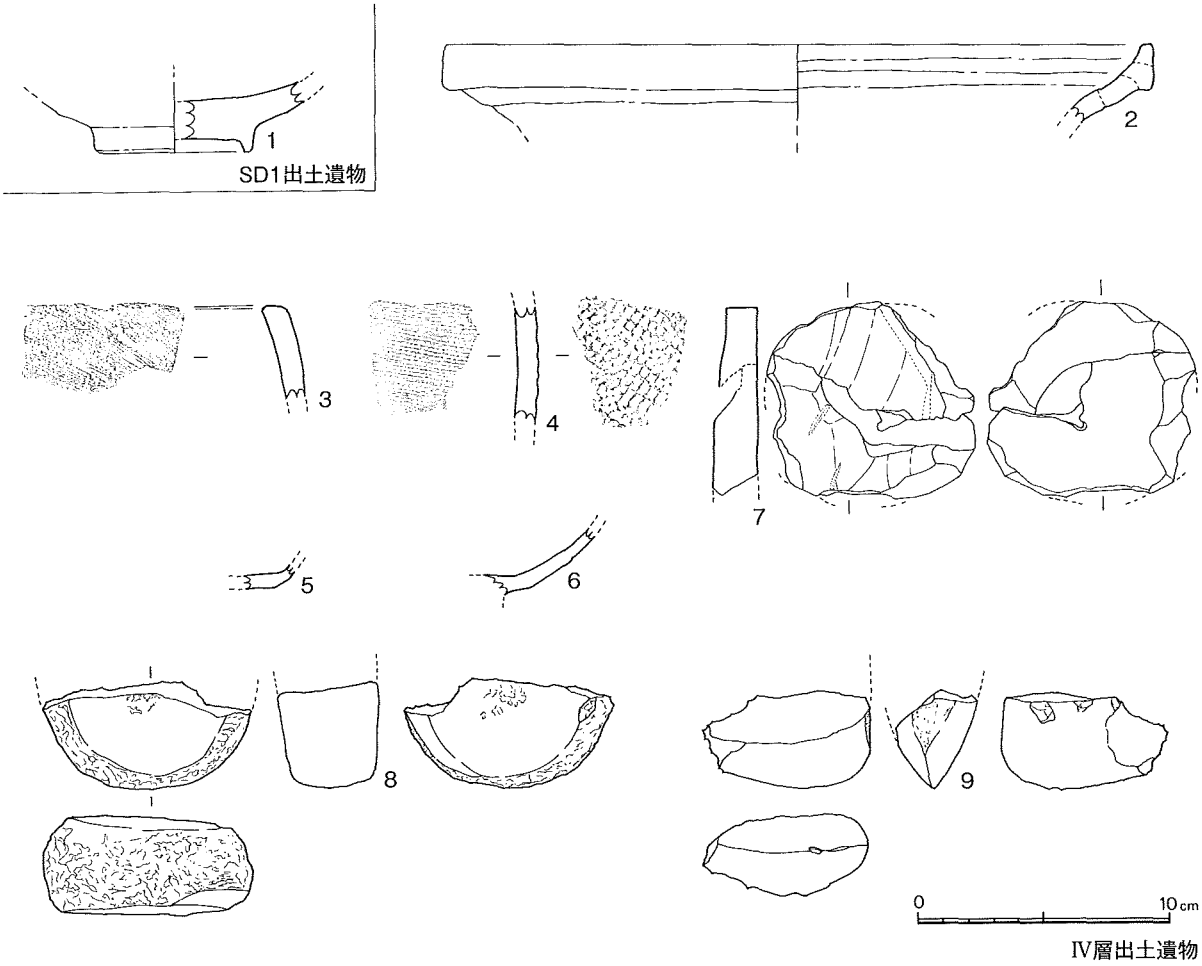


第11図　稗田原A地点SD1（S＝1／40）

(3) 遺構（第11図）

今回検出した遺構は，南半部の東側Ⅵ層で検出したSD1である。

上部が大きく削平を受けているため，時期は不明である。現存する遺構の全長は約8mで，南北方向の両端が近世期の撹乱により削平をうけている。西側の落ち際のみ検出しており，東側は調査区外である現道下にもぐっていて規模等は不明である。主軸ラインはほぼ南北方向である。床面標高は約26.0mで水平である。東の際は不明であるが，断面はおそらく逆台形を呈すと思われる。Ⅵ層という非常に堅くしまった砂礫層を規格的に掘り込んでいるようで，人為的な溝状遺構の可能性が考えられる。覆土はしまりの弱い黒褐色土の単一層で，中からは龍泉窯青磁碗（第12図1）や須恵質土器が出土しており，中世でも比較的新しい時期にはその機能を終えたようである。



第12図　出土遺物（S＝1／3）

(4) 遺物（第12図・第4表）

出土遺物のうち土器・陶磁器に関しては第４表にまとめた。以下に遺物の特徴を記す。

1はSD1の覆土から出土。龍泉窯系青磁碗で高台断面が四角形を呈す。横田・森田編年の碗Ⅰ類。

2・5・7・8はⅣ層出土。2は須恵質の捏鉢で，いわゆる東播磨系捏鉢である。5は土師皿である。7は滑石製品。外周には丁寧にな面取り加工がみられ，円盤状を呈す。石鍋の再加工品か。8は砂岩製磨石。9は玄武岩製磨製石斧で近世土坑内からの出土である。

【引用・参考文献】

(1) 横田賢次郎・森田　勉1978「太宰府出土の輸入陶磁器について」『研究論集4』九州歴史資料館

第４表　出土遺物観察表

遺物番号	出土層位	器種	部位	口径（cm）	底径（cm）	器高（cm）	色調	備考
1	SD1	龍泉窯系青磁碗	高台	－	5.6	－		
2	Ⅳ	東播系捏鉢	口縁	28	－	－		
3	Ⅳ	瓦質土器	口縁	－	－	－	黄灰色（2.5Y4/1）	内面にハケ目
4	Ⅳ	須恵器	胴部	－	－	－		
5	Ⅳ	土師皿	底部	－	－	－	暗灰黄色（2.5Y4/2）	内面にハケ目
6	Ⅳ	青磁碗	胴部	－	－	－		

稗田原遺跡Ｂ地点

(1) 調査方法

稗田原遺跡B地点の調査面積は284㎡である。調査区は溝状遺構（SD1）を検出したA地点から北に約30mの地点に位置している。

調査に先だって，Ⅰ層（耕作土），Ⅱ層（水田床土）とⅢ層（近世遺物包含層）の上面を重機により掘削した。深度は約50cmである。

調査では国土座標に基づき，10×10mの大グリッドを設け，北から順に1～9区，東西にA～C区を設定し，さらに5m四方に4分割に細分した。遺物の取り上げに関しては，基本的にグリッド・層位ごとにおこなったが，SD1・SD2に関しては層位別に取り上げをおこなった。

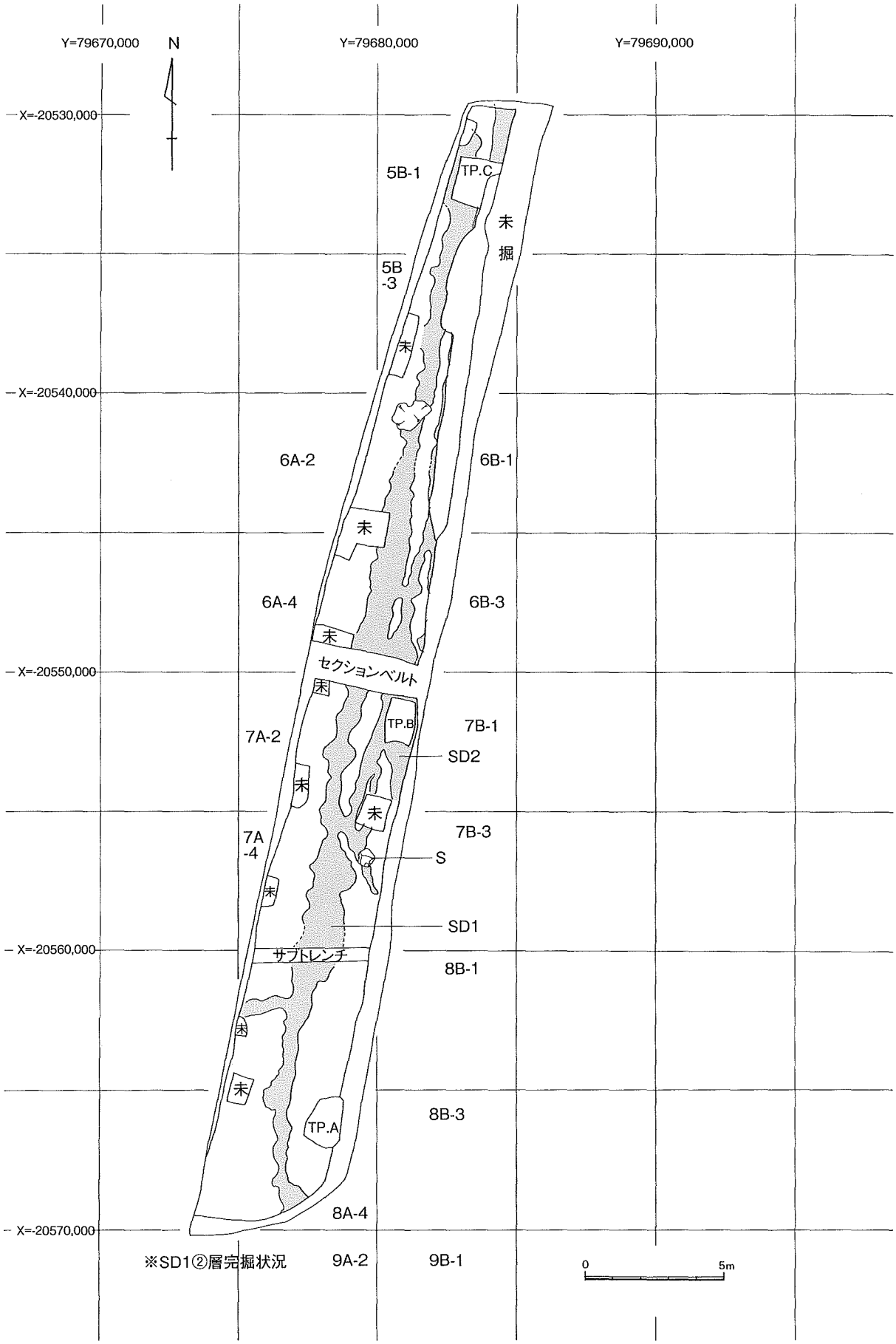
人力による掘り下げ作業は，近世の遺物を含むⅢ層までを手持ちの鍬とねじり鎌でおこない，中世の遺物包含層であるⅣ・Ⅴ層およびSD1・SD2は，ねじり鎌で精査しながら掘り下げた。

(2) 土層

今回の調査では，比較的層の保存がよい調査区西壁の層序記録を行った。東西方向にあたる層序記録は調査区北壁と，南壁が大きく撹乱をうけているため，層の残りが良い調査区中央部（6A-4区と7A-2区）に東西方向の土層観察用ベルトを設定し，遺跡全体の土層把握につとめた。

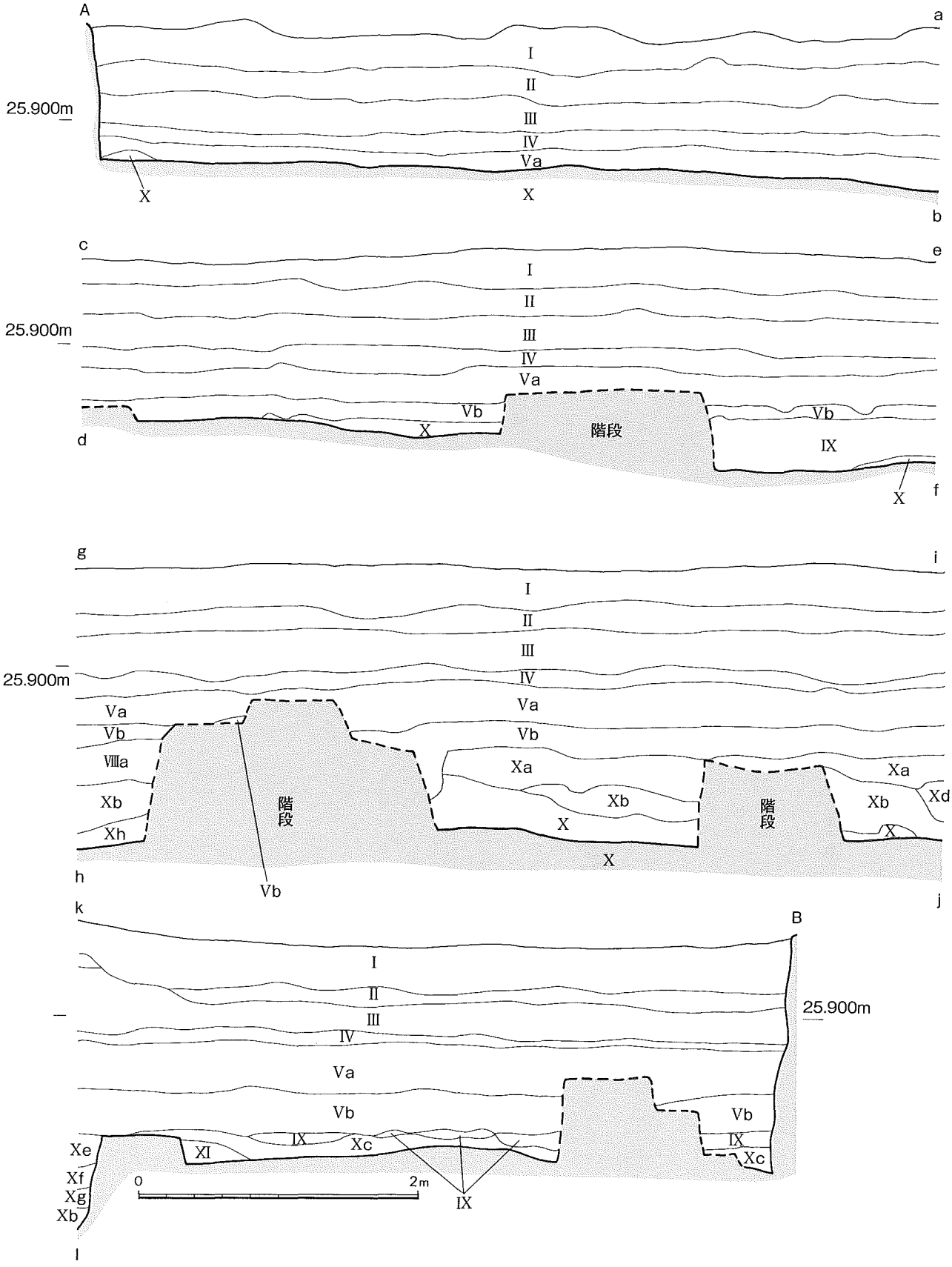
基本土層は以下の通りである。なお，Ⅷ層よびⅩ層は地点により細分してある。

Ⅰ	2.5Y4/1	黄灰色土	耕作土。
Ⅱ	2.5Y4/1	黄灰色土	水田床土。やや赤みをおびる。
Ⅲ	10YR3/2	黒褐色土	しまり強い。直径5㎜程のパミスを含む。
Ⅳ	7.5YR3/2	黒褐色土	赤みの強い火山灰土。Ⅲ層に比べパミスが少ない。
Ⅴa	10YR2/2	黒褐色土	ややしまり強い。5～10㎜程度のパミスが混じる。
Ⅴb	10YR2/2	黒褐色土	ややしまり強い。パミスが少なく赤みをおびる。
Ⅵ	7.5YR3/1	黒褐色土	しまり弱い。パミスをほとんど含まない。
Ⅶ	7.5YR3/1	黒褐色土	しまり弱い。灰黄褐色砂（10YR4/2）が混じる。パミスをまったく含まない。
Ⅷa	2.5Y5/2	暗灰黄砂礫	直径1～3cm程の砂・礫で構成される。古代。中世の遺物を多量に含む。
Ⅷb	10YR3/2	黒褐色土	しまり弱い。少量の砂・粒を含む。遺物は含まない。
Ⅸ	2.5Y5/4	黄色砂	しまり弱い。サクサクした砂。遺物は含まない。
Ⅹ	5YR5/2	灰褐粘土	小礫が混じる。
XI	5YR3/3	暗赤褐粘土	少量の炭化物やパミスが混入する。遺物は含まない。

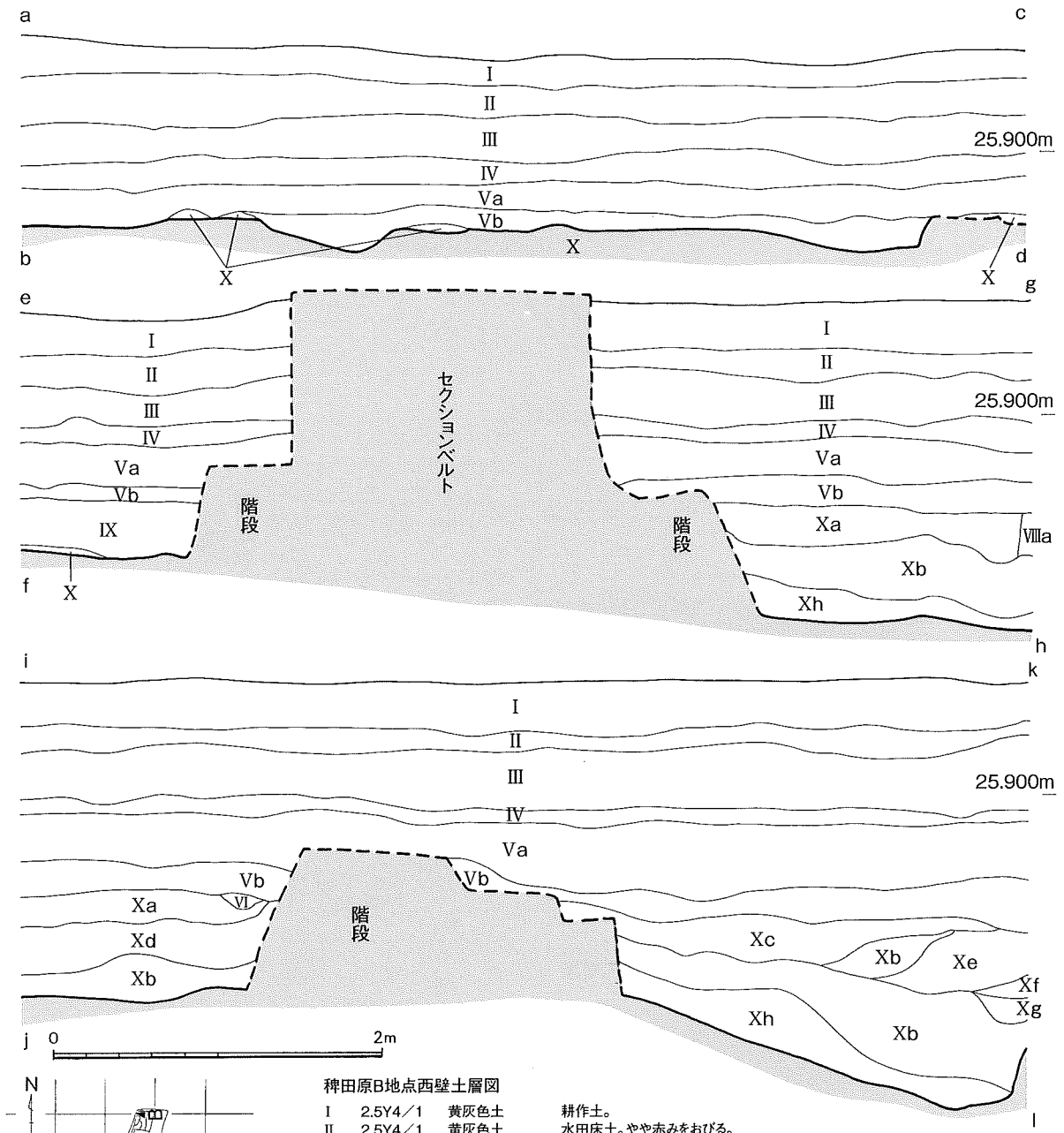


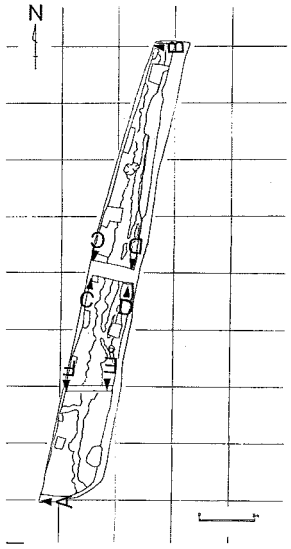
第13図　遺構配置図（S＝1／200）

西壁土層図



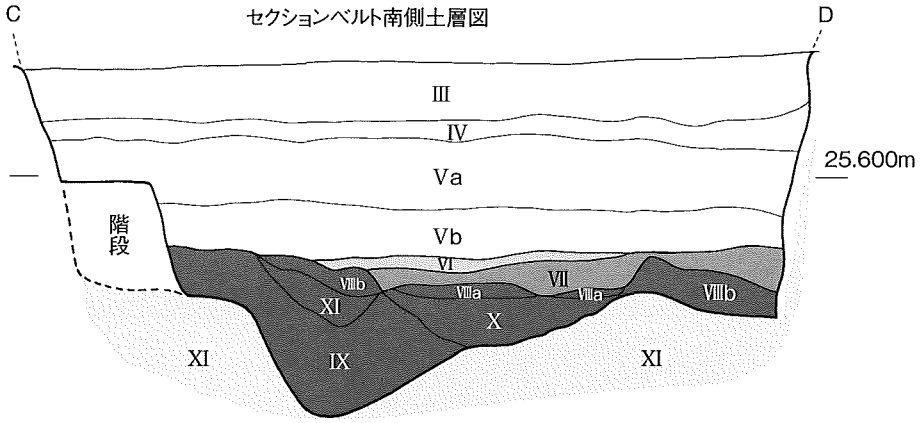
第14図　Ｂ地点土層図①（S＝1／40）

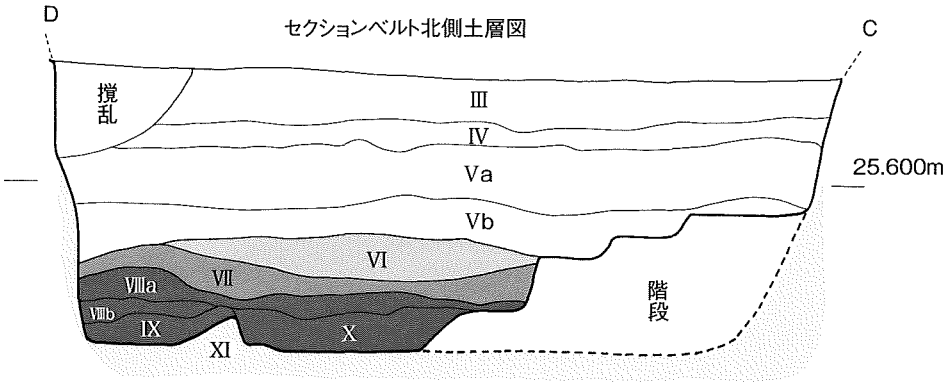


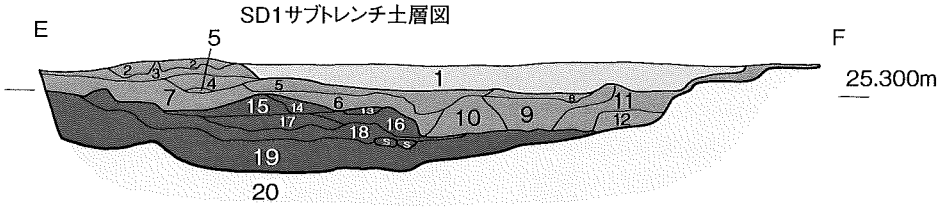


稗田原B地点西壁土層図

I	2.5Y4／1	黄灰色土	耕作土。
II	2.5Y4／1	黄灰色土	水田床土。やや赤みをおびる。
III	10YR3／2	黒褐色土	しまり強い。直径5mm程のパミスを含む。
IV	7.5YR3／2	黒褐色土	赤みの強い火山灰土。III層に比べパミスが少ない。
Va	10YR2／2	黒褐色土	ややしまり強い。直径5～10mm程度のパミスが混じる。 （中世遺物包含層）
Vb	10YR2／2	黒褐色土	ややしまり強い。パミスが少なく赤みをおびる。（中世遺物包含層）
VI	7.5YR3／1	黒褐色土	しまり弱い。パミスをほとんど含まない。 混入物も非常に少ない。
VII	7.5YR3／1	黒褐色土	しまり弱い。灰黄褐色砂（10YR4／2）が混じる。 パミスをまったく含まない。
VIIIa	2.5Y5／2	暗灰黄色砂礫	直径1～3cm程の砂・礫で構成される。 古代・中世の遺物を多量に含む。
VIIIb	10YR3／2	黒褐色土	しまり弱い。少量の砂・粒を含む。
IX	2.5Y5／4	黄色砂	しまり弱い。サクサクした砂。
X	5YR5／2	灰褐色粘土	小礫が混じる。
Xa	2.5Y7／6	明黄褐色砂質土	きめの細かい砂質土。
Xb	2.5Y8／4	淡黄色砂質土	直径3mm前後で粒子がやや粗い。
Xc	2.5Y8／3	淡黄色砂質土	直径1cm程度の小礫が混じっており、粒子が粗い。
Xd	2.5Y8／4	淡黄色砂質土	きめの粗い砂質土。
Xe	2.5Y5／3	黄褐色砂質土	きめの粗い砂質土。
Xf	10YR6／8	明黄褐色砂質土	きめの粗い砂質土。
Xg	10YR4／4	褐色砂質土	きめの粗い砂質土。
Xh	2.5Y6／1	黄灰色砂質土	きめの細かい砂質土。溝の最下層充填土。
XI	5YR3／3	暗赤褐色粘土	少量の炭化物やパミスが混入する。







サブトレンチ北壁土層図

1	7.5YR3／1	黒褐色土	しまり弱い。パミスをほとんど含まない。混入物も非常に少ない。
2	10YR5／4	にぶい黄褐色砂礫	しまり強い。直径5～7mm程度のパミスが混じる。
3	7.5YR3／1	黒褐色土	しまり弱い。パミスをほとんど含まない。他の混入物もほとんど無い。
4	10YR5／4	にぶい黄褐色砂礫	しまり強い。直径5～7mm程度のパミスが混じる。 2に比べやや黄味をおびる。
5	7.5YR3／1	黒褐色土	しまり弱い。凸レンズ状にはいる。パミスは含まない。
6	10YR6／2	灰黄褐色砂礫	しまり強い。直径1cm程度の砂利で構成。遺物混入層。
7	10YR5／4	にぶい黄褐色砂礫	黒褐色土(7.5YR3／1)が混じる。遺物混入層。
8	10YR3／1	黒褐色土	しまり弱い。パミスをほとんど含まない(SD1②層と一連カ)
9	10YR4／2	灰黄色土	しまり弱い。直径5～7mm程度の白色パミスが少量混じる・
10	10YR4／2	灰黄色土	しまり弱い。パミスをほとんど含まない。サラサラした砂混じり。
11	5YR3／3	暗赤褐色粘土	しまり弱い。20に比べやや暗い。
12	5YR3／3	暗赤褐色粘土	11に比べ若干明るい。
13	7.5YR3／1	黒褐色土	にぶい黄褐色砂礫(10YR5／4)が混じる。
14	7.5YR3／1	黒褐色土	黄色砂が混じる。
15	5YR4／2	灰褐色土	しまり弱い。黄色砂が混じる。
16	7.5YR3／1	黒褐色土	しまり弱い。パミス混じり。
17	10YR6／2	灰黄褐色砂礫	しまり強い。直径1cm程度の砂利で構成。遺物混入層。
18	7.5YR6／2	灰褐色砂礫	直径1cm前後の礫と砂で構成。遺物混入層。
19	10YR6／2	灰黄褐色砂礫	直径1～3cm前後の礫と砂が密につまる。
20	5YR3／3	暗赤褐色粘土	

… ①層

… ②層

… ③層

0　1m

第15図　Ｂ地点土層図②（1/40）

(3) 遺構（第16・17・18図）

今回検出した遺構はVb層下で検出したSD1・SD2である。ともに湾曲・蛇行を繰り返し，幾度となく合流，分岐を繰り返す。複雑な形を呈しており，自然流路と考えられる。進行方向は北東で，最大幅は確認できる箇所で約2.5mである。流路内からは縄文時代，古代・中世の遺物が出土している。縄文時代の遺物は少量で，古代・中世の遺物が主体をしめる。遺物の出土状況の所見から，およそ中世段階と考えるほうが妥当であろう。また，SD2は調査区東壁際に検出されたもので，南北方向に形成された中洲状の高まりにより区切られているが，SD1と同一流路の可能性が高い。

SD1・2は覆土の特徴より3層に分けることができ，①～③層とした。SD1・2の遺物の取り上げは，基本的にこの層位に基づいている。①層はしまりの弱い黒褐色粘質土，②層はしまりは弱い黒褐色砂粒砂質土，③しまりの強い黄色褐色砂礫層である。

アカホヤ堆積層（6,700～6,300年前）と考えられるXI層の東側を削るように③層が堆積し，断面台形の流路を形成している。③層は出土遺物の摩耗が激しいことから，土石流の可能性がある。その後②・①層が堆積する。上層になるにつれ，蛇行し流路幅は狭くなり，中世包含層であるV層により埋没してしまっている。

(4) 遺物（第19～25図・第5表）

調査では，旧石器時代，縄文・弥生時代，古代・中世に至るまでの遺物がコンテナ62箱分が出土した。量的には中世が主体で，ついで古代が多く，旧石器時代，縄文・弥生時代は少ない。ここでは，図化に耐えうる119点の遺物を掲載した。また，V層中から刀類らしき鉄製品が出土したが，時間の都合上，図化することができず，写真のみ掲載した。（図版2⑤）

①遺構・層位出土遺物

古代・中世のものを中心に85点掲載した。詳細な観察は第5表にまとめた。以下に特徴を記す。

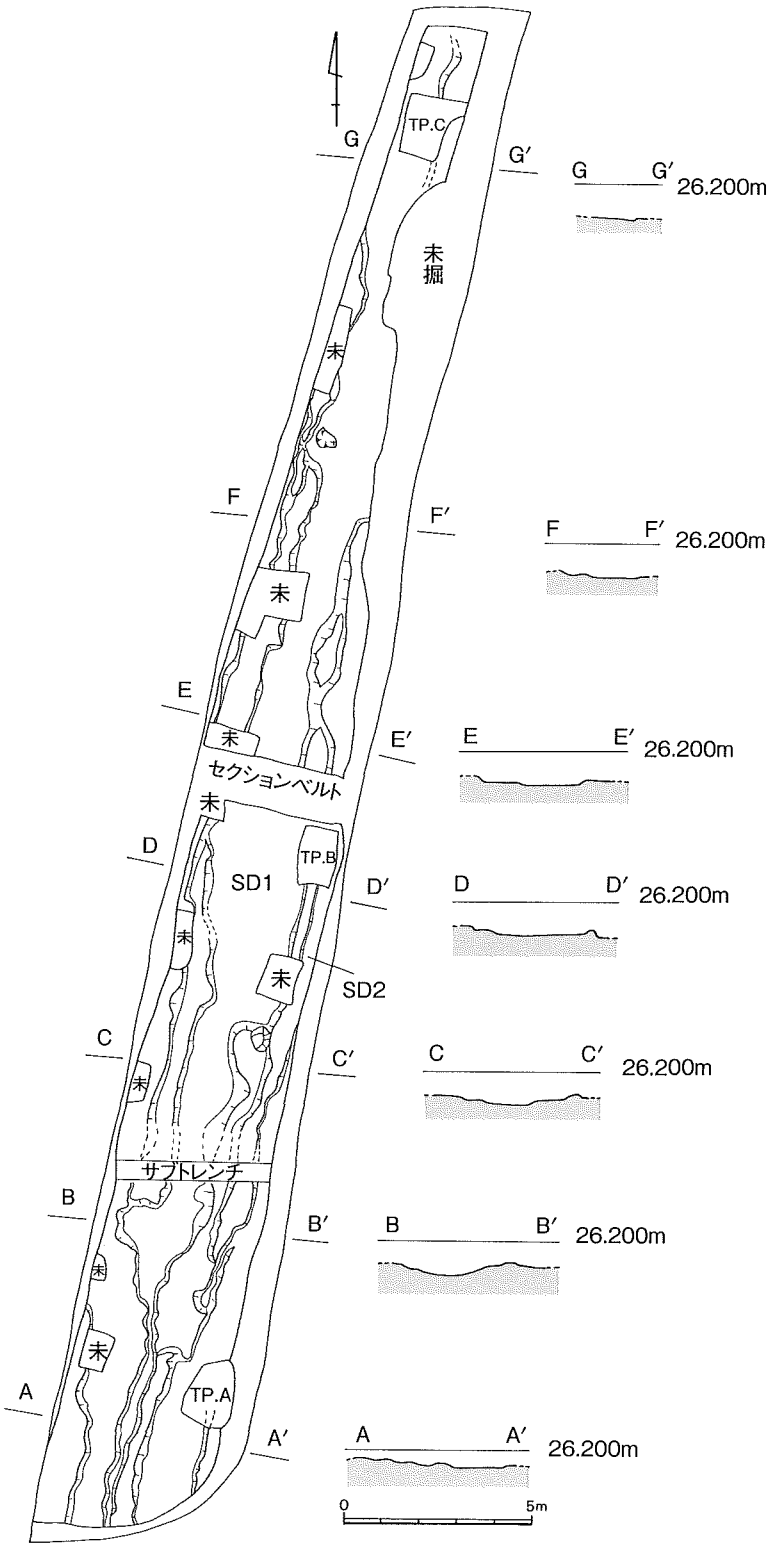
SD1・2出土遺物（第19図・20図）

2～4は土師器。SD1-①層出土。**2**は高台坏である。高台の接合箇所には横方向の丁寧なナデが施される。**4**は甕。外面にハケ目が顕著に残る。内面にはナデが施される。**8**は龍泉窯系青磁碗。

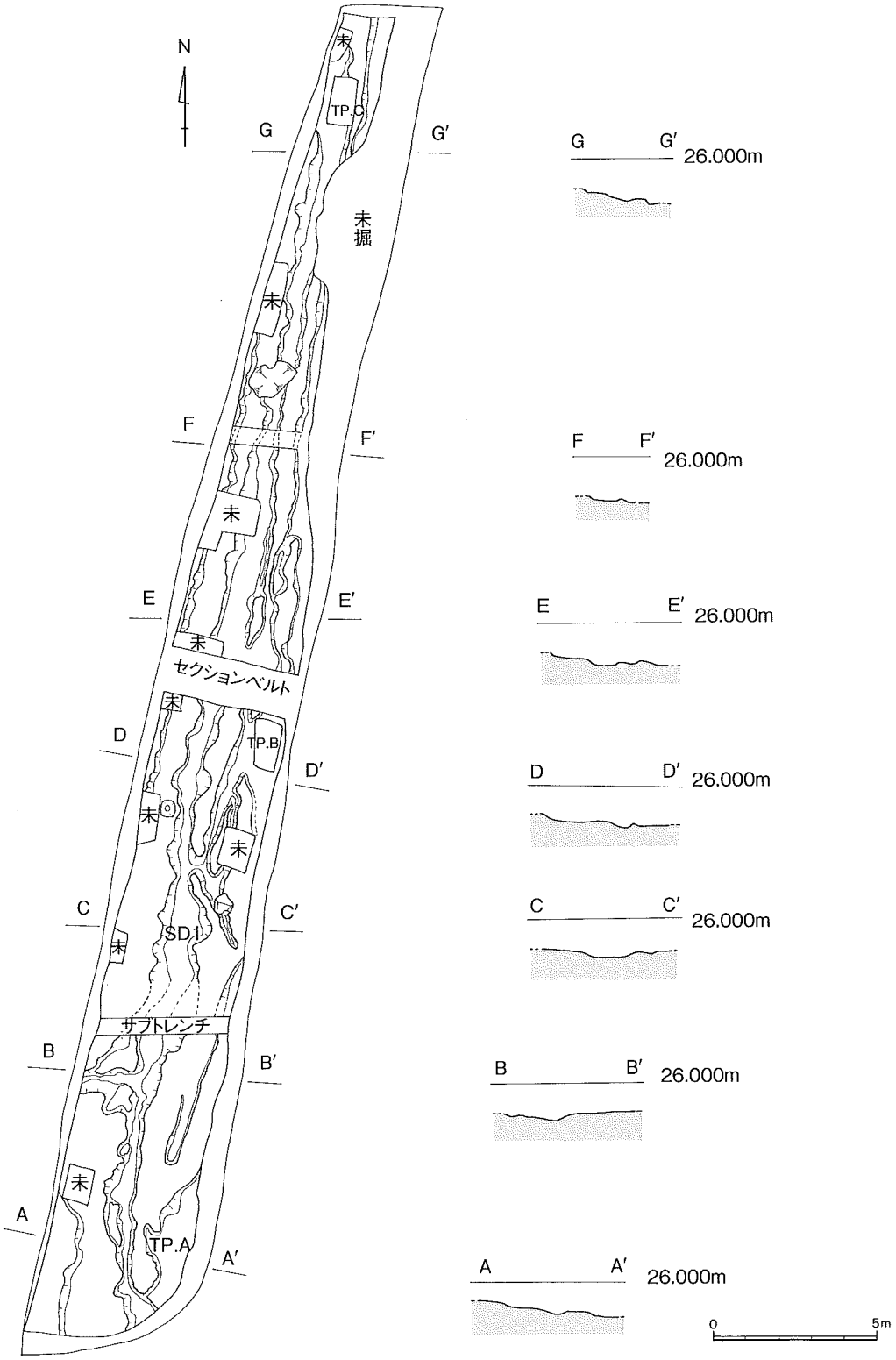
9～32はSD1-②層出土。**17**，**18**，**26**は須恵器の甕。**17**は胴部で外面には格子目状のタタキの痕が残り，内面には同心円状の当て具痕が残る。**18**は外面に格子目状のタタキ痕が，内面にはナデが施されている。**26**は頸部。口縁部を欠損している。外面には沈線を施し，肩部内面にはナデが施される。**24**，**25**は土師器。甑か甕か竈の把手。器種の断定はできなかった。**32**は中国製陶器。内面にロクロ痕が見られる。**33～54**はSD1-③出土。**33**・**34**は土師器。**33**は坏。底面にヘラ切り痕が残る。**34**は高台坏。**36**は茶釜の把手。**44**は須恵器の高台坏。**49**は須恵器の坏蓋。ヘラ描きらしきものが残る。**55**は須恵器。SD2-②層出土。甕の口縁部で外面に波状の沈線が巡る。

層位出土遺物（第21図）

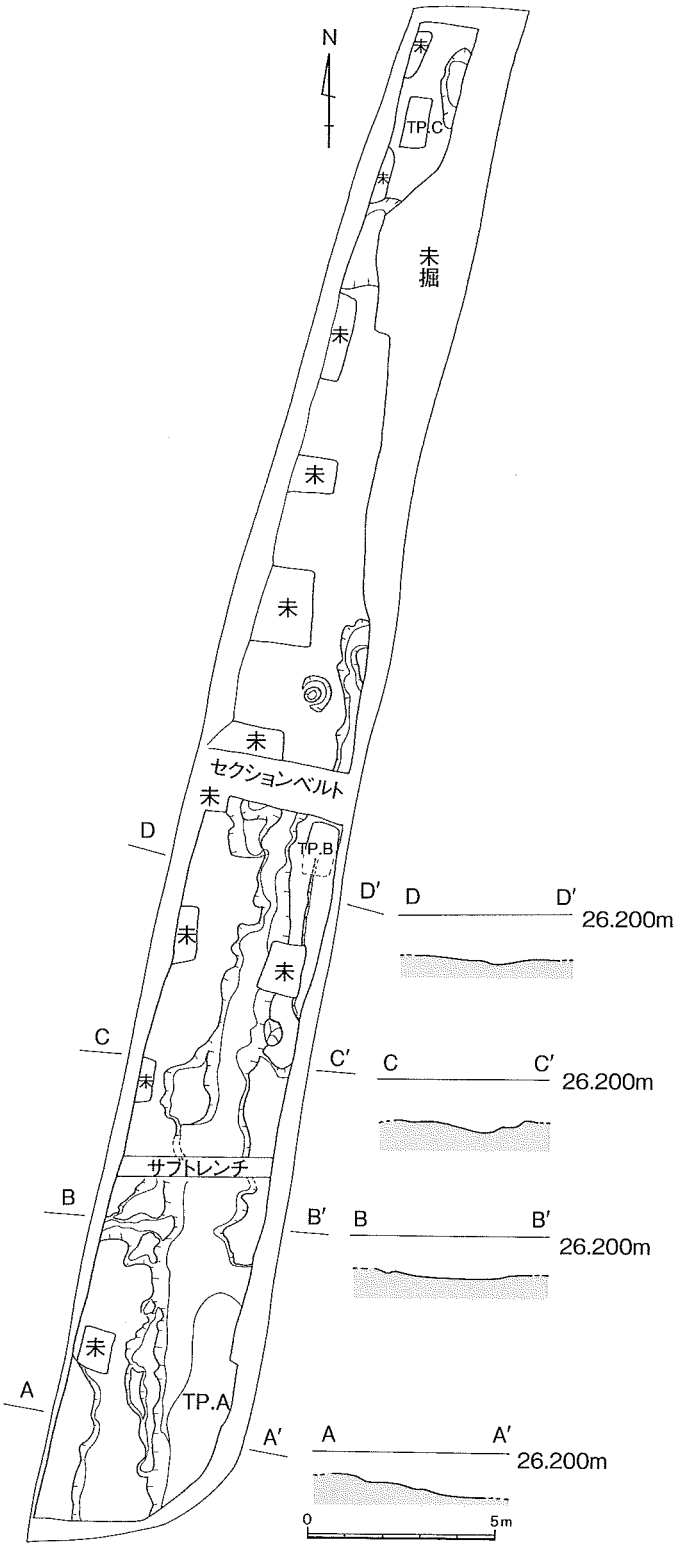
57～73はV層出土。**57**は黒色土器。いわゆる両黒。**58**・**59**は土師器の坏。**66**は須恵器の甕の底部・外面は格子目状の叩きがみられ，内面にはハケ目が残る。**67～73**は中国製青・白磁。**74～85**はⅢ・Ⅳ層出土。**74**は土師器の碗。高台が外反する。**76**は瓦質のすり鉢。内面にスリ目が施される。**78～84**は中国製磁器。**78**・**79**は玉縁状の口縁を持つ白磁碗。**80**は白磁碗の高台。**81**，**82**は青磁。**81**は青磁小碗。**83**，**84**は青花。**85**は肥前陶器。溝縁皿。外面に砂目が残る。



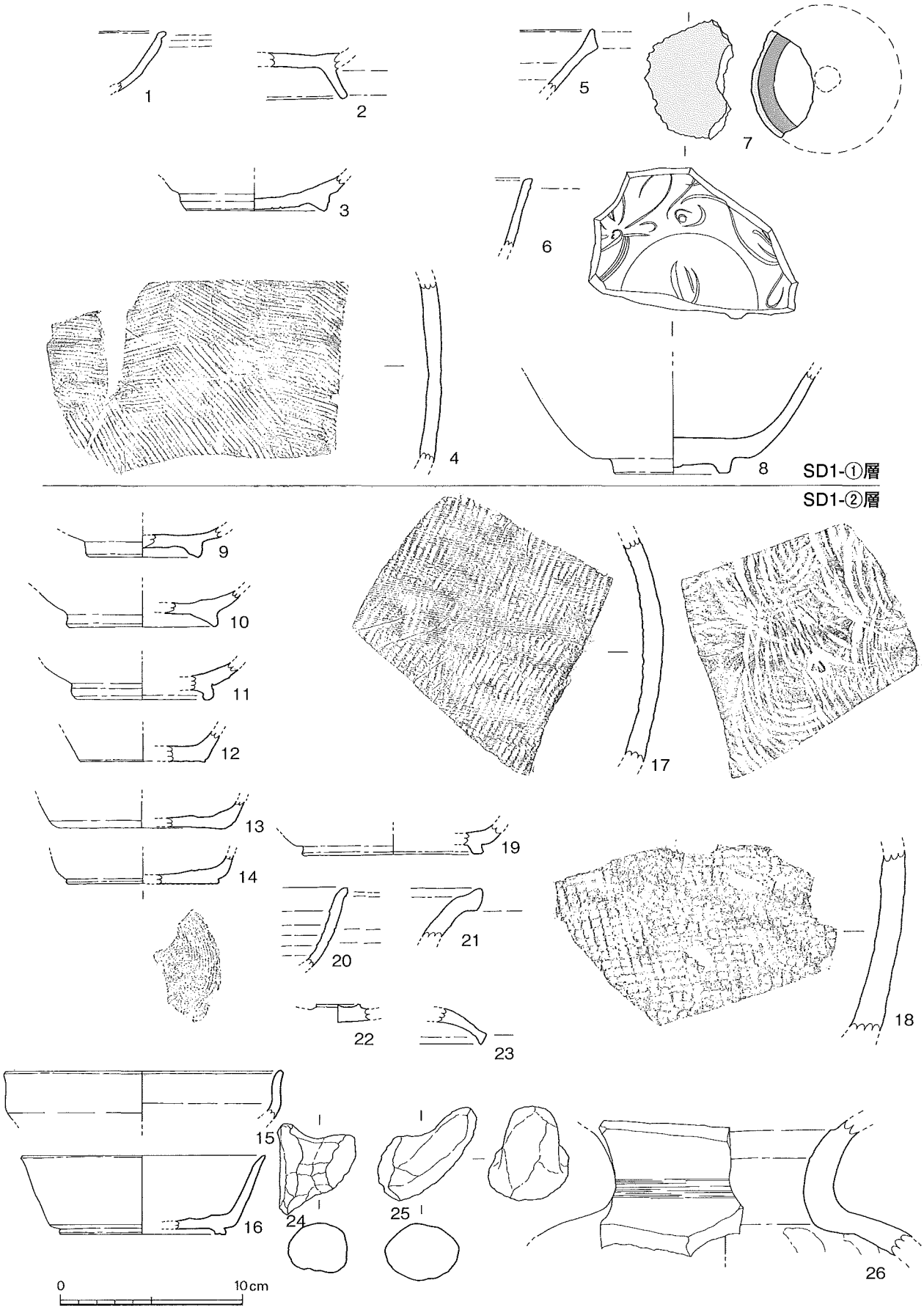
第16図　B地点SD1・2①層完掘（1/200）



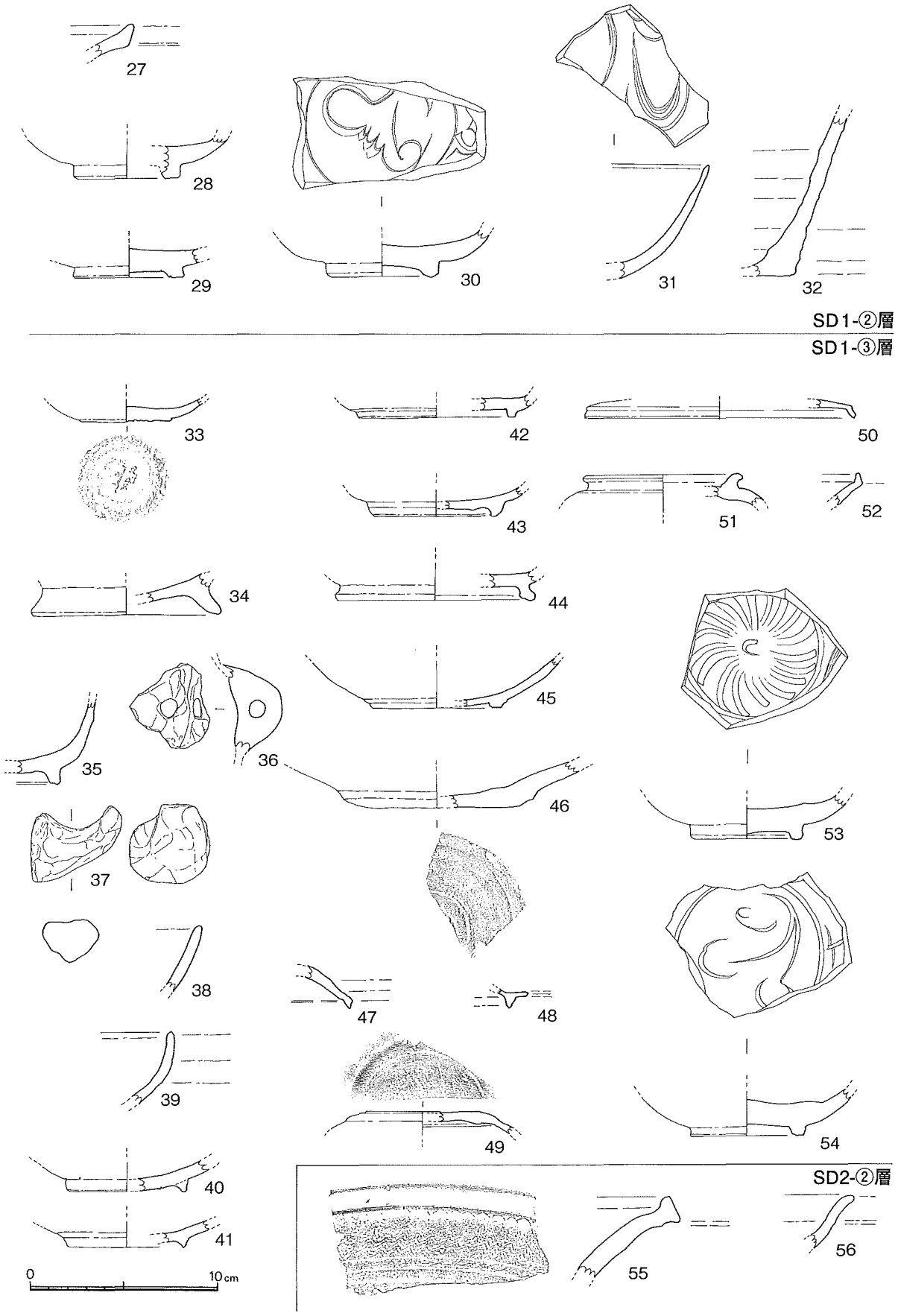
第17図　B地点SD1・2②層完掘（1/200）



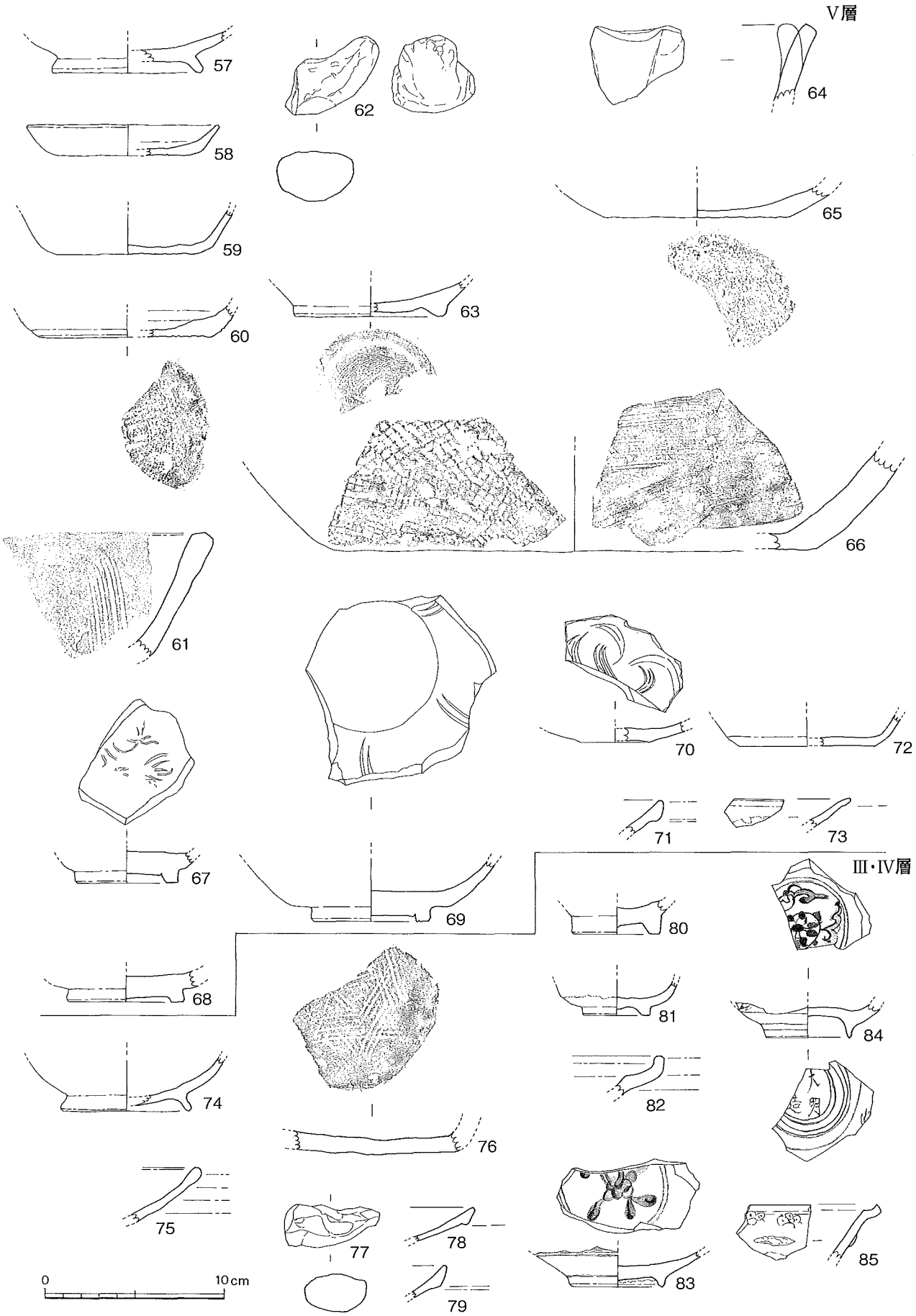
第18図　B地点SD1・2③層完掘（1/200）



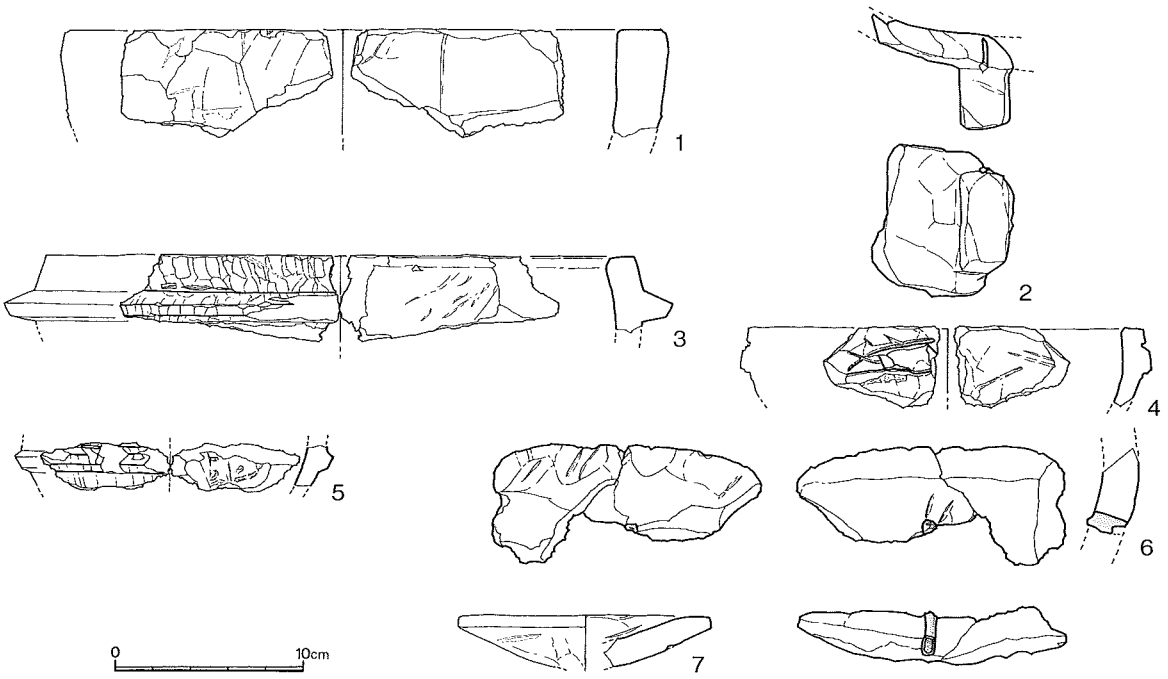
第19図　B地点SD1出土遺物（1/3）



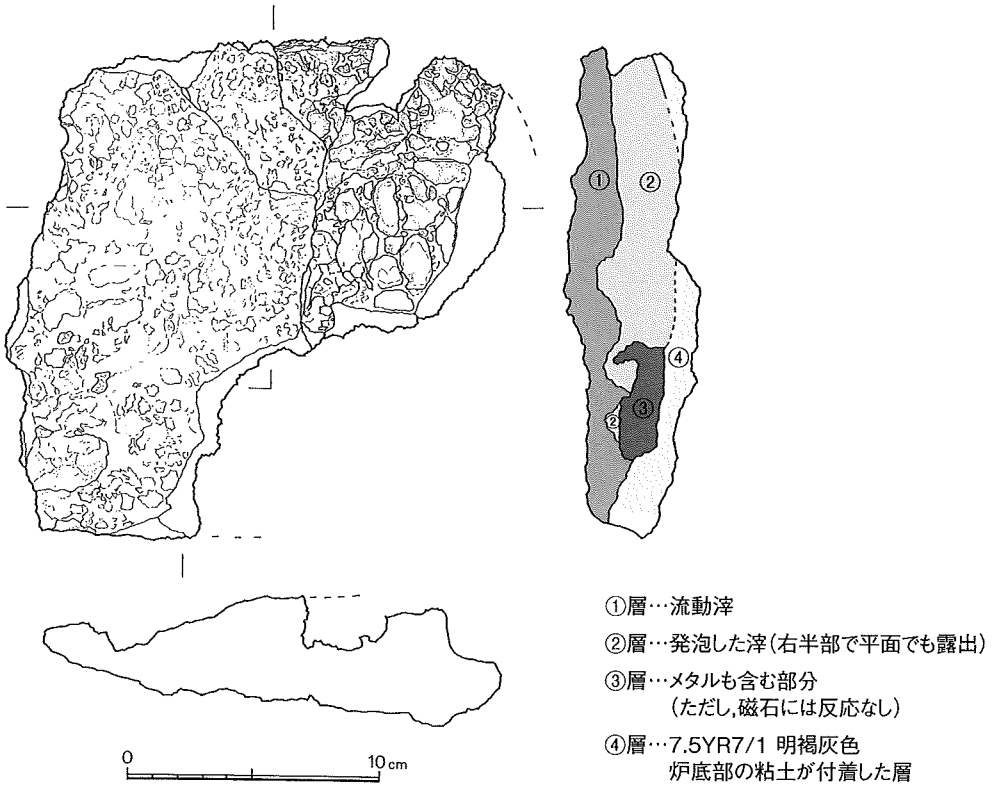
第20図　B地点SD1・2出土遺物（1/3）



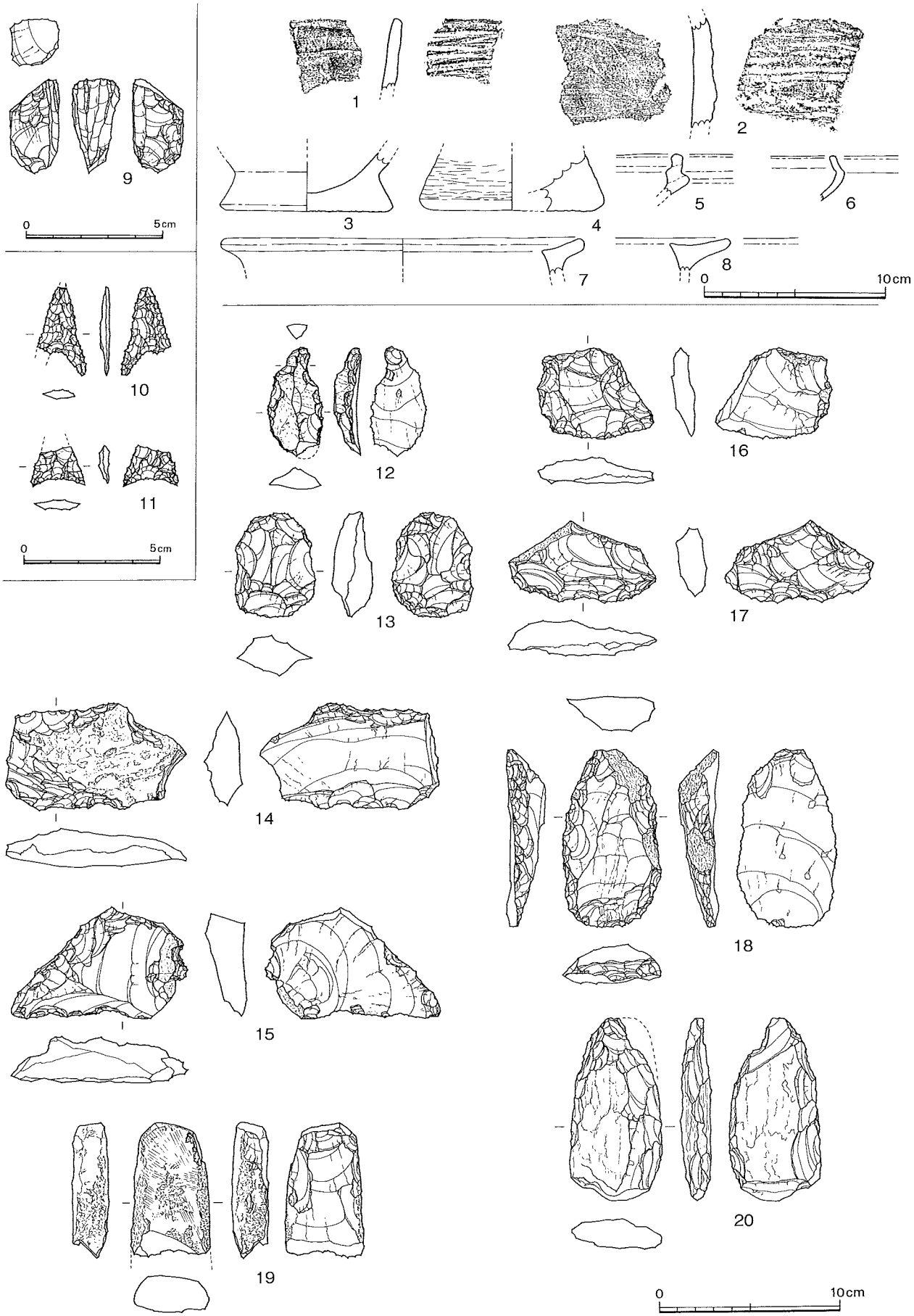
第21図　B地点層位出土遺物（1/3）



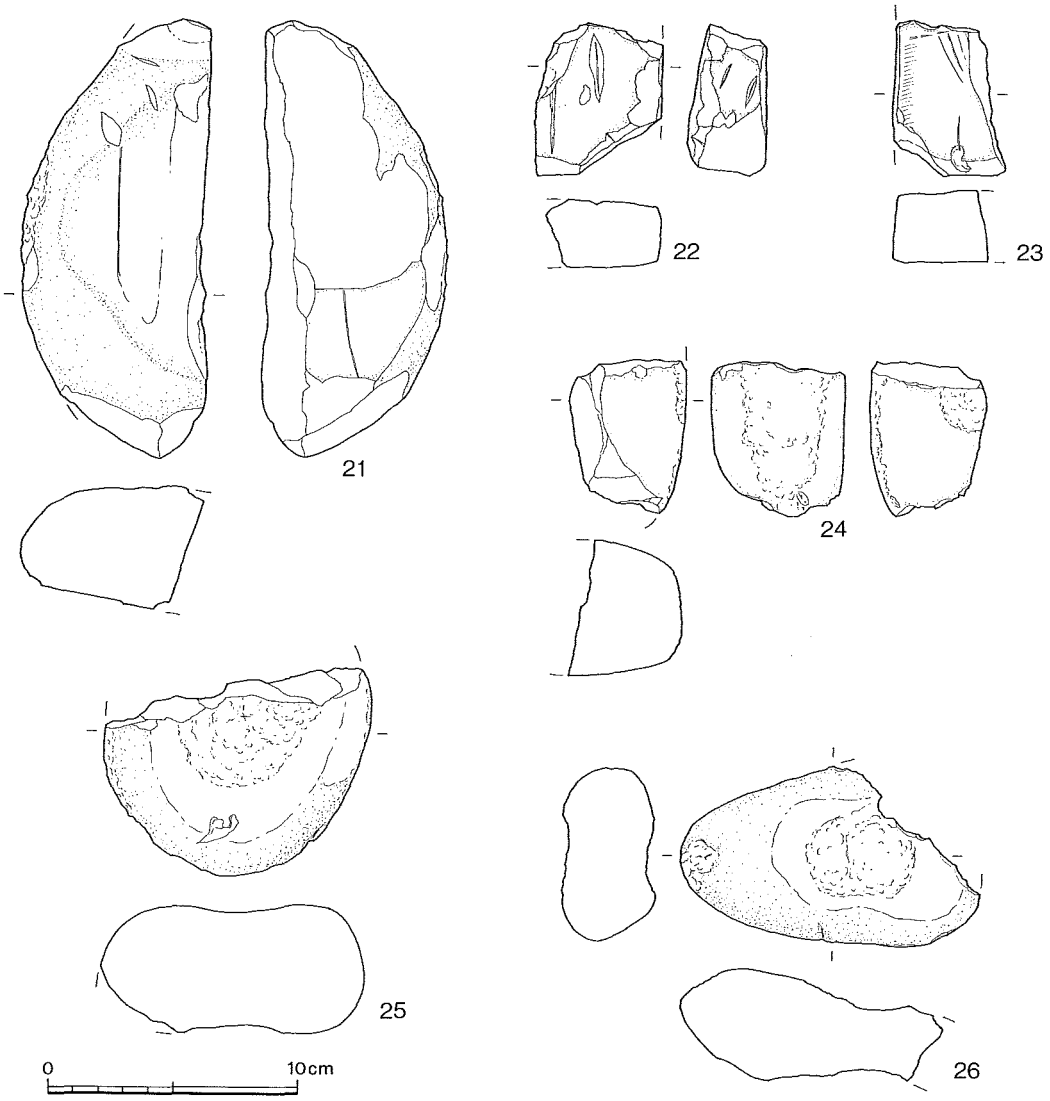
第22図　B地点出土滑石製品（1/4）



第23図　B地点出土鉄滓（1/3）



第24図　B地点出土旧石器・縄文・弥生時代遺物①（1/2・1/3）



第25図　B地点出土旧石器・縄文・弥生時代遺物②（1/3）

②滑石製品（第22図）

石鍋およびその転用品である。鍔は横向きを基本とするが，2・4は器面を全周せず突起状になる。また，2・6は補修時の鉄釘が残る。7は器高が極端に低く，バレン状石製品の可能性がある。

③鉄滓（第23図）

SD2から出土した椀形滓である。一部欠損するものの平面方形と思われ，炉底の形態を反映したものであろう。欠損部の肉眼観察では，流動滓・発泡した滓・メタル・炉床粘土が確認できる。

④旧石器・縄文・弥生時代の遺物（第24・25図）

1～6は縄文晩期の土器。7・8は弥生中期の甕形土器口縁部である。9は黒曜石製マイクロコア。石核の下端部に入念な調整を施す。12～18は玄武岩製スクレイパー。いずれもローリングにより摩滅が著しい。12は石匙，18は分厚い剥片の打面側および両側縁に急角度の調整を加えた掻器である。19は頁岩製磨製石斧。20はやや小振りの緑色片岩製打製石斧で全体が摩滅している。21～23は砥石。石材はすべて砂岩である。出土層位は21，23がSD1-1①層。22がⅤ層である。24～26は磨石類。石材は24が安山岩，25が砂岩，26がデイサイトである。出土層位は，24がSD1-①層，25がⅤ層，26がSD1-③層である。

第５表　出土遺物観察表

図版番号	遺物番号	出土層位	種別	器種	部位	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	色調（土器のみ）	備考
第19図	1	SD1-①	須恵器	坏	口縁部	－	－	－		外面に回転ナデ，荒尾産カ
	2	〃	土師器	高台坏	高台	－	－	－	浅黄橙色（10YR7/4）	高台付根に丁寧なナデ
	3	〃	〃	高台碗	高台	－	7.2	－	浅黄橙色（10YR8/4）	断面三角形の後付け高台
	4	〃	〃	甕	胴部	－	－	－	黒褐色（10YR3/1）	外面にハケ目
	5	〃	須恵器	東播系捏鉢	口縁部	－	－	－		
	6	〃	白磁	碗	口縁部	－	－	－		Ⅴ類
	7	〃		羽口	－	－	－	－		外面にガラス質の付着物
	8	〃	青磁	龍泉窯系青磁碗	高台	－	－	－		
	9	SD1-②	土師器	碗	高台	－	6	－	浅黄橙色（10YR8/4）	
	10	〃	〃	〃	高台	－	8	－	明黄褐色（10YR6/6）	
	11	〃	〃	〃	高台	－	7	－	浅黄橙色（10YR8/4）	
	12	〃	〃	坏	底部	－	6.6	－	明黄褐色（10YR6/6）	底部に静止糸切りあと
	13	〃	〃	〃	底部	－	9.4	－	〃	
	14	〃	〃	〃	底部	－	8	－	〃	底部に静止糸切りあと
	15	〃	須恵器	坏	口縁	15	－	－		両面に回転ナデ
	16	〃	〃	高台坏	－	13	9	4		内側から外面胴部まで回転ナデ， 底部にはヘラケヅリ，断面台形の高台
	17	〃	〃	甕	胴部	－	－	－		外面：格子目状の叩き 内面：同心円状の工具あと
	18	〃	〃	甕	胴部	－	－	－		外面：格子目状の叩き 内面：ナデ
	19	〃	土師器	碗	高台	－	10	－	褐灰色（10YR5/1）	
	20	〃	〃	坏	口縁	－	－	－	浅黄橙色（10YR8/4）	外面：ナデ，内面：ミガキ
	21	〃	須恵器	壺	口縁	－	－	－		外反する，内面：回転ナデ
	22	〃	〃	坏蓋	つまみ	－	－	－		扁平なつまみを有する
	23	〃	〃	〃	口縁	－	－	－		
	24	〃	土師器	甑の把手	－	－	－	－	明黄褐色（10YR6/6）	
	25	〃	〃	〃	－	－	－	－	〃	
	26	〃	須恵器	甕	頸部	－	－	－		
第20図	27	SD1-②	〃	東播系捏鉢	口縁	－	－	－		
	28	〃	青磁	龍泉窯系青磁碗	高台	－	5.2	－		
	29	〃	〃	〃	高台	－	6	－		
	30	〃	〃	〃	高台	－	6	－		
	31	〃	〃	〃	口縁	－	－	－		
	32	〃	陶器	中国製壺	底部	－	－	－		
	33	SD1-③	土師器	坏	底部	－	5	－	浅黄橙色（10YR8/4）	底部に回転を利用したヘラ切り離し跡
	34	〃	〃	高台坏	高台	－	9.8	－	〃	高台が外反する
	35	〃	〃	〃	〃	－	－	－	〃	
	36	〃	〃	釜	把手	－	－	－	明黄褐色（10YR6/6）	
	37	〃	〃	甑	把手	－	－	－	浅黄橙色（10YR8/4）	
	38	〃	須恵器	坏	口縁	－	－	－	灰白色（10YR8/2）	口縁部のみ灰色に変色
	39	〃	〃	〃	〃	－	－	－	〃	〃
	40	〃	〃	高台坏	高台	－	6	－	〃	
	41	〃	〃	〃	高台	－	6.2	－	明黄褐色（10YR6/6）	
	42	〃	〃	〃	高台	－	8	－	黒褐色（10YR3/1）	
	43	〃	〃	〃	高台	－	6.4	－	灰白色（10YR8/2）	
	44	〃	〃	〃	高台	－	10.2	－	黒褐色（10YR3/1）	高台が外反する
	45	〃	〃	〃	高台	－	7	－	灰白色（10YR8/2）	高台が内側に巻く
	46	〃	〃	坏	底部	－	10	－	褐灰色（10YR5/1）	底部に回転を利用したヘラ削り
	47	〃	〃	坏蓋	口縁	－	－	－	〃	
	48	〃	〃	〃	〃	－	－	－	〃	
	49	〃	〃	〃	底部	－	7	－	〃	
	50	〃	〃	〃	口縁	14	－	－	〃	
	51	〃	〃	〃	つまみ	－	－	－	〃	つまみが輪状にまわる，外反している
	52	〃	〃	東播系捏鉢	口縁	－	－	－	〃	
	53	〃	青磁	龍泉窯系青磁碗	高台	－	6	－		
	54	〃	〃	〃	高台	－	5.8	－		
	55	SD2-②	須恵器	甕	口縁	－	－	－	黒褐色（10YR3/1）	外面に櫛描文
	56	〃	土師器	坏	口縁	－	－	－	明黄褐色（10YR6/6）	外反する
第21図	57	Ⅴ	黒色土器	碗	高台	－	8	－	黒色（10YR2/1）	両黒
	58	Ⅴ	土師器	坏	底部・高台	10.2	7.4	2	浅黄橙色（10YR8/4）	底部に回転を利用したヘラ切りはなし痕
	59	Ⅴ	〃	〃	底部	－	8	－	〃	底部に回転を利用した ヘラ切りのあと，ナデ
	60	Ⅴ	〃	〃	〃	－	9	－	〃	〃
	61	Ⅴ	〃	すり鉢	口縁	－	－	－	明黄褐色（10YR6/6）	
	62	Ⅴ	〃	甑	把手	－	－	－	浅黄橙色（10YR8/4）	
	63	Ⅴ	〃	高台坏	底部	－	8	－	灰白色（10YR8/2）	底部に回転糸切り痕あり
	64	Ⅴ	須恵器	片口鉢	口縁	－	－	－	〃	
	65	Ⅴ	〃	坏	底部	－	10	－	褐灰色（10YR5/1）	底部に回転を利用したヘラ切りはなし痕
	66	Ⅴ	〃	甕	底部	－	27	－	〃	外面：格子目状のタタキ痕 内面：ナデ
	67	Ⅴ	青磁	龍泉窯系青磁碗	高台	－	5.6	－		
	68	Ⅴ	〃	〃	〃	－	6.4	－		
	69	Ⅴ	〃	〃	〃	－	6.8	－		
	70	Ⅴ	〃	同安窯系青磁皿	底部	－	4	－		
	71	Ⅴ	白磁	碗	口縁	－	－	－		Ⅳ類
	72	Ⅴ	白磁	底部	底部	－	7.6	－		
	73	Ⅴ	白磁	皿	口縁	－	－	－		
	74	Ⅳ	土師器	高台坏	高台	－	7	－		
	75	Ⅲ	須恵器	坏	口縁	－	－	－		
	76	〃	瓦質土器	すり鉢	底部	－	－	－		
	77	Ⅳ	土師器	甑	把手	－	－	－	明黄褐色（10YR6/6）	
	78	Ⅲ	白磁	碗	口縁	－	－	－		Ⅳ類
	79	〃	〃	〃	〃	－	－	－		〃
	80	〃	〃	碗	高台	－	5	－		〃
	81	〃	青磁	小碗	高台	－	4	－		
	82	〃	〃	－	口縁	－	－	－		
	83	〃	青花	碗	高台	－	5	－		
	84	〃	〃	〃	高台	－	4	－		小野碗E群
	85	〃	肥前陶器	碗	口縁	－	－	－		胴部に砂目付着

図版 1

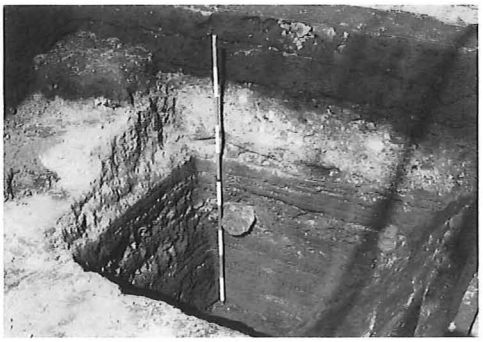
稗田原遺跡A地点

①調査区遠景（北東から）

②調査区近景（南から）

③調査風景（南から）

④北壁土層断面（南から）



⑤セクションベルト（南から）

⑥SDI完掘状況①（南から）

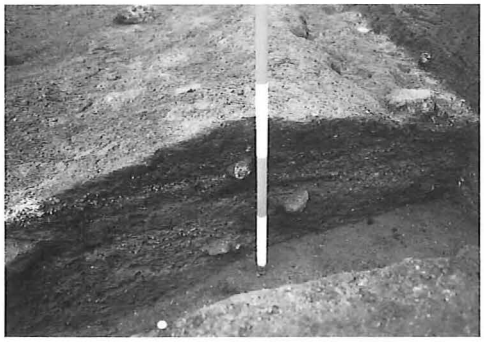
⑦SDI完掘状況②（西から）

稗田原遺跡B地点

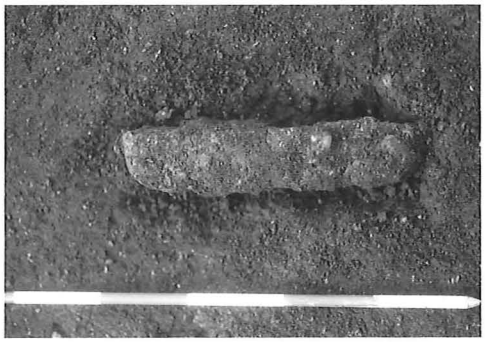
①調査風景（南から）

②セクションベルト（南から）

③西壁土層断面（南東から）



④サブトレンチ（南から）



⑤遺物出土状況①

⑥遺物出土状況②

⑦遺物出土状況③

⑧遺物出土状況④

下宮遺跡

(1) 調査方法

平成17年5月の範囲確認調査の結果をうけ，本調査を行った。下宮遺跡は稗田原遺跡に隣接しており今回調査を行った地点は，稗田原遺跡B地点から北に約200mに位置している。調査に先だって，表土のⅠ層，旧表土であるⅡ層，中世の遺物を包含するⅢ層上面までを重機により掘削した。掘削深度は約30cmである。調査では，国土座標に基づき10×10mの大グリッドを設定し，さらに5m四方に4分割に細分し，北から順に1～9区，東西にA，B区を設定した。遺物の取り上げは，基本的にグリッド・層位ごとにおこなったが，ピットやSC等の遺構に関しては層位別に取り上げをおこなった。人力による掘り下げ作業は，Ⅲ層以下をねじり鎌で精査・掘り下げをおこなった。

(2) 土層

今回の調査では，比較的層の保存がよい調査区東壁と，北壁の層序記録を行い，遺跡全体の土層把握につとめた。切り合い関係にあるSC1～SC3に関しては，十字トレンチを設定し，遺構覆土の土層観察から切り合い関係の把握につとめた。基本土層は以下の通りである。

Ⅰ	10YR4/1	褐灰土表土	Ⅱ　10YR4/1　褐灰土　少量のパミスが混じる．（旧耕作土）
Ⅲ	10YR4/1	褐灰土	にぶい黄褐土（10YR4/3）が混じる．パミス混じりの遺物包含層．
Ⅳa	10YR5/6	黄褐色砂質土	しまり強い．少量のパミスを含む．上面で遺物出土．
Ⅳb	5YR4/4	にぶい赤褐土	しまり強い．少量のパミスを含む．
Ⅴa	7.5YR2/1	黒色土	しまり弱い．パミスをほとんど含まない．（北半部の包含層）
Ⅴb	7.5YR6/1	褐灰砂	黒色土（7.5YR/2/1）が混じる．
Ⅵ	10YR2/2	黒褐色土	しまり強い．パミス（白・ピンク）を多量に含む．シルト．無遺物層．
Ⅵ'	7.5YR5/8	明褐色土	パサパサの土.6区以南でのピット検出面.標高14mラインでグラデーション状に変色．
Ⅵ"	5YR3/2	暗赤褐色土	硬化面．
Ⅶ	10YR5/6	黄褐色砂礫土	しまり強く，少量のパミスを含む．人頭・こぶし大の礫も部分的に混じる．

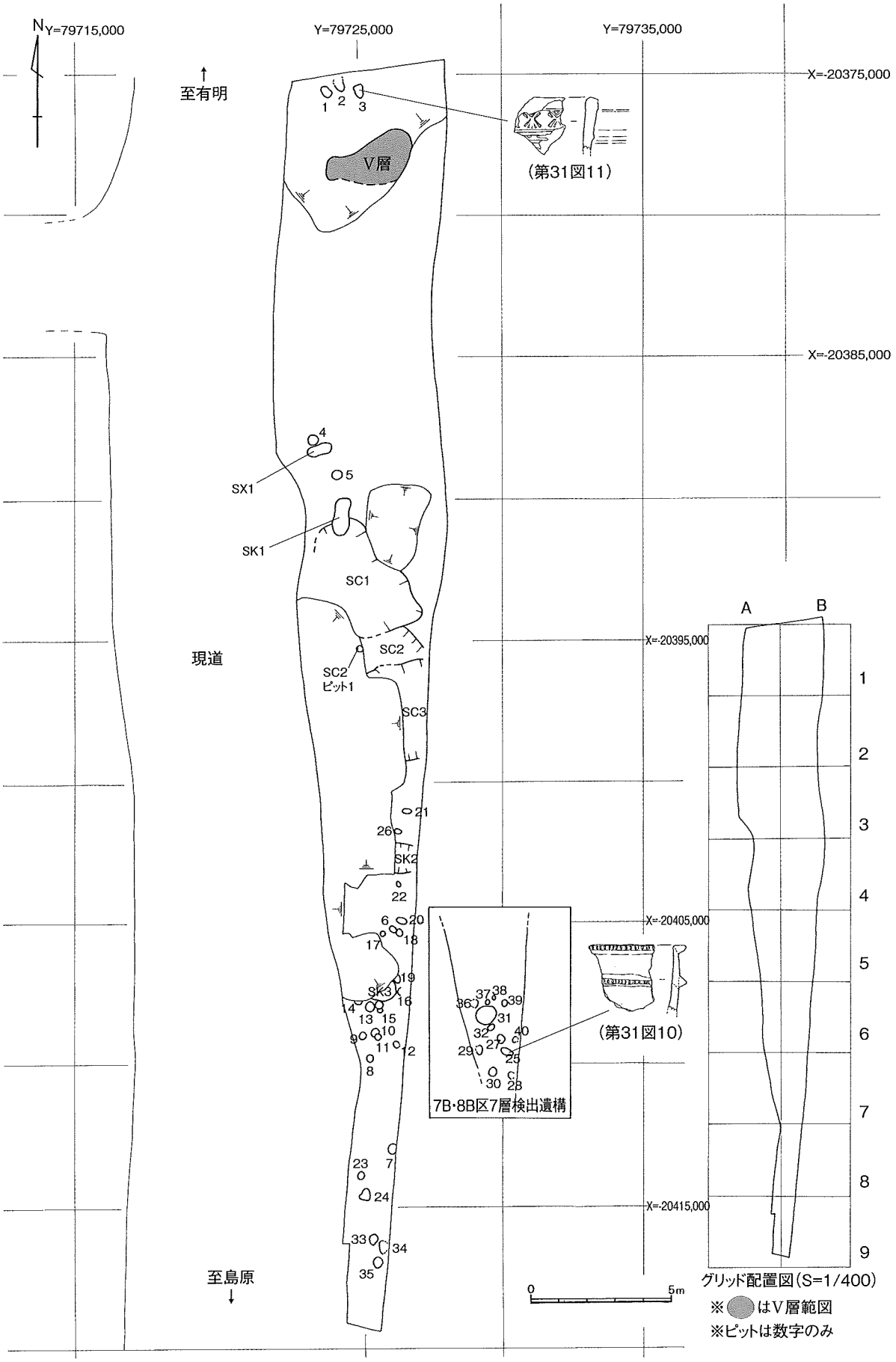
(3) 遺構（第28・30図，第6表）

今回検出した遺構はピット40基，土坑3基，不明遺構1基，竪穴状遺構3基である。ここでは，古代の遺構の特徴を記し，他の遺構に関しては第6表にまとめた。

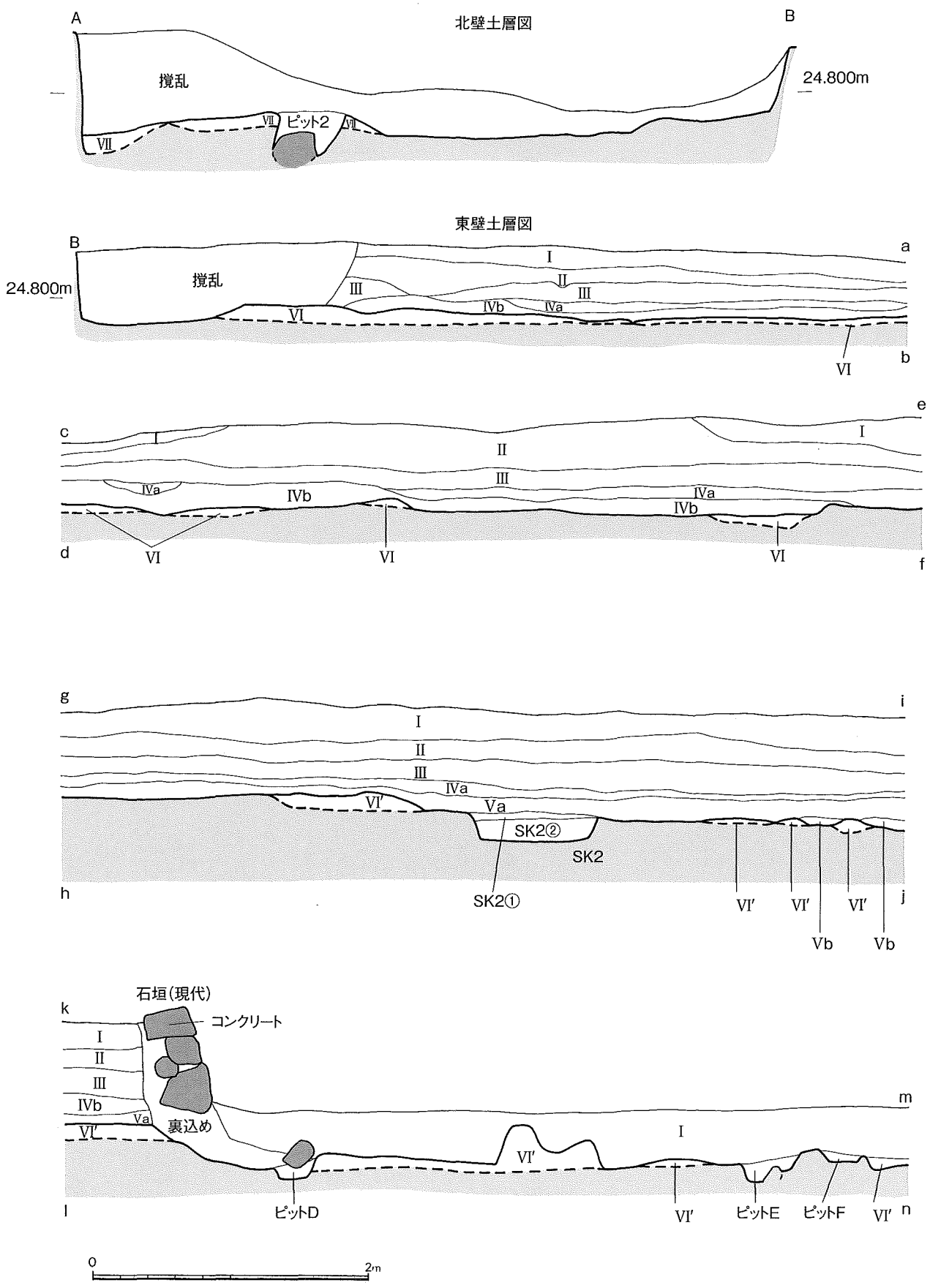
古代の遺構（SK1・SC1～SC3）

SK1は3A区で検出した。長軸は約1.57m，短軸は約62cmの楕円形を呈し，SC1をきる形で掘り込まれている。掘り込み面の標高は約24.5m，床面標高は24.34mである。覆土内からは，須恵器の甕や高坏脚部，土師器の碗や甕（第31図）が出土しており，およそ8世紀代には廃絶したようである。

SC1・SC2・SC3は4B・5B区で検出した。3基とも掘り込み面はⅣb層である。西側に入る撹乱により大きく削平をうけているが，残存部分ではSC2がSC1とSC3に切られていることが確認できた。またSC1とSC3は切り合い関係は見られない。SC1は想定される全体の約6割程度が残っており，一辺約4.5mの方形状の形を呈する。主軸は磁北から西に約30度をはかる。中心部を囲むように二段のテラスを配す。貼床やピット，炉穴などの遺構は検出できなかった。掘り込み面の標高は約24.5m，床面標高は最深部で標高約24.3mである。覆土からは，土師器や須恵器が出土している。SC2は西側を撹



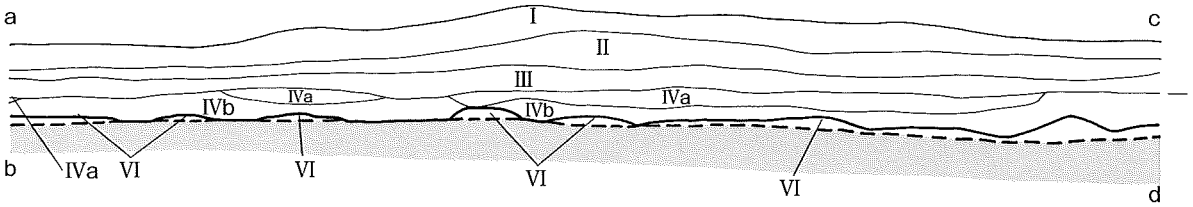
第26図　下宮遺跡遺構配置図（1/200）

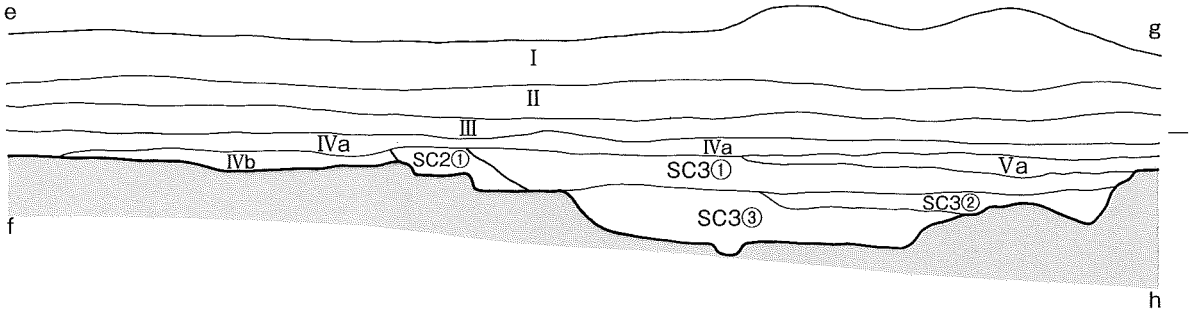


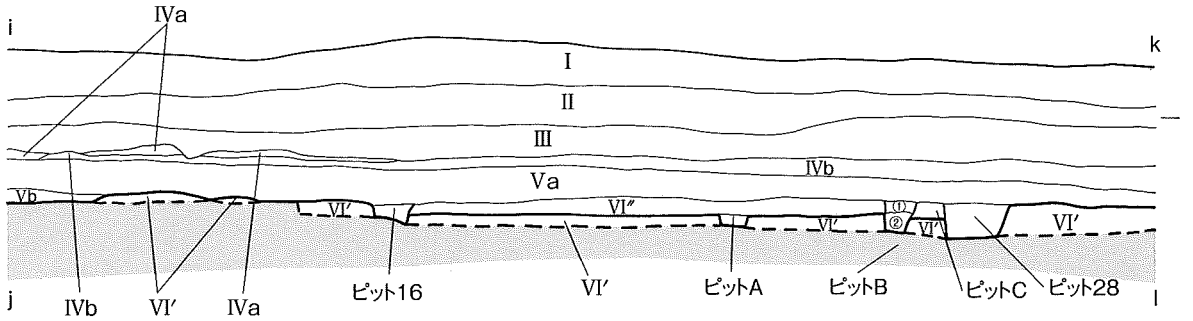
第27図　下宮遺跡土層図（1/40）

下宮土層図

I	10YR4／1	褐灰色土	表土。
II	10YR4／1	褐灰色土	少量のパミスが混じる。(旧耕作土)
III	10YR4／1	褐灰色土	にぶい黄褐色土(10YR4／3)が混じる。パミスが混じる。
IVa	10YR5／6	黄褐色砂質土	しまり強い。少量のパミスを含む。上面で中世遺物出土。
IVb	5YR4／4	にぶい赤褐色土	しまり強い。少量のパミスを含む。
Va	7.5YR2／1	黒色土	しまり弱い。パミスをほとんど含まない。中世遺物包含層。
Vb	7.5YR6／1	褐灰色砂	黒色土(7.5YR2／1)が混じる。中世遺物包含層。
VI	10YR2／2	黒褐色土	しまり強い。パミス(白・ピンク)を多量に含む。シルト。無遺物層。
VI'	7.5YR5／8	明褐色土	パミスをほとんど含まない。パサパサの土。6区以南でのピット検出面。標高14mラインでグラデーション状に変色。
VI"	5YR3／2	暗赤褐色土	硬化面
VII	10YR5／6	黄褐色砂礫土	しまり強く、表土はパラパラとれる。少量のパミスを含む。人頭・こぶし大の礫も部分的に混じる。
ピット2	10YR2／2	黒褐色土	しまり弱い。シルト・パミスを少量含む。ピット覆土。



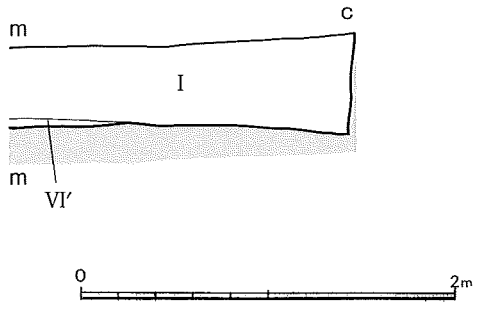


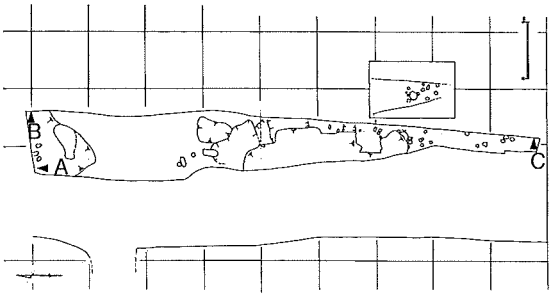


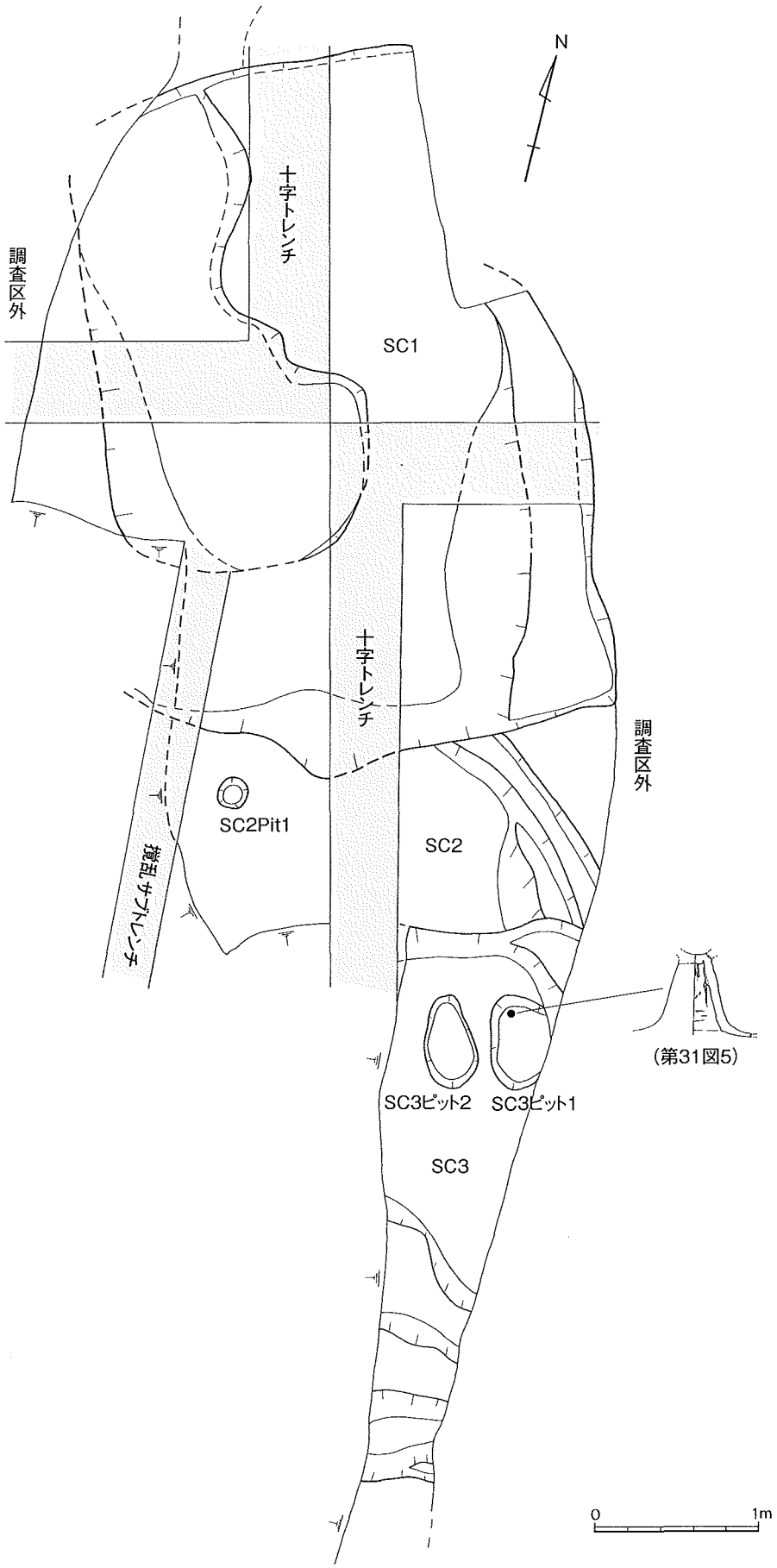
下宮東壁

SC2 ①	7.5YR2／1	黒色土	しまり弱い。白色パミスが少量混じる。SC3に切られる。	
SC3 ①	7.5YR2／1	黒色土	明褐色土(7.5YR5／6)がブロック状に少量混じる。	
②	7.5YR5／6	明褐色土	しまり弱い。板状に入る。	
③	7.5YR3／2	黒褐色土	明褐色土(7.5YR5／6)が少量混じる。しまり弱い。	
SK2 ①	7.5YR6／1	褐灰色砂	直径1～2mmの砂粒。	
②	7.5YR2／1	黒色土	明褐色土(7.5YR5／6)がブロック状に入る。しまり弱い。	
ピットA	7.5YR2／1	黒色土		
ピットB ①	7.5YR4／3	褐色土	しまり強い。	
②	7.5YR2／2	黒褐色土	ピット28よりやや黒い。	
ピットC	7.5YR2／2	黒褐色土	ピット28よりやや黒い。	
ピットD	7.5YR4／1	褐灰色土	しまり弱い。フカフカ土。上部は削平。	
ピットE	7.5YR4／1	褐灰色土		
ピットF	7.5YR4／1	褐灰色土		
ピット28	7.5YR2／2	黒褐色土	しまり弱い。フカフカ土。	
ピット16	7.5YR2／1	黒色土	しまり弱い。フカフカ土。	

24.800m

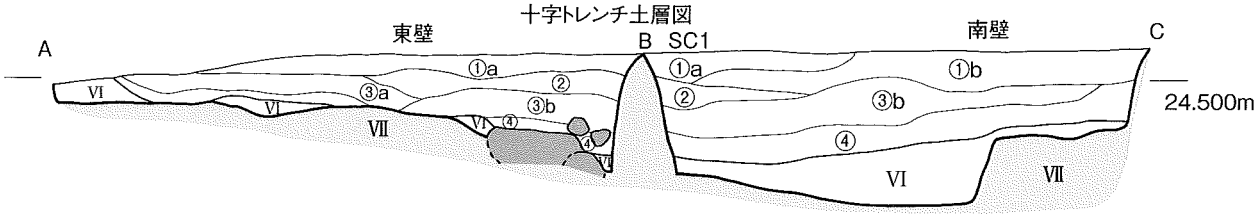




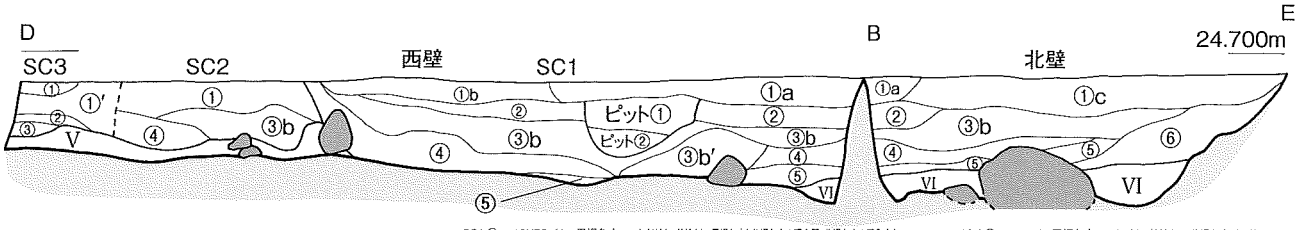


第28図　下宮遺跡SC1～3（1/40）

十字トレンチ土層図

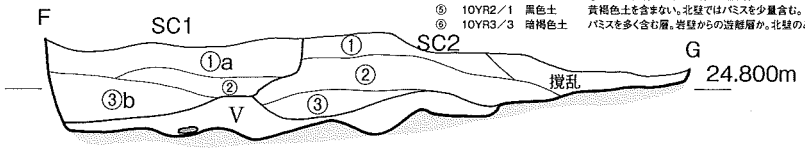


SC1	①a	10YR4／2	灰黄褐色土	しまり弱い。粘性なし。黄褐色土が斑状に入る。
	①b	10YR1.7／1	黒色土	しまり弱い。粘性なし。黄褐色土をほとんど含まない。
	②	2.5Y6／6	明黄褐色土	しまり弱い。粘性なし。やや砂質をおびる
	③a	10YR4／2	灰黄褐色土	しまり弱い。粘性なし。パミスが多く混じる（Φ5mm程度）。
	③b	10YR3／2	黒褐色土	しまり弱い。粘性なし。黄褐色土が斑状に混じる。パミスが混じる。東壁では黄褐色土が少なく、パミスが多い。
	④	10YR2／1	黒色土	黄褐色土が斑状に混じる。パミスが混じる。東壁は黄褐色土、パミスともに少ない。
	Ⅵ	10YR3／2	黒褐色土	しまり弱い。粘性なし。パミスが多く混じる。



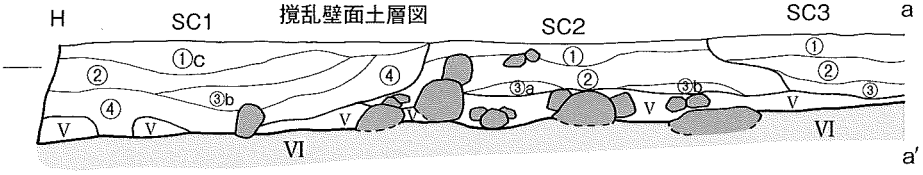
SC1	①a	10YR3／1	黒褐色土	しまりなし。粘性なし。黒褐色土と黄褐色土の混合層。黄褐色土の混入少ない。
	①b	10YR2／1	黒色土	しまりなし。粘性なし。黒褐色土と黄褐色土の混合層。 ①aに比べて、黄褐色土の混合量多い。斑状に混じる。
	①c	7.5YR5／4	にぶい褐色土	しまり強い。粘性なし。黄褐色土がまだらに混じる。パミスが混じる。
	②	2.5Y7／6	明黄褐色土	砂質をおびた黄褐色土。
	③b	10YR3／1	黒褐色土	しまりなし。粘性なし。黄褐色土が斑状に混じる。北壁はパミス含む。
	③b′	10YR3／3	暗褐色土	しまりなし。粘性なし。黄褐色土を含む。パミスが混じる。
	④	10YR3／3	暗褐色土	③bとほぼ同様だが、やや明るい色調。
	⑤	10YR2／1	黒色土	黄褐色土を含まない。北壁ではパミスを少量含む。
	⑥	10YR3／3	暗褐色土	パミスを多く含む層。岩壁からの遊離層か。北壁のみ存在。
	ピット①	10YR3／1	黒褐色土	しまりなし。粘性なし。黄褐色土が斑状に混じる。
	ピット②	10YR4／3	にぶい黄褐色土	しまりなし。粘性なし。黄褐色土が斑状に混じる。
SC2①		10YR3／1	黒褐色土	しまりなし。粘性なし。黄褐色土が混じらない。 パミスがわずかに混じる。
	③b	2.5Y5／6	黄褐色土	しまりなし。粘性なし。黒褐色土との混合層。
	④	10YR3／2	暗褐色土	しまりなし。粘性なし。パミスを多く含む。
SC3①		10YR3／1	黒褐色土	しまりなし。粘性なし。黄褐色土との混合層。
	①′	10YR4／2	灰黄褐色土	しまりなし。粘性なし。パミスをわずかに含むものの、混合物は少ない。
	②	2.5Y5／6	黄褐色土	しまりなし。粘性なし。やや砂質をおびる。混合物なし。
	③	10YR2／2	黒褐色土	しまりなし。粘性なし。黄褐色土が縞状に混じる。
	Ⅴ	10YR2／1	黒色土	しまりなし。粘性なし。混合物を含まない。
	Ⅵ	10YR4／2	灰黄褐色土	しまり強い。パミスの団結層

攪乱サブトレンチ土層図

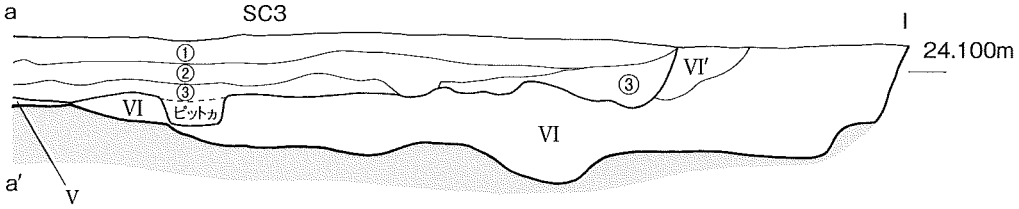


SC1	①a	10YR4／3	にぶい黄褐色土	しまりなし。粘性ほとんどなし。黒褐色土に黄褐色土がまだらに混じる。
	②	2.5Y6／6	明黄褐色土	ブロック状に堆積した黄褐色土。やや砂質をおびる
	③b	10YR3／1	黒褐色土	しまりなし。粘性ほとんどなし。黄褐色土がほとんど混じらない。
SC2①		0.5YR4／4	褐色土	しまり強い。赤褐色土と灰褐色土の混合層。
	②	10YR3／1	黒褐色土	しまりなし。黄褐色土がわずかにまだらに混じるが、混入量は少ない。
	③	2.5Y7／6	明黄褐色土	ややしまりあり。レンズ状に堆積する。
	Ⅴ	10YR3／2	黒褐色土	しまりなし。基本土層のⅤに相当。

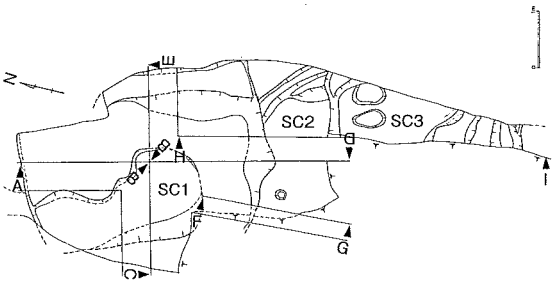
攪乱壁面土層図



SC1	①c	2.5Y6／6	明黄褐色土	粘性弱い。黒褐色土と黄褐色土の混合層。黄褐色土が多く混じる。パミス混じる。
	②	2.5Y5／4	黄褐色土	黒褐色土と黄褐色土の混合層。やや黒味がかった色調。やや砂質をおびる。パミス混じる。
	③b	10YR2／1	黒色土	しまりなし。粘性なし。混入物ほとんどなし。
	④	10YR3／3	暗褐色土	しまりなし。粘性なし。黒褐色土に黄褐色土が斑状に混じる。

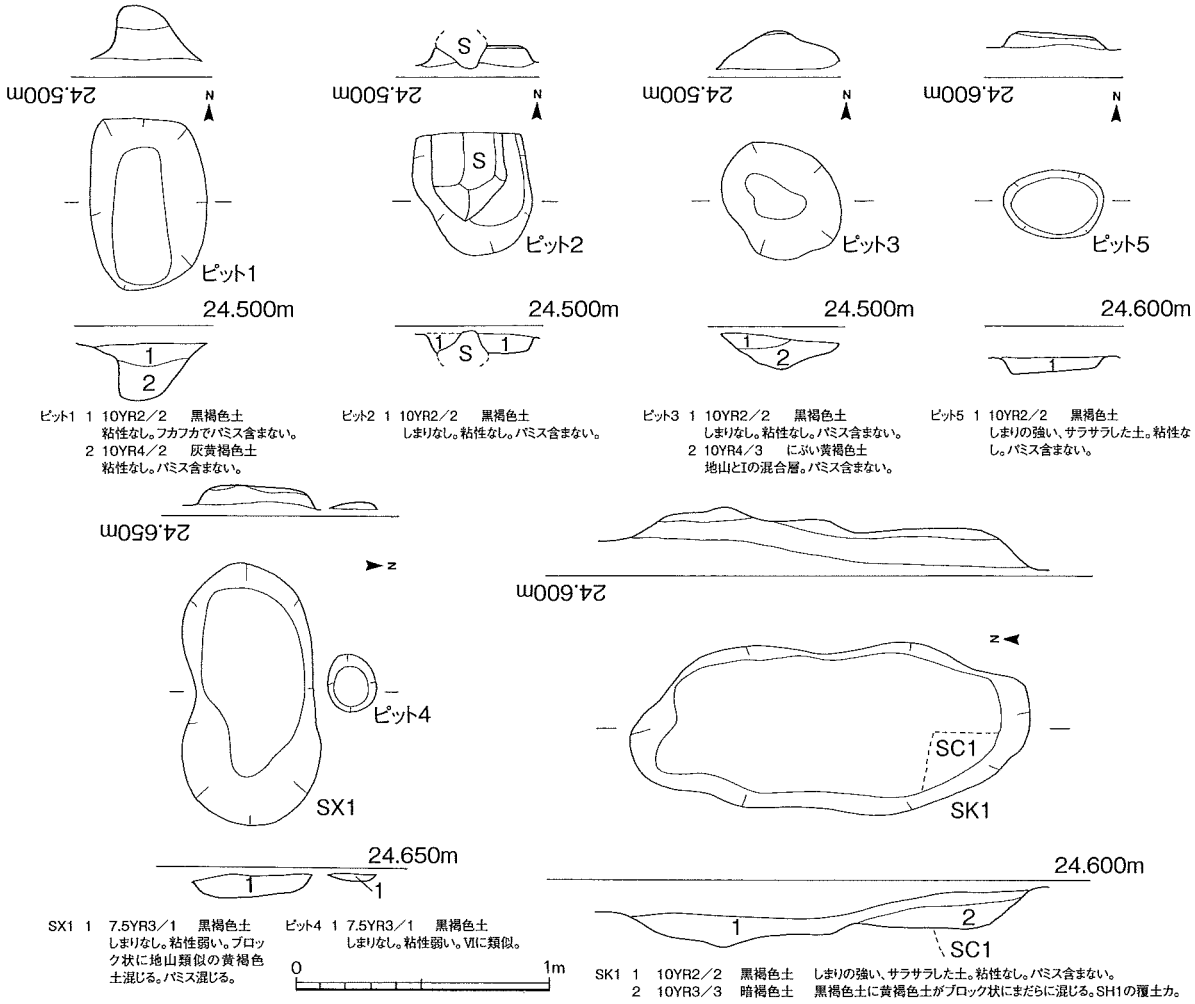


SC2①	10YR3／2	黒褐色土	しまりなし。粘性なし。混入物少ない。
②	2.5Y4／6	オリーブ褐色土	しまりなし。粘性なし。混入物少ない。
③a	10YR3／2	黒褐色土	しまりなし。粘性なし。パミス混じる。
③b	2.5Y6／6	明黄褐色土	しまりなし。粘性なし。混入物少ない。
SC3①	10YR2／1	黒色土	上面は固くしまっている。 黒褐色土に黄褐色土がまだらに混じる。パミスが多く混じる。
②	2.5Y5／4	黄褐色土	黄褐色土と黒褐色土の混合層。やや砂質をおびる。 しまりなし。粘性なし。パミス混入。
③	2.5Y6／6	明黄褐色土	しまりなし。粘性なし。パミスを含むものの、量は少ない。
ピットカ	2.5Y4／2	暗黄灰色土	しまりなし。粘性なし。黒褐色土と黄褐色土の混合層。
Ⅴ	10YR4／2	灰黄褐色土	しまりなし。粘性なし。パミス混じる。
Ⅵ	10YR3／2	黒褐色土	よくしまる。パミスが多量に混入。
Ⅵ′	10YR4／6	褐色土	よくしまる。パミスを多量に含む。Ⅵの変色した層。



0　1m

第29図　SC1～3十字トレンチ土層図（1/30）



第30図　下宮遺跡個別遺構実測図（1/30）

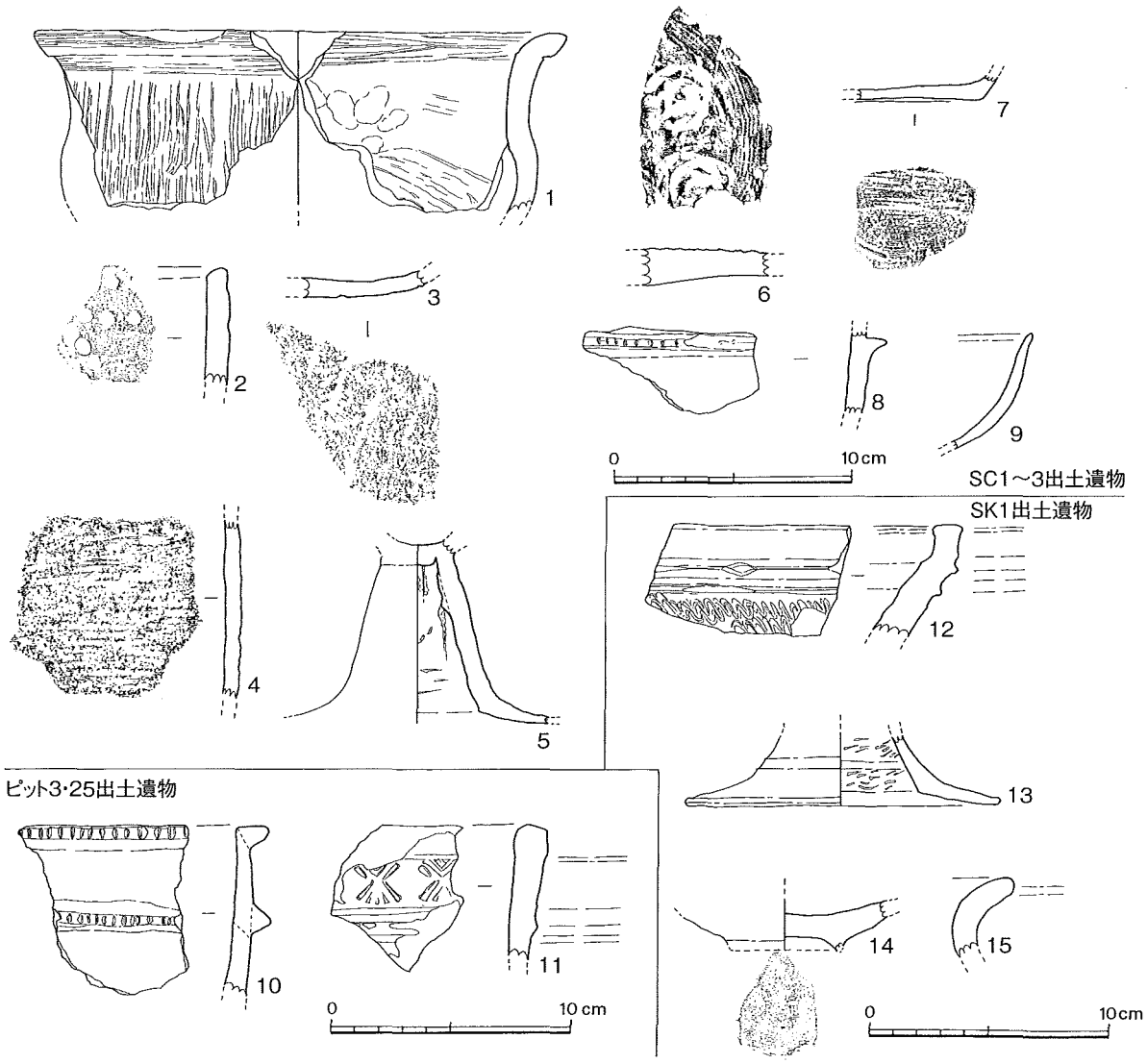
乱に，南北をSC1とSC3に切られているためプランは不明である。掘り込み面の標高は約24.4mで，床面の標高は24.2mである。二段のテラスを配し，床面にピット1基を検出した。ピット内の覆土内からは土師器の坏（第31図9）が出土している。SC3は西側を削平され，東側は調査区壁面にもぐっている。掘り込み面の標高は約24.4m，床面標高は約24.1mである。床面と思われる面ではピット2基を検出した。貼床らしきものは検出できず，掘削面をそのまま床面としているようである。ピットの覆土内からは土師器の高坏（第31図5）が出土してる。

第６表　遺構観察表①

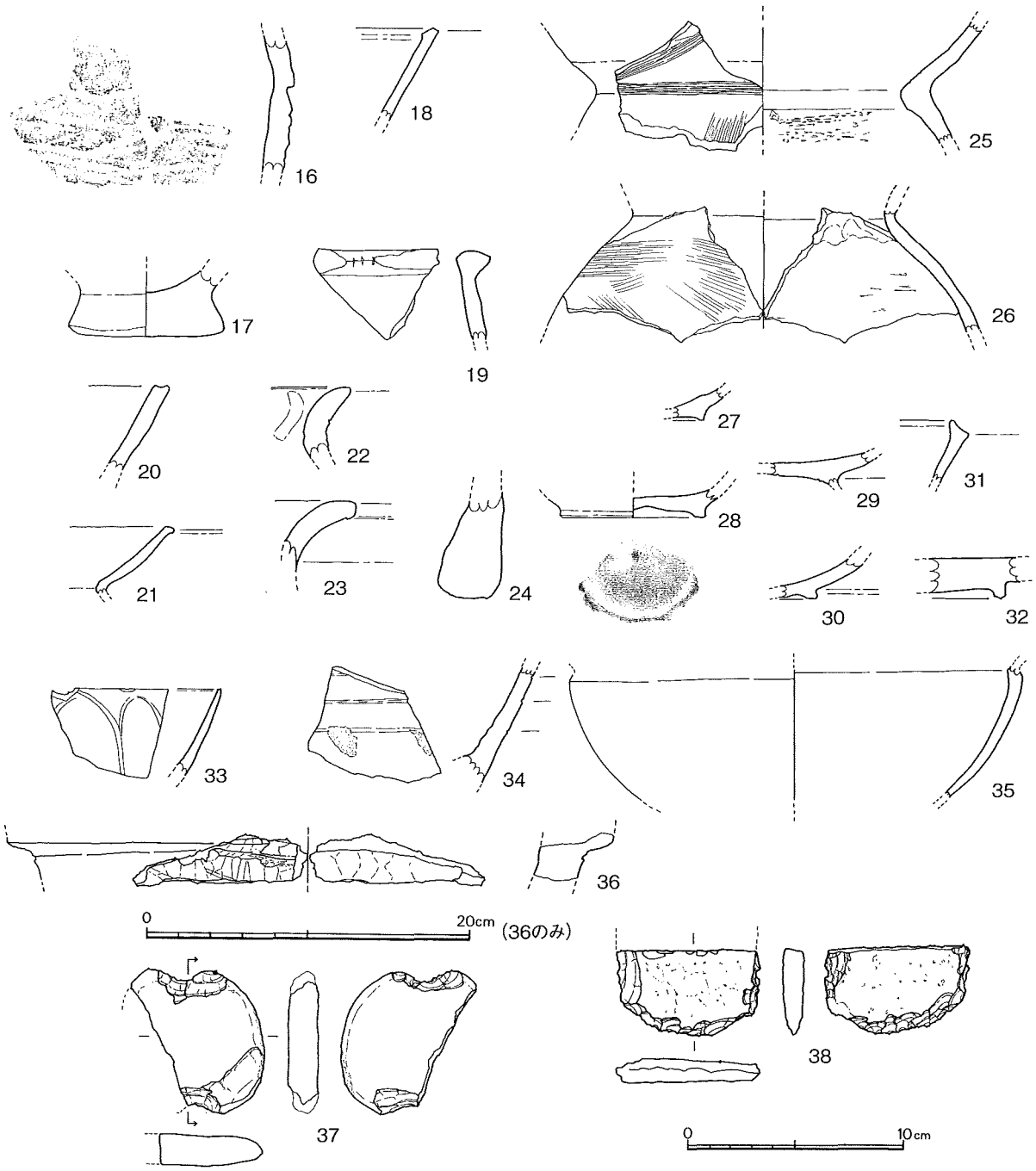
遺構番号	グリッド	時期	掘込み面	長軸(cm)	短軸(cm)	床面標高(m)	備考
ピット1	1A	中世	－	68	46	24.22	
ピット2	1A	中世	－	49	46	24.39	北壁にもぐる
ピット3	1A・1B	中世	－	50	40	24.33	
ピット4	3A	－	Ⅳ層	23	19	24.60	
ピット5	3A	－	Ⅳ層	40	27	24.42	
ピット6	7B	－	－	20	18	24.22	
ピット7	8B	－	－	32	27	23.78	壁にもぐる
ピット8	7A・7B	－	－	25	22	24.28	
ピット9	7A	－	－	22	19	24.25	
ピット10	7B	－	－	26	24	24.17	
ピット11	7B	－	－	23	16	23.05	ピット10に切られる
ピット12	7B	－	－	25	22	24.22	
ピット13	7B	－	－	30	30	24.24	
ピット14	7A	－	－	16	6	24.24	東壁にもぐる
ピット15	7B	－	－	37	24	24.31	
ピット16	7B	古代ヵ	Ⅵ'層	20	9	24.29	東壁にもぐる
ピット17	7B	－	－	28	26	24.14	
ピット18	7B	－	－	28	20	24.20	

第6表　遺構観察表②

遺構番号	グリッド	時期	掘込み面	長軸(cm)	短軸(cm)	床面標高(m)	備考
ピット19	7B	—	—	31	28	24.32	
ピット20	6B・7B	—	—	36	20	23.92	
ピット21	6B	—	—	25	18	24.05	
ピット22	6B	—	—	17	13	24.30	
ピット23	8A	—	—	23	20	23.71	
ピット24	8A	—	—	42	34	23.80	
ピット25	7B	弥生	Ⅶ層	40	20	23.95	
ピット26	6B			23	20	24.17	
ピット27	7B	弥生	Ⅶ層	27	25	24.05	
ピット28	7B	弥生	Ⅶ層	21	11	24.05	東壁にもぐる
ピット29	7B	弥生	Ⅶ層	35	18	23.90	西壁にもぐる
ピット30	7B	弥生	Ⅶ層	28	26	24.00	
ピット31	7B	弥生	Ⅶ層	72	66	23.95	
ピット32	7B	弥生	Ⅶ層	25	20	24.10	
ピット33	9B	—	—	37	30	—	
ピット34	9B	—	—	41	18	—	東壁にもぐる
ピット35	9B	—	—	32	30	—	
ピット36	7B	弥生	Ⅶ層	25	10	23.74	西壁にもぐる
ピット37	7B	弥生	Ⅶ層	17	15	24.11	
ピット38	7B	弥生	Ⅶ層	15	12	24.07	
ピット39	7B	弥生	Ⅶ層	23	20	24.02	
ピット40	7B	弥生	Ⅶ層	20	7	24.17	東壁にもぐる
SK1	4A	古代		157	62	24.34	
SK2	6B	古代	Ⅵ'層	100	55	24.30	撹乱に切られる
SK3	7B	—	—	100	40	—	下端無し
SX1	3A		Ⅳ層	104	45	24.53	
SC1	4A・4B	古代	Ⅳb層	450	(450)	24.30/24.00	テラス有り
SC2	5B	古代	Ⅳb層	—	—	24.30	
SC3	5B	古代	Ⅳb層	350	—	24.20	
SC2-ピット1	5A	古代	Ⅵ層	17	16	24.04	
SC3-ピット1	5A	古代	Ⅵ層	58	42	24.24	東壁にもぐる
SC3-ピット2	5B	古代	Ⅵ層	55	33	24.26	



第31図　下宮遺跡遺構出土遺物（1/3）



第32図　下宮遺跡層位出土遺物（1/3・1/4）

(4) 遺物（第31・32図）

調査では，縄文時代晩期，弥生時代中期，古代・中世の遺物がコンテナ４箱分出土した。今回は，図化に耐えうる38点について図面を掲載した。土器，陶磁器類は第７表に観察をまとめた。

特徴のある遺物に関しては，以下に記した。

SC1～SC3出土遺物（第31図1～9）

1は土師器の甕。口縁部内外面ともに横方向の細かいハケ目が施され，外面頸部以下には縦方向の荒いハケ目がみられる。内面にはユビオサエが施される。SC1-①層出土。**3**，**4**は縄文晩期土器。**3**はSC1-②層出土。底部に組織痕がみえる。**4**はSC3-①層出土。外面には横方向の条痕が施される。

5は土師器の高坏。SC3-ピット1出土。内面にケズリ痕が残る。6は須恵器SC1-①層出土。甕の底部か。内面には同心円状の当具痕が見られ，胴部とのつなぎ目はナデを施す。

ピット出土遺物（第31図10・11）

10は弥生時代土器。ピット25出土。口縁部，胴部に刻目突帯を巡らせる。甕の甲段階か。11は瓦質の火鉢。ピット3出土。外面には印花のスタンプ文を施す。

SK1出土遺物（第31図12～15）

12は須恵器。壺の口縁部。外面に櫛描の波状文を巡らす。13は土師器。高坏脚部。

層位出土遺物（第32図16～38）

19は弥生土器。Ⅳ層出土。口縁部の刻目突帯を巡らす。22・23は土師器の甕。撹乱出土。24は竈の脚部。Ⅳ層出土。25，26は古式土師器の甕。宮崎編年古墳Ⅱ期（註1）か。25はⅤ層出土。頸部のみ残存。外面にはハケ目が残り，内部屈曲部以下には横方向のケズリが施される。26はⅣ層出土。肩部のみ残存。外面にはハケ目がみられ，口縁部との接合部分にはユビオサエが施される。34は陶器。Ⅳ層出土。外面に砂目が残る。中国製か。35は縄文時代晩期土器。撹乱出土。精製の浅鉢。36は滑石製石鍋。SC1-①層出土。鍔上半分が欠損。37，38は石器。37は石錘。石材は砂岩。SC1-①層出土。38は扁平型打製石斧。安山岩製。刃部のみ残存。Ⅲ層出土。

【註】

1.宮崎貴夫2005「弥生土器，古式土師器の編年案」『原の辻遺跡総集編Ⅰ』原の辻調査事務所調査報告書第30集

第７表　出土遺物観察表

図版番号	番号	出土層位	種別	器種	部位	口径(cm)	底径(cm)	色調（土器のみ）	備考
第31図	1	SC1-①	土師器	甕	口縁	23	－	にぶい黄褐色（10YR5/4）	
	2	SC1-②	土器	鉢	口縁	－	－	にぶい黄褐色（10YR5/4）	外面に円状の刺突
	3	〃	土器	－	底部	－	－	外：にぶい黄褐色（10YR5/4）	底部に組織痕
								内：明黄褐色（10YR6/6）	
	4	SC3-①	土器	－	胴部	－	－	明黄褐色（10YR6/6）	外面に条痕
	5	SC3-ピット1	土師器	高坏	脚部	－	－	〃	内部にケズリ
	6	SC1-①	須恵器	－	底部	－	－		内面：タタキの痕，ナデ
	7	〃	土師器	坏	底部	－	－	にぶい黄褐色（10YR5/4）	底部にハケ目
	8	SC1-②	土器	－	胴部	－	－	明黄褐色（10YR6/6）	刻目突帯
	9	SC2-ピット1	土師器	坏	口縁	－	－	〃	
	10	ピット25	土器	甕	口縁	－	－	にぶい黄褐色（10YR5/4）	口縁とその下部に2条の刻目突帯
	11	ピット3	瓦質土器	火鉢	口縁	－	－	黒褐色（10YR3/1）	
	12	SK1	須恵器	－	口縁	－	－		
	13	〃	土師器	－	脚部	－	13	黒褐色（10YR3/1）	
	14	〃	〃	高台坏	高台	－	4.4	明黄褐色（10YR6/6）	高台内に『山』の線刻カ
	15	〃	〃	甕	口縁	－	－	〃	
第32図	16	Ⅳ	土器	深鉢	胴部	－	－	褐色（10YR4/4）	外面の条痕
	17	〃	〃	深鉢	底部	－	7	にぶい黄褐色（10YR5/4）	底部に条痕
	18	撹乱	〃	浅鉢	口縁	－	－	黒褐色（10YR3/1）	縄文晩期精製土器
	19	Ⅳ	〃	－	〃	－	－	明黄褐色（10YR6/6）	口縁に刻目突帯
	20	Ⅴ	土師器	坏	〃	－	－	〃	
	21	撹乱	〃	－	〃	－	－	〃	
	22	〃	〃	甕	〃	－	－	にぶい黄褐色（10YR5/4）	
	23	〃	〃	〃	〃	－	－	〃	
	24	Ⅳ	土器	竈	脚部	－	－	〃	
	25	Ⅴ	土師器	甕	頸部	－	－	明黄褐色（10YR6/6）	外面ハケ目，内面下部にケズリ
	26	Ⅳ	〃	〃	肩部	－	－	黒褐色（10YR3/1）	外面にハケ目，内面にケズリ
	27	〃	土師器	高台坏	高台	－	－	明黄褐色（10YR6/6）	
	28	十字トレンチ	黒色土器	碗	高台	－	7	内：黒褐色（10YR3/1） 外：明黄褐色（10YR6/6）	内黒
	29	Ⅳ	〃	〃	〃	－	－	黒褐色（10YR3/1）	両黒
	30	撹乱	土師器	〃	高台	－	－	にぶい黄橙色（10YR7/4）	外面：回転を利用したヘラ削り
	31	〃	須恵器	捏鉢	口縁	－	－		
	32	〃	青磁	碗	高台	－	－		龍泉窯系青磁碗
	33	Ⅲ	〃	〃	口縁	－	－		鎬蓮弁，龍泉窯系青磁碗
	34	Ⅳ	陶器	壺カ	底部	－	－		側面に砂目が付着，中国製カ
	35	撹乱	土器	浅鉢	肩部	－	－	黒褐色（10YR3/1）	縄文晩期

4章　ま　と　め

稗田原遺跡Ｂ地点（第33図）

調査では，旧石器時代から中世に至るまでの遺物が出土した。特に中世に関して良好な包含層を確認できた。ここでは，B地点で検出された自然流路（SD1・2）についての若干の見解を述べたい。

本遺跡で過去に行われたすべての発掘調査において河道，土石流路，自然流路，などと報告された火山活動による自然災害の爪痕が検出されている。それらは古代・中世段階のもので，この時期に本遺跡は大規模な被害を受けたことが予想される。中でも注目すべきは第5次調査で検出された403号河道である。最大幅550cm，深度約20～60cmで，角礫を主体とした土石流とともに奈良時代の遺物がまとまって出土している。調査を担当した川口（1999）は，「土石流はすくなくとも平安時代のいずれかの時期に発生したものと考えられる」とし，もと存在した河川が平安時代に発生した土石流により埋没したとの考察を述べている。第5次調査地点では，過去の調査地点の中でも，今回の8次調査地点と立地環境が類似している。ここで，B地点検出のSD1・2と403号河道との比較を行いたい。

今回検出したSD1・2はXI層を削るように③層であるⅧ～Ｘ層が堆積し，②，①層と堆積していったことが伺える。進行方向は北東方向である。

③層は，遺物を含まない黄色砂礫層（Ⅷb～Ｘh層）と古代・中世の遺物を多量に含む明褐色砂礫層（Ⅷa層）に大別される。調査において，この2つの層は流路を構成する最下層と認識して，一連で掘り下げを行ったが，遺物の有無や砂粒の大きさ，しまり具合の違いから堆積の時期差が考えられる。

また，黄色褐色砂質土であるＸ層は，しまりの強い砂・土で構成されておりその様相から約4,000年前に眉山を起源として発生し，広範囲に渡り確認されている六ツ木火砕流の可能性が高い。

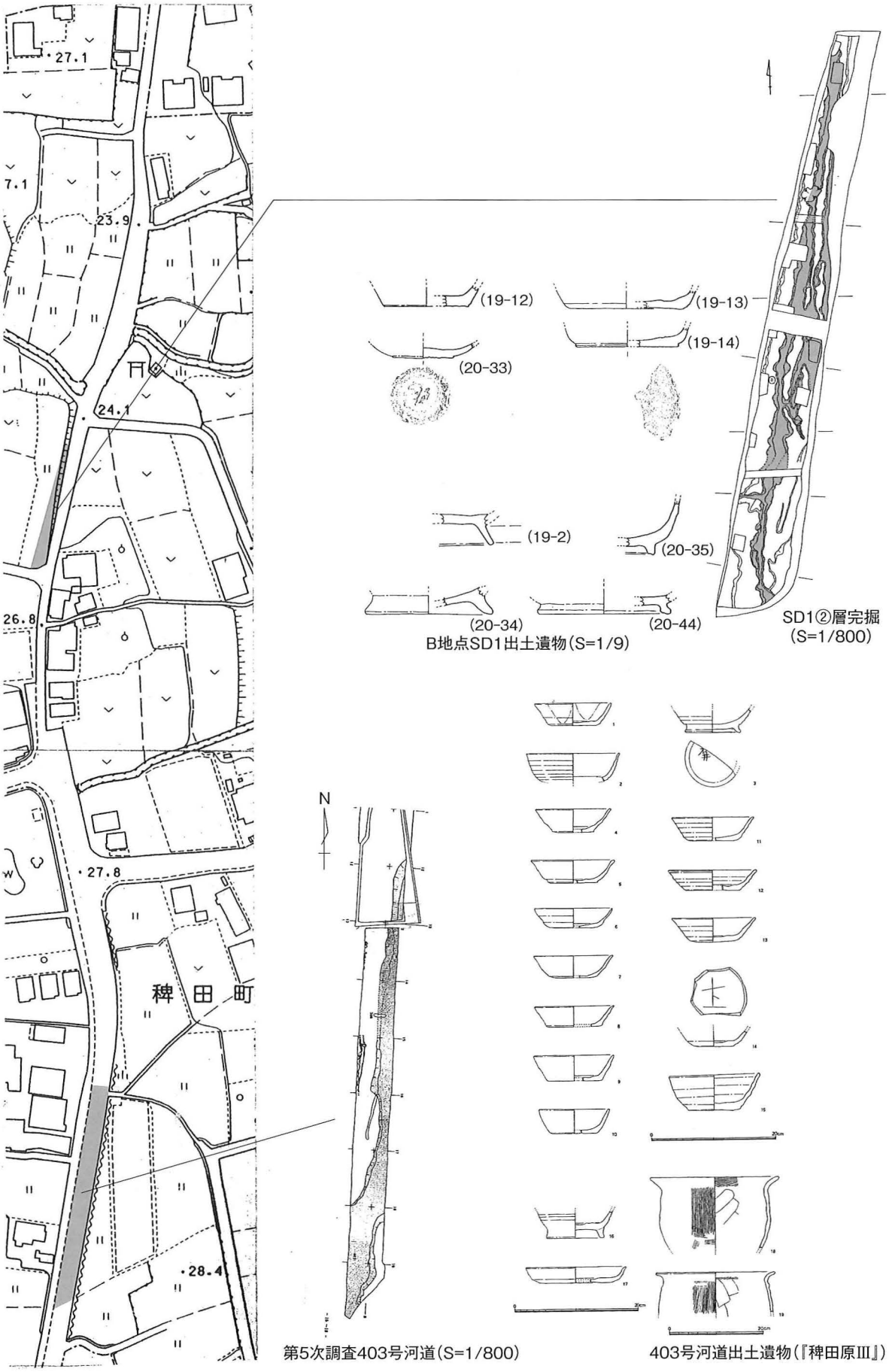
一方，403号河道は六ツ木火砕流の流土が水成堆積した後，その堆積層を河道状に削りながら北東の海岸方向に土石流が進行している。両者の性格は，自然流路，土石流路と見識の違いはみられるものの，六ツ木火砕流堆積層を削り構成されている点で共通している。ただし，古代を主体として，中世の遺物を含まない403号河道に対し，SD1・2は古代の遺物を含むものの，龍泉窯系青磁碗など中世遺物出土もみられる点が異なる。しかし，第33図に示したように，SD1・2出土の坏や高台坏のなかには，403号河道内出土のものと類似する特徴を持つものもみられる。時間的制約から，出土遺物中の，古代と中世遺物の割合を数値化するところまでは至っていない。その割合次第では，中世段階としたSD1・2の③層は古代までのぼる可能性も捨てきれない。つまり，共通する特徴をもつ遺物の出土や，位置関係からみて，B地点が403号河道の延長部にあたる可能性が考えられる。

以上，稗田原遺跡B地点のまとめとしたが，本遺跡の時期の違いによって生活箇所が異なるという複雑な性格は，このような自然災害が一つの要因と考えられる。今後は，そのことを踏まえたうえで，遺跡全体の把握につとめていく必要があるだろう。

下宮遺跡

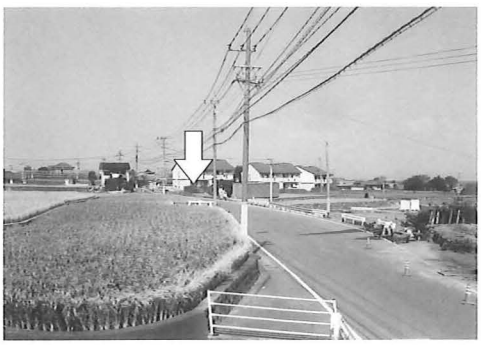
今回の調査で弥生時代，古代・中世の生活面が存在していることがわかった。特にSCとした竪穴状遺構は古代の住居址の可能性が高い。残念ながら調査区西側に入る撹乱により，その全体像を把握できなかった。今後の調査事例の増加により，その遺跡の性格が明らかになることを期待したい。

【参考文献】　川口洋平1999『稗田原遺跡　Ⅲ』長崎県文化財調査報告書第152集　長崎県教育委員会



第33図　稗田原遺跡B地点SD1・2，403号河道位置図

下宮遺物

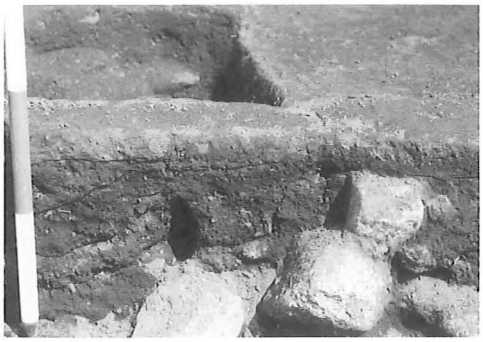


①調査区遠景（南から）

②調査風景（北から）

③東壁土層断面（西から）

④十字トレンチ①（北西から）



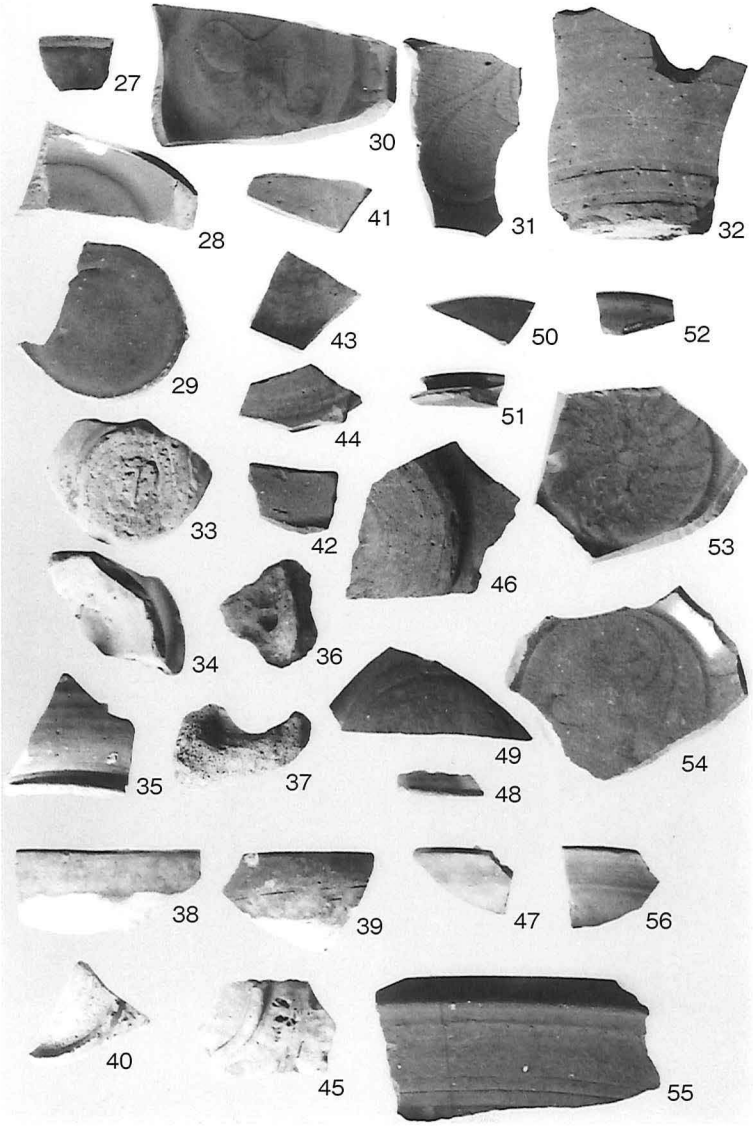
⑤十字トレンチ②（西から）

⑥SC1～3完掘状況（北から）

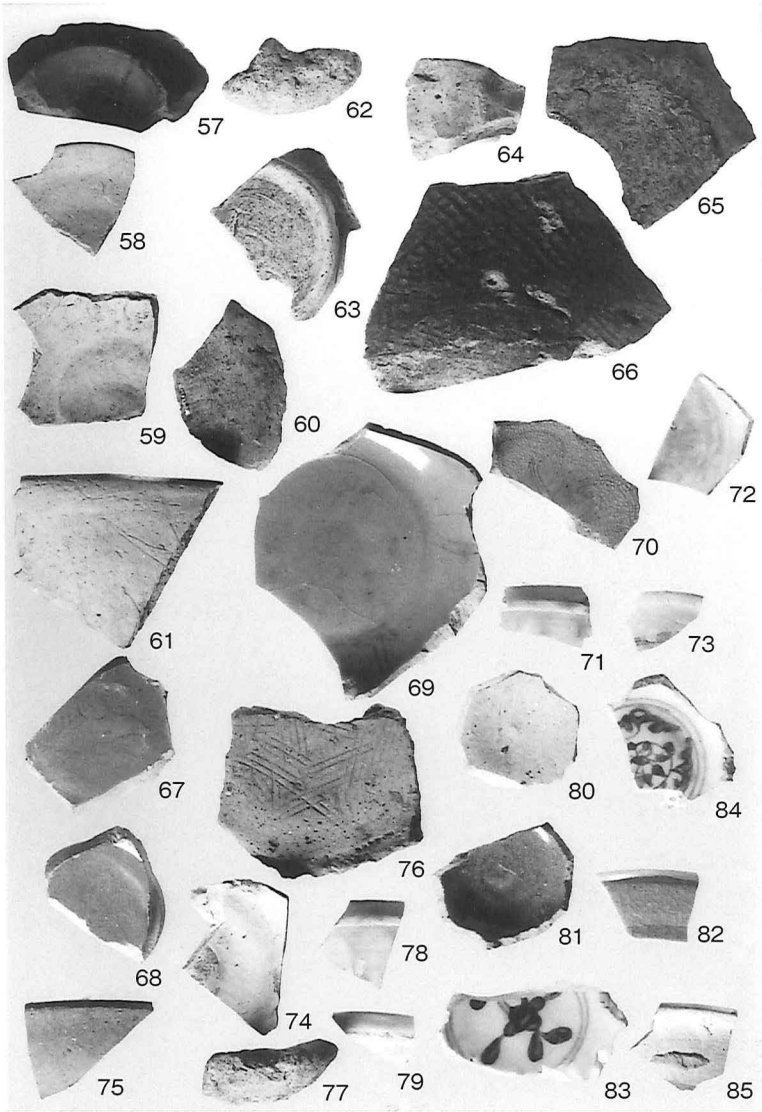
⑦7B･8B区　Ⅶ層遺構完掘状況（北西から）

⑧遺物出土状況

稗田原遺跡B地点

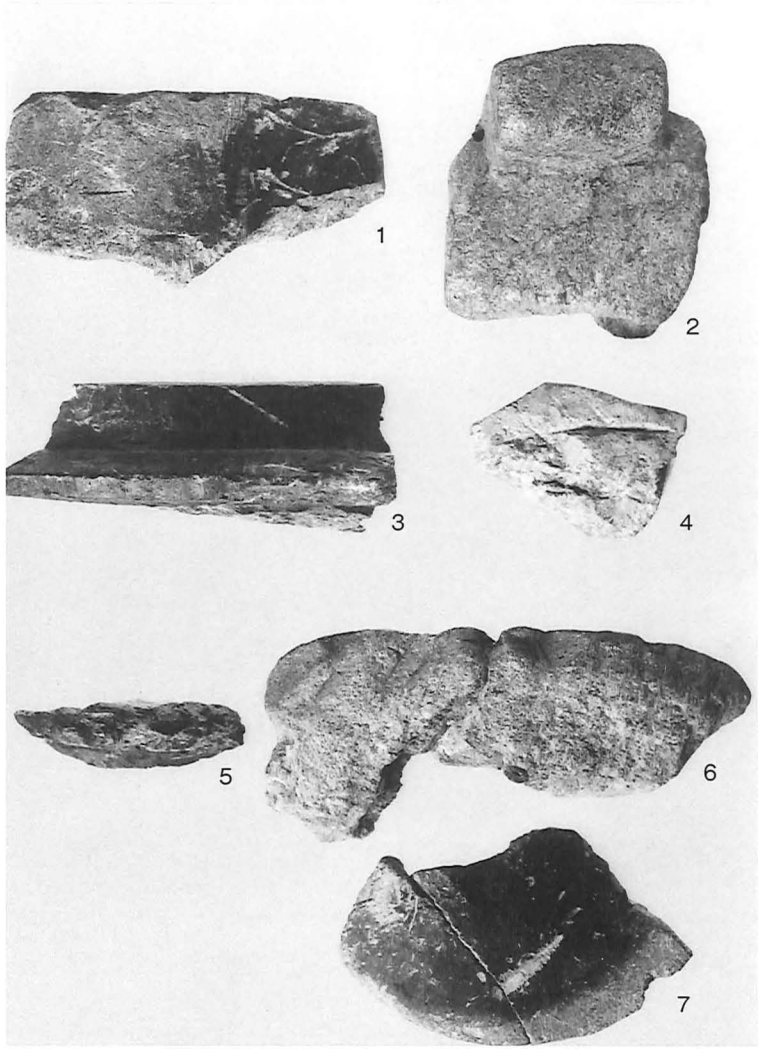


①出土遺物①（第20図）



②出土遺物②（第21図）

図版 5



①出土遺物①（第22図）

②出土遺物②（第23図）

報告書抄録

ふりがな	ひえだばるいせき・しもみやいせき
書名	稗田原遺跡Ⅵ・下宮遺跡
副書名	一般県道野田島原線道路改良工事に係る埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	長崎県文化財調査報告書
シリーズ番号	第194集
編著者名	平田賢明
編集機関	長崎県教育委員会
所在地	〒850-8570　長崎市江戸町2-13　TEL095-894-3383
発行年月日	西暦2007年3月30日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
ひえだばるいせき 稗田原遺跡	しまばらしひえだちょう 島原市稗田町	3	92-74	32° 48′ 29″	130° 21′ 10″	060220～ 060303/ 061030～ 061205	372㎡	県道拡幅 工事
しもみやいせき 下宮遺跡	しまばらししもみやちょう 島原市下宮町	3	92-75	32° 48′ 37″	130° 21′ 13″	060904～ 060927	199㎡	県道拡幅 工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
稗田原遺跡	遺物包蔵地	古代・中世	溝状遺構1条 自然流路2条	古代･中世の土師器, 須恵器 滑石製石鍋 鉄滓	
下宮遺跡	遺物包蔵地	弥生時代 古墳時代 古代	ピット多数 竪穴状遺構 3基 土坑3基	弥生土器 古式土師器 土師器, 須恵器	

要約	稗田原遺跡は，標高約20～30mの火山性扇状台地に立地する複合遺跡。中世段階と考えられる溝状遺構1条と3層からなる自然流路2条を検出。自然流路内からは方形状の椀形鉄滓や，滑石製石鍋など古代・中世の遺物が出土している。下宮遺跡は，標高約20～25mの火山性扇状台地に立地する。古代の住居跡の可能性が高い竪穴状遺構3基，土坑3基の他，弥生時代と考えられる柱穴群を検出した。

長崎県文化財調査報告書　第194集

稗田原遺跡Ⅵ・下宮遺跡

― 一般県道野田島原線道路改良工事に係る埋蔵文化財発掘調査報告書 ―

平成19年（2007）3月30日

発　行　　長崎県教育委員会
　　長崎市江戸町2-13

印　刷　　株式会社インテックス
　　長崎市幸町6番3号